



# 〈考え、表現し、発信する力〉を培う ライティング/キャリア支援

2015(平成27)年度 報告書

2012(平成24)年度採択 文部科学省大学間連携共同教育推進事業  
〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング/キャリア支援  
2015(平成27)年度 報告書

[お問い合わせ先]

関西大学教育開発支援センター  
〒564-8680

大阪府吹田市山手町3-3-35  
TEL:06-6368-1513 FAX:06-6368-1514  
ctlgp02@ml.kandai.jp  
<http://www.kansai-u.ac.jp/renkeigp/>

津田塾大学ライティングセンター  
〒187-8577

東京都小平市津田町2-1-1  
TEL/FAX:042-342-5129  
WritingCenter@tsuda.ac.jp  
<http://twc.tsuda.ac.jp/renkeigp/>





## 目 次

	はじめに	2
	取組概念図	4
	実施体制	6
	年次計画	7
	組織	8
I	取組全体の概要	9
II	文部科学省による中間評価を受けて	17
III	2015（平成27）年度の取組の概要	23
IV	関西大学ライティングラボの取組	35
V	津田塾大学ライティングセンターの取組	59
VI	eポートフォリオシステム開発部会の取組	73
VII	教職員合同FD・SD研修会、TA合同研修会	87
VIII	シンポジウム報告	93
IX	評価指標部会の取組	99
X	研究成果報告	119
XI	取組に対する評価と今後の課題	129

## はじめに

文部科学省の2012（平成24）年度大学間連携共同教育推進事業において、津田塾大学と関西大学が申請した取組「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」が採択されました。本事業は、2012（平成24）年度より5年間かけて実施します。両大学が多様なステークホルダーと密接に連携しながら、総合的なライティング／キャリア支援の構築をはかり、学士課程教育の質的転換と有為な人材育成に欠かせない、〈考え、表現し、発信する力〉を育成していきます。

これまで関西大学は「学の実化（じつげ）」、すなわち学理と実際との調和を学是とし、高い専門的学識を修めつつ、その学識を実社会において役立てることのできる人材の育成に努め、商都大阪に位置する大学にふさわしい、社会の発展を力強く牽引する役割を担ってきました。2009（平成21）年に公表された長期行動計画では、この学是を現代的に捉えなおし、本学の使命を「考動力あふれる人材」の育成と位置づけています。関西大学では、このような「考動力あふれる人材」の育成を目指し、それにふさわしい教育プログラムの開発実践に努めてきました。今回の連携取組で育成を目指している〈考え、表現し、発信する力〉とは、まさに自らの頭で自主的によく考え、自律的かつ積極的に行動する「考動力」の源となる力だといえるでしょう。

関西大学では、このような教育理念の下で、現代GP、教育GP等の優れた教育手法の実践に取り組んできました。2010（平成22）年には、関西大学文学部の申請した文部科学省大学教育・学生支援推進事業大学教育推進プログラム「文学士を実質化する〈学びの環境リンク〉—卒論ラボ・スケール・カードの有機的な連携による“気づき”を促す仕組み作り—」が採択されました。この取組は、卒業論文作成を核に、文学士教育の環境整備を目指すものであり、その取組の一環として開設した「卒論ラボ」の名称を、2012（平成24）年度より「ライティングラボ」に改め、支援対象を全学に拡大しています。今回の連携事業では、このライティングラボを、ライティング／キャリア支援という新たな理念の下にさらに進化させ、現代社会のニーズに適合した発展をさせていきます。

2012（平成24）年10月に実質的なスタートを切った大学間連携共同教育推進事業は、2015（平成27）年1月に折り返し点を迎え、文部科学省による中間評価が実施されました。本取組の評価はA評価であり、事業が計画どおり進展し、最終的な目標を達成しうる取組であると評価していただきました。2015（平成27）年度の取組では、この中間評価を踏まえ、取組のさらなる改善を図るとともに、最終年度に向けて、ループブックやeポートフォリオをはじめとするライティング／キャリア支援環境のさらなる充実に努めました。今後も、両大学はステークホルダーと密接に連携しながら、効果的な支援システムを構築し、全国に普及させていくよう努めてまいります。

平成28年3月  
事業推進代表者  
関西大学学長 楠見 晴重

津田塾大学は「個性を重んじる少人数教育と高度な英語教育により、高い専門性と豊かな教養を身につけたオールラウンドな女性を育てる」という教育理念のもとに「書く力」を養う教育を伝統的に重視して参りました。

2008（平成20）年度には、文部科学省「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」に採択された「社会貢献は書く力とプロジェクト推進力から」の取組により、学生の「書く力」を総合的に養成してゆく場としてライティングセンターを設立しました。以来、学生一人ひとりの「書く力」を磨くために個別指導を行うほか、キャリア世界についての理解を深めるべく様々な分野で活躍する専門家を講師とする講座を開催するなど、多様な角度から学生のコミュニケーション能力の向上をはかり、社会に貢献し、リーダーシップを発揮できる人材の育成に尽力し続けております。

関西大学と実施する大学間連携共同教育推進事業「＜考え、表現し、発信する力＞を培うライティング／キャリア支援」も4年目を迎え、ますます活動の幅を広げています。昨年9月に津田塾大学で開催された両大学主催のシンポジウム「大学教育における『書く力』」では、取組4年目として「書く力」をどう測り、どう伸ばすかをテーマに、いま開発中のルーブリックをライティング教育に活用するという可能性と課題を探りつつ、そもそも学生が身につけるべき「書く力」とはどのようなものか、社会で求められている力とどうつながるのかなど幅広い視点からの検討を行いました。その様子はTV会議システムにより、リアルタイムで関西大学に中継されました。また、ライティングセンター設立以来行われている「書くということと私」講演会は、今年度で24回を数えました。講師に卒業生を迎え、学生がより身近に感じられるロールモデルを提示し、好評を博しました。さらに「女性のリーダーシップから学ぶ」講演会においては、前期はWebメディアの世界で活躍している卒業生三代川律子氏を、後期は2015年津田梅子賞を受賞したIBMフェロー浅川智恵子氏を講師にお迎えしました。その分野を切り拓いてきたパイオニアならではの講演とそれに続く質疑応答は、女子学生のエンパワーメントにつながるものになりました。

今後も、津田塾大学は「ライティング支援」と「キャリア支援」を融合しつつ、さらに幅広い発信力の涵養に努めて参ります。関西大学との密接な連携のもと、より効果的なプログラムを展開することによって、21世紀の男女共同参画社会を推進する人材を育成したいと存じます。

平成28年3月  
連携校  
津田塾大学学長 國枝 マリ

# 取組概念図

学士課程教育の質的転換と有為な人材育成のために欠かせない〈考え、表現し、発信する力〉の育成を、学生のキャリア形成を視野に入れた総合的なライティング支援（ライティング／キャリア支援）を通して実現する。そのために、関西大学・津田塾大学がステークホルダーと密接に連携して、ライティングセンターを核にした効果的な支援システムを構築し、全国に波及させていく。

## 取組内容

### 1 ライティングセンターを中心とした支援体制の再構築

- ライティングセンターの拡張と充実
- TAとピアサポートによる支援体制の整備
- 教職員FD、講演会、セミナーの実施

### 2 eポートフォリオシステムの開発

- すべての取組を一つに結ぶライティング／キャリア支援eポートフォリオシステムの開発

### 3 評価指標の確立

- 客観的評価指標の確立
- 自己評価指標の確立

### 4 カリキュラムとの連携

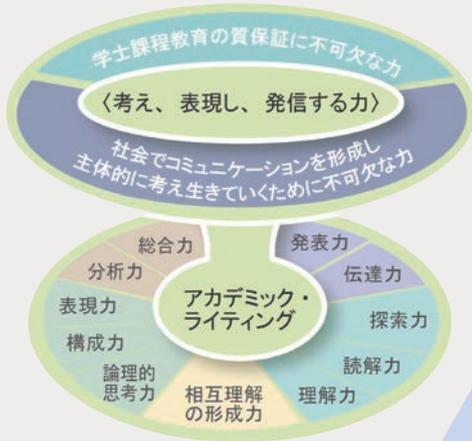
- ライティング／キャリア支援を意識した新タイプの授業開発

### 5 社会との連携

- 高大連携
- 産学官連携

## ライティング/キャリア支援とは…

学生のキャリア形成を視野に入れた  
ライティング支援



## 成果

「主体的学び」の確立による大学教育の質的転換

主体的に考えると同時に  
コミュニケーションを  
形成・深化しうる人材の育成

## 達成目標

- 1 ライティングセンター利用者数の増加
- 2 評価指標に基づいた客観的評価値の上昇
- 3 シンポジウム参加大学の増加
- 4 eポートフォリオシステム利用大学の増加

## ステークホルダー

### 連携

関西大学

津田塾大学

GPによりライティング/  
キャリア支援に取り組んできた  
両大学の個性と強みの融合

## 社会の声を代弁する多様な ステークホルダーからの要請

〈考え、表現し、発信する力〉を  
備えた人材の育成

学会：The Writing Centers Association of Japan  
ライティング支援を大学教育で機能させる

教育委員会：伊丹市教育委員会  
ライティング支援を初等中等教育で活用

国の機関：独立行政法人国立女性教育会館  
男女共同参画社会を推進する人材の育成

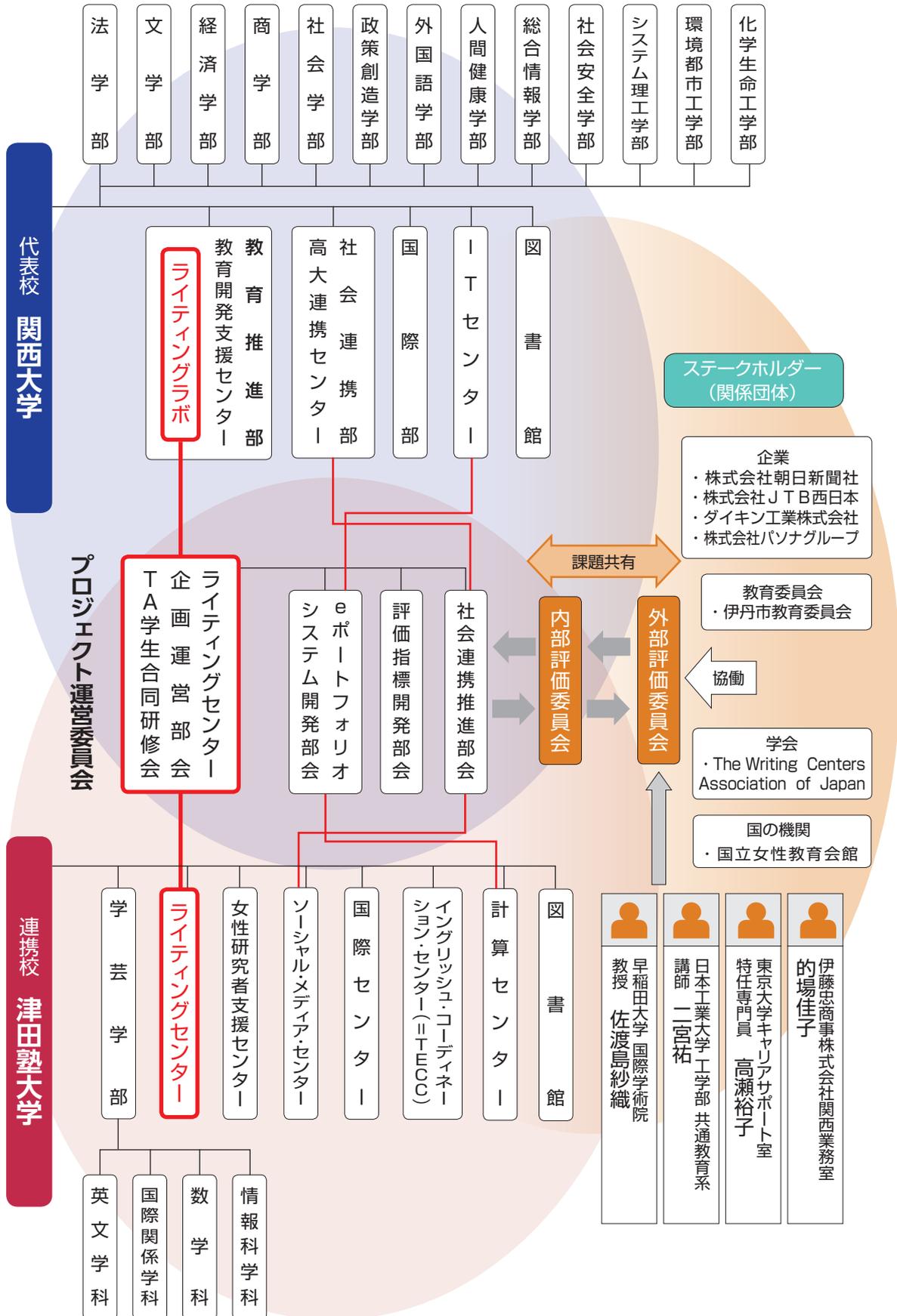
企業：株式会社朝日新聞社、株式会社JTB西日本  
ダイキン工業株式会社、株式会社パナソニック  
これからの社会に貢献できる有為な人材の育成

## 波及

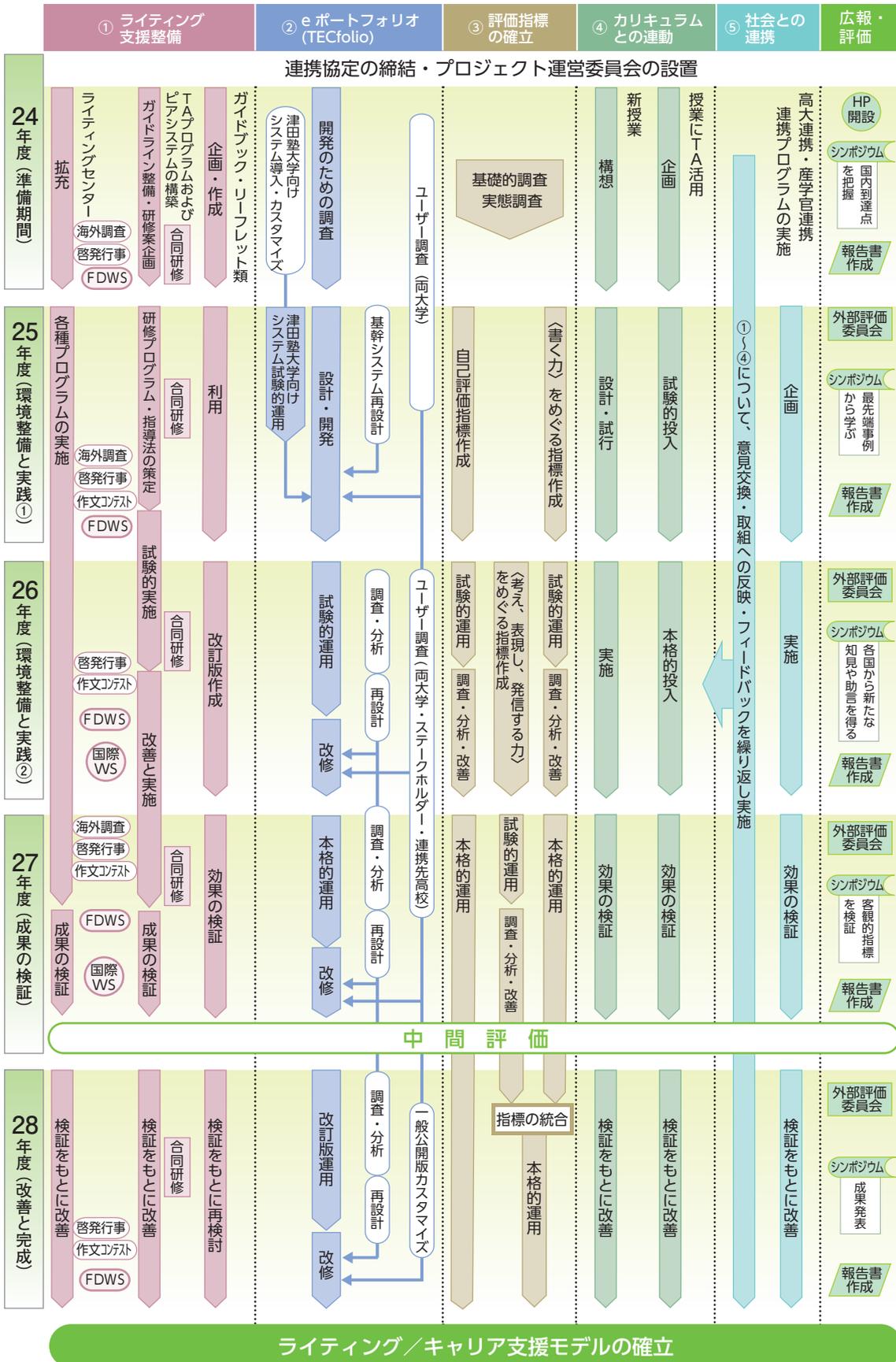
ライティング/  
キャリア支援モデル

日本社会で立ち遅れているライティング/キャリア支援システムの構築

# 実施体制



# 年次計画



## 組織

事業推進代表者	楠見晴重（関西大学学長）
事業推進責任者	林宏昭（関西大学副学長）
取組責任者	関西大学： 中澤務（文学部教授） 津田塾大学：高橋裕子（学芸学部教授）
プロジェクト運営委員会	関西大学： 中澤務（文学部教授）、本村康哲（文学部教授）、 新井泰彦（システム理工学部教授）、池田佳子（国際部教授）、 岩崎千晶（教育推進部准教授）、小林至道（教育推進部特別任用助教）、 西浦真喜子（教育推進部特別任用助教）、毛利美穂（教育推進部特別任用助教）、 長畑俊郎（システム開発課）、石川勝彦（授業支援グループ）、 仁村万喜子（授業支援グループ）、竹中喜一（授業支援グループ）、 宮田将（授業支援グループ） 津田塾大学：高橋裕子（学芸学部教授）、大島美穂（学芸学部教授）、 稲葉利江子（学芸学部特任准教授）、大原悦子（ライティングセンター特任教授）、 飯野朋美（ライティングセンター特任講師）、西村勉（教務課）、 小金純（教務課）、杉崎和美（情報サービス課）
ライティングセンター 企画運営部会	関西大学： 岩崎千晶（教育推進部准教授）、中澤務（文学部教授）、池田佳子（国際部教授）、 小林至道（教育推進部特別任用助教）、西浦真喜子（教育推進部特別任用助教）、 毛利美穂（教育推進部特別任用助教）、石川勝彦（授業支援グループ）、 仁村万喜子（授業支援グループ）、竹中喜一（授業支援グループ）、 宮田将（授業支援グループ） 津田塾大学：高橋裕子（学芸学部教授）、大島美穂（学芸学部教授）、 稲葉利江子（学芸学部特任准教授）、大原悦子（ライティングセンター特任教授）、 飯野朋美（ライティングセンター特任講師）、 西村勉（教務課）、小金純（教務課）、杉崎和美（情報サービス課）
e ポートフォリオ システム開発部会	関西大学： 中澤務（文学部教授）、本村康哲（文学部教授）、 小林至道（教育推進部特別任用助教）、毛利美穂（教育推進部特別任用助教）、 中芝義之（学術情報事務局）、鎌田正彦（システム開発課）、 長畑俊郎（システム開発課） 津田塾大学：高橋裕子（学芸学部教授）、稲葉利江子（学芸学部特任准教授）、 大原悦子（ライティングセンター特任教授）、 飯野朋美（ライティングセンター特任講師）、杉崎和美（情報サービス課）
評価指標開発部会	関西大学： 中澤務（文学部教授）、小林至道（教育推進部特別任用助教）、 西浦真喜子（教育推進部特別任用助教）、毛利美穂（教育推進部特別任用助教） 津田塾大学：高橋裕子（学芸学部教授）、大原悦子（ライティングセンター特任教授）、 飯野朋美（ライティングセンター特任講師）
社会連携推進部会	関西大学： 新井泰彦（システム理工学部教授）、小林至道（教育推進部特別任用助教）、 西浦真喜子（教育推進部特別任用助教）、毛利美穂（教育推進部特別任用助教） 津田塾大学：高橋裕子（学芸学部教授）、大原悦子（ライティングセンター特任教授）、 西村勉（教務課）
自己点検・評価委員会	関西大学： 中澤務（文学部教授）、小林至道（教育推進部特別任用助教）、 西浦真喜子（教育推進部特別任用助教）、毛利美穂（教育推進部特別任用助教） 津田塾大学：高橋裕子（学芸学部教授）、大島美穂（学芸学部教授）、 大原悦子（ライティングセンター特任教授）
内部評価委員 外部評価委員	内部評価委員：山本雄二（関西大学社会学部教授）、小舘亮之（津田塾大学学芸学部教授）、 トム・ガリー（東京大学教授・The Writing Centers Association of Japan 代表）、 山崎耕介（伊丹市教育委員会） 外部評価委員：佐渡島紗織（早稲田大学国際学術院教授）、二宮祐（日本工業大学）、 高瀬裕子（東京大学キャリアサポート室特任専門員・産業カウンセラー・ キャリアコンサルタント）、的場佳子（伊藤忠商事株式会社関西業務室）
事務担当	関西大学： 石川勝彦（授業支援グループ）、仁村万喜子（授業支援グループ）、 竹中喜一（授業支援グループ）、宮田将（授業支援グループ）、 吉崎裕子（授業支援グループ） 津田塾大学：西村勉（教務課）、小金純（教務課）

# I

## 取組全体の概要

本取組「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」は、2012（平成24）年度から2016（平成28）年度まで、5年間にわたり事業が展開される。

この章では、5年間にわたる連携事業の取組の理念、具体的な取組内容、取組の体制と実施計画などを中心に、その全体像をまとめる。

1. 連携取組の背景
2. 連携取組の目的
3. 連携取組の達成目標
4. 連携取組の成果と波及
5. ステークホルダーとの連携
6. 具体的な取組内容
7. 実施計画
8. 実施体制
9. 評価体制

## 1. 連携取組の背景

2012（平成24）年度大学間連携共同教育推進事業において採択された「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」は、学士課程教育の質的転換と有為な人材育成のために欠かせない〈考え、表現し、発信する力〉を培うためのライティング／キャリア支援体制を、ライティングセンター整備を核にして、総合的に構築する取組である。まず、このような取組が生まれた背景ならびに取組戦略を説明する。

日本は現在、構造変化とグローバル化の渦中にあり、自立した個の確立、男女共同参画社会の推進、生涯学習の拡大などを通じた、持続的で活力ある社会の実現が模索されている。このような社会を作るために必要なのは、世代・立場・性差を超えたコミュニケーションを基盤に、主体的に考え行動し、生涯学び続けていくことのできる人間、すなわち、〈考え、表現し、発信する力〉を備えた人間である。

このような人材の育成を進めていくために、我々は、大学の大量化に対処し、先進的な海外の取組を参考にしつつ、新しい支援体制を構築していかねばならない。このような観点から、たとえば、日本に先んじて大学の大量化が進んだ米国での取組を見ると、ライティングセンターの役割が目される。ライティングセンターは、学部教育の全段階における豊かな学生支援の核となってきたからである。現在でも米国のライティングセンターは進化し続けており、学生に対して様々な知的支援を行っている。

他方、日本では、このような取組は始まったばかりであり、いまだ十分に効果的なシステムを実現できていない。そこで、先行する諸外国の成果を取り入れてシステム整備を行い、効果的な教育を実現することによって、わが国で求められている学士課程教育の質的転換を実現するとともに、社会に求められる〈考え、表現し、発信する力〉を備えた人材を育成していくことが可能となる。このような育成支援システムの構築を求める社会的声は、日本の中にも潜在的に存在している。そこで、本連携取組においてステークホルダーと密接に協働し、連携の輪を作ることによって、大きな社会的声を作り出していくことができる。

関西大学と津田塾大学は、以上のような共通認識に立ち、それぞれの理念と方法に基づいたライティング支援に取り組んできた。本連携取組では、両大学が持つ個性と強みを融合させ、日本の大学教育の環境の中で有効に機能しうる「ライティング／キャリア支援システム」を構築する。

## 2. 連携取組の目的

大学での学びの場を中心に発揮されるライティングの力には、多様な知的能力が分かちがたく統合されている。そこには、資料を検索し読解する力、データを分析し総合する力、自分の見解を論理的に考え表現する力、発表して相手に伝える力、相手とコミュニケーションをとり相互理解を形成する力など、多様な力が含まれている。そのような総合的な知的能力が、〈考え、表現し、発信する力〉である（図1参照）。この力は、大学で学んでいくために不可欠な力であるが、同時に、社会の中でコミュニケーションを形成し、主体的に考え生きていくために不可欠な力でもある。それは学生の人生全体において必要なものであり、その育成は、大学におけるキャリア支援の要になるものだといえる。このようなキャリア支援と密接に結びついたライティング支援が、「ライティング／キャリア支援」である。

本連携取組では、このようなライティング／キャリア支援によって実現される、以下の二つの大きな目的を設定している。

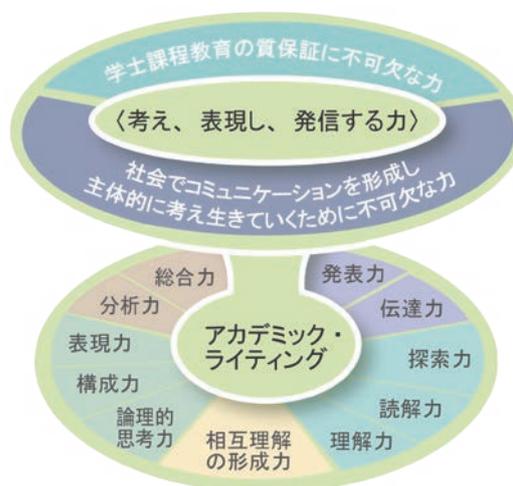


図1：〈考え、表現し、発信する力〉

### ①主体的学びの確立による大学教育の質的転換

ライティングセンターが授業カリキュラムと密接に連携し、個々の学生のニーズに対応したきめ細かいサポートを行うことによって、学生の主体的態度が促進され、学修\*時間の増加を促す。これによって、学士課程教育の質的転換が容易となる。

### ②主体的に考えると同時にコミュニケーションを形成・深化しうる人材の育成

ライティング／キャリア支援の充実により、〈考え、表現し、発信する力〉が培われ、社会に求められる多様な能力が育成されていく。それは、学生のキャリア形成を促し、社会の中で主体的に考えると同時にコミュニケーションを形成・深化しうる人材の育成につながる。

## 3. 連携取組の達成目標

---

本連携取組では、利用学生の増加に加え、客観的指標を用いた実質的な能力向上を目指している。具体的に設定している目標は、次の通りである。

### ①ライティングセンターの利用学生の増加

関西大学のライティングラボと津田塾大学のライティングセンターの延べ利用者数（eポートフォリオ利用者やセミナー参加者を含む）を順次増加させていく。現段階での利用者は、両大学あわせて、全学生数の7%程度であるが、これを支援期間最終年度までに、全学生数の15%にまで伸ばすことを目標とする。

### ②評価指標にもとづく客観的評価値の上昇

本連携取組で作られる評価指標（ルーブリック）を用いて、その運用が開始される平成26年度以降、客観的評価を実施し、その評価値を上昇させる。

### ③シンポジウム参加大学数の増加

本連携取組のシンポジウムの参加大学数を、25校程度に増加させる。

### ④eポートフォリオ利用大学の増加

本連携取組で開発されるeポートフォリオシステムの利用大学数を、10校程度に増加させる。

---

\*本取組においては、基本的に「学修」を用いている。ただし、本報告書では執筆者や講演者の意向により「学修」と「学習」の表記を併用している箇所がある。

## 4. 連携取組の成果と波及

本連携取組の取組成果として、総合的なライティング／キャリア支援の支援体制整備が実現し、上記の目標①「主体的学びの確立による大学教育の質的転換」、および目標②「主体的に考えると同時にコミュニケーションを形成・深化しうる人材の育成」が達成されることになる。

また、本連携取組では、整備されるライティング／キャリア支援体制を、取組終了後に他大学にも提供し、取組成果を全国に波及させていく予定である。そのため、支援期間中に体制維持と全国的普及を目的とした連合組織をつくり、支援期間終了後も引き続き連携協力を続けながら、支援体制の維持・改善と具体的効果の向上を目指すとともに、全国への普及を図っていく（図2）。

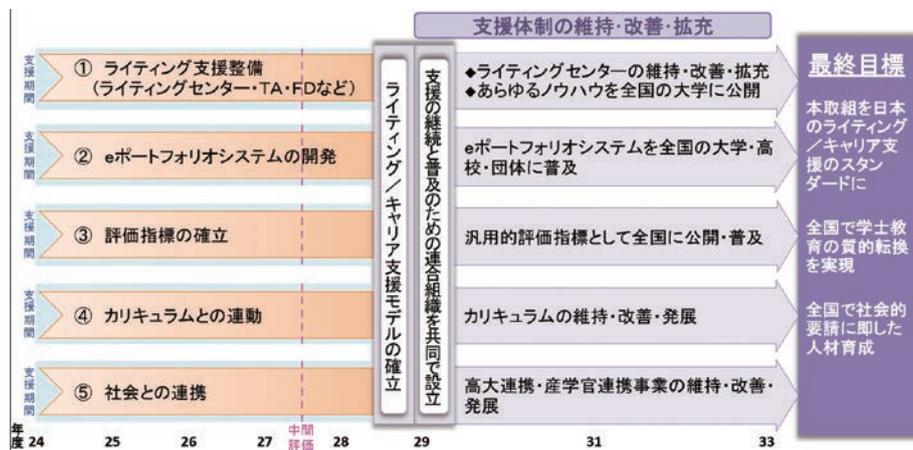


図2：支援期間終了後も含めた全体の計画

## 5. ステークホルダーとの連携

本連携取組では、社会の声を代弁するステークホルダーとの課題共有と協働が不可欠である。本取組では、ライティング／キャリア支援に関わる多様な団体と密接に協力して社会的要請を受け止めるとともに、取組を社会全体に波及させていく（表1）。

表1 ステークホルダー一覧

関係団体等	課題	要請	具体的連携取組
<b>学会</b> The Writing Centers Association of Japan	ライティング支援機能の体系化・普及	ライティング支援を大学教育で機能させる	国際共同シンポジウムの開催
<b>教育委員会</b> 伊丹市教育委員会	初等中等教育での書く力の強化	ライティング支援を初等中等教育で活用	・評価指標の協働開発 ・コンテスト共催
<b>国の機関</b> 国立女性教育会館	男女共同参画社会を実現	男女共同参画社会を推進する人材の育成	男女共同参画セミナー等の実施
<b>企業</b> 株式会社朝日新聞社、株式会社JTB西日本、ダイキン工業株式会社、株式会社パソナ	社会の構造変化に適応し、グローバル化の中を生き抜く	これからの社会に貢献できる有為な人材の育成	社会連携推進部会への参画による共同授業の開発、連携事業の実施

## 6. 具体的な取組内容

本連携取組の取組内容は、以下の5つの柱からなる。

### ①ライティングセンターを中心とした支援体制の再構築

#### (a) ライティングセンターの拡張と充実

関西大学のライティングラボと津田塾大学のライティングセンターの運営システムと具体的活動を、本連携取組の趣旨・目的に合致するように、拡張と充実を図る。具体的には、次のような事業を実施する。

- 運営体制を変更し、新たな組織を作る。
- 支援内容を拡充し、アカデミック・ライティング以外の文書の指導、メール・パワーポイント・レジュメ等の指導、社会における多様な文書作成・プレゼンテーション支援などを実施する。
- すでに両大学で啓発行事として実施している講演会・セミナーを共同実施し、書くことへの動機づけとキャリア支援につなげる。
- 〈考え、表現し、発信する力〉の育成のための、「思考力向上プログラム」「発信力向上プログラム」などを新たに実施する。
- 新たに英語ライティング支援を実施し、留学や就職に必要な英語でのコレスポンス力の向上を図る。
- 自己発信支援として、すでに津田塾大学で実施している作文コンテストに加え、関西大学で新たな作文コンテストを企画・実施する。

#### (b) TA とピアサポートによる支援体制の整備

TA（チューター）の指導レベルの向上と維持を図るために、これまでの研修方法を再検討・最構築し、新たな合同研修を実施する。また、学部生によるピアサポート体制を整える。

#### (c) 教職員のためのFDの実施

教員を対象とした合同FD、職員を対象とした合同SDを実施する。また、国際ワークショップを開催して技能の向上に努める。

#### (d) 各種リーフレットの作成

ガイドブックやリーフレットを共同で作成し、利用する。

### ②eポートフォリオシステムの開発

ライティング／キャリア支援に特化した新たなWEB支援システム(eポートフォリオシステム)を開発する(「TECfolio」と仮称)。このシステムは、従来のeポートフォリオにはない、ミクロ(作成過程)・ミドル(学修成果)・マクロ(学修成果の蓄積)の三段階における記録を、ライティングを中心に整理することを特徴とし、学修記録の蓄積だけでなく、パーソナルポートフォリオとして、就職活動などにも活用できるものであり、関西大学と津田塾大学が共同開発し、全国への普及を図る(図3)。

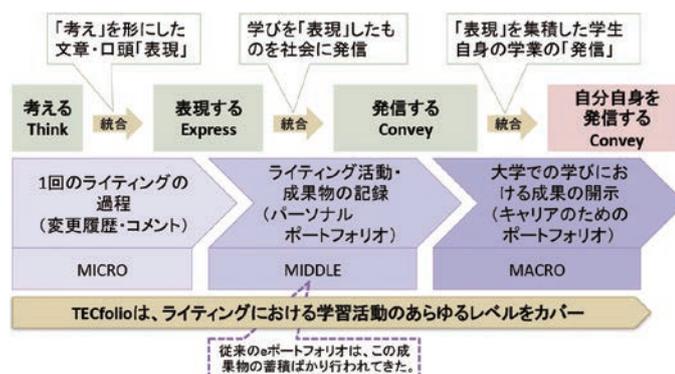


図3 TECfolio 概念図

### ③評価指標の確立

#### (a) 客観的評価指標の確立

ライティング力の向上、およびそこから広がる多様な力の向上を客観的に測るための評価指標（ルーブリック）を作成し、支援に活用する。

#### (b) 自己評価指標の確立

自己の学びを振り返ることで学生に気づきを促すための総合的な自己評価指標を作成し、支援に活用する。

### ④カリキュラムとの連動

本取組に密接に関わる授業の内容を改善し、ライティングセンターとの密接な連携のもとで運営する。また、本取組の趣旨に即した新しい授業を増やしていく。

### ⑤社会との連携

高大連携のプログラムなどを有効に活用し、セミナーや講演会を実施する。また、評価指標の作成において、教育委員会等と密接な連携協力を行なう。また、ステークホルダーと密接に連携して、様々な具体的事業に取り組む。

## 7. 実施計画

5ヵ年間の年次計画については、7ページに掲載してある。計画は、本連携取組の5つの柱ごとに計画されているが、いずれについても、初年度の2012（平成24）年度を「準備期間」、その後の2013（平成25）・2014（平成26）年度を本格的な事業展開の期間「環境整備と実践①②」と位置づけている。ここまでの取組において一定の成果を挙げる予定である。続く4年目の2015（平成27）年度は、それまでの成果を実践し、その効果を検証する期間「成果の検証」と位置づけられる。そして、最終年度の2016（平成28）年度は、前年度の検証をもとに、システム全体にわたる改善を重ねた上で、ライティング／キャリア支援システムの確立を目指す「改善と完成」の期間と位置づけられる。

なお、これらに平行し、毎年シンポジウムを実施し、年度ごとの成果を報告書にまとめる。また、外部評価についても、2年目の2013（平成25）年度以降、毎年実施する。

## 8. 実施体制

実施体制については、6ページの実施体制図に示してある。実施主体として連携取組全体を統括するのは、関西大学と津田塾大学が共同で設置する、「プロジェクト運営委員会」である。プロジェクト運営委員会の中には、四つの部会が設置されている。そのうち、活動の中心を担うのは「ライティングセンター企画運営部会」である。この部会は、両大学のライティングセンター運営担当者のほか、TAの代表も含み（「TA学生合同研修会」）、両大学のライティングセンターは、この部会の統括下で運営される。そのほか、取組の中でライティングセンター以外の特長な取組を担う組織として、「eポートフォリオ開発部会」、「評価指標開発部会」、「社会連携推進部会」の三つの部会を設置している。現在のプロジェクト運営委員会の構成については、8ページに示してある。

なお、これらの部会のうち、「eポートフォリオ開発部会」は、開発作業を円滑に進めるために、さらに、その中に二つのワーキンググループ（「要求仕様WG」・「設計WG」）設けている。

## 9. 評価体制

プロジェクト運営委員会内に「自己点検・評価委員会」を設置する。自己点検・評価委員会は、本連携取組の具体的な達成目標に関する数値をまとめ、プロジェクト運営委員会外の学内関係者およびステークホルダーから構成される内部評価委員会に報告する。内部評価委員会は、評価のための実施細目を策定し、自己点検・評価委員会の報告に基づき、事業内容を点検・評価し、改善を提案する。

さらに、早稲田大学の佐渡島紗織教授と、日本工業大学の二宮祐講師、および、産業界からの委員2名からなる「外部評価委員会」を設置し、内部評価委員会の報告をもとに、取組成果を評価し、具体的な改善を勧告する。なお、これらの評価はすべて取組ホームページを通じて情報公開するとともに、その詳細を報告書に掲載する。

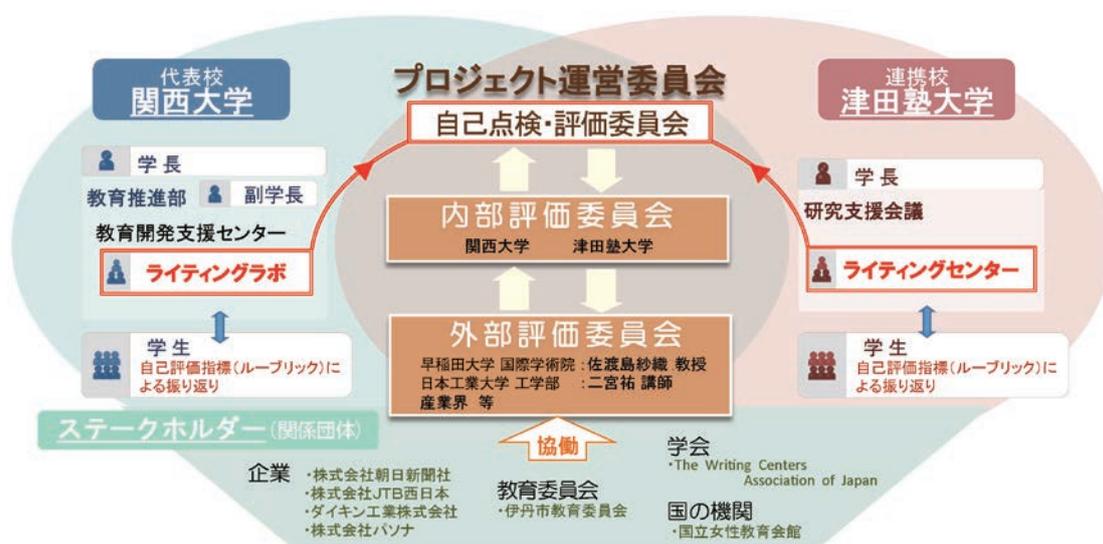


図4：評価体制



# II

## 文部科学省による中間評価を受けて — 今後の取組の課題と改善、および終了後のビジョン —

1. 文部科学省による中間評価の実施状況
2. 評価結果の概要と取組の課題
3. 評価結果から浮かび上がる課題
4. 平成 27 年度 of 取組について
5. 平成 28 年度 of 取組について
6. 取組期間終了後のビジョンについて

## 1. 文部科学省による中間評価の実施状況

平成24年10月にスタートした大学間連携共同教育推進事業は、平成27年1月に折り返し点を迎えた。そこで、これまでの事業の進捗状況や成果、および事業の継続・発展性を見通し等を確認し、教育の質の向上をはかるとともに、その成果を社会に公表し、全国的な波及につなげるために、中間評価が実施された。（詳細は、文科省ホームページを参照<sup>1)</sup>。）

評価は、1. 教育改革、2. ステークホルダーとの協働・評価、3. 取組の実施体制・継続発展の三つの観点から実施され、それぞれの観点に沿って、取組の成果をまとめた「中間評価進捗状況報告書」を、平成27年2月に提出した。

平成27年4月14日に、書面審査に基づいて、ヒアリングが実施された。ヒアリングでは、取組の成果と見通しなどに関する10分のプレゼンテーションの後、取組の内容をめぐる質疑応答がおこなわれた。

## 2. 評価結果の概要と取組の課題

評価結果については、資料をご覧ください。本取組の総括評価としては「A」であり、「計画どおりの取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を達成することが期待できる」というものである。

全体の評価の分布は、地域連携・分野連携あわせて、S評価7件、A評価31件、B評価7件、C評価4件、D評価0件であった。本取組は、S評価には至らなかったものの、取組計画が着実に進行し、堅実な成果をあげている点が十分に評価されたと考えている。

「コメント」において評価を受けた点は、次の六点であった。（なお、このうち、②と③については、但し書きが付加されている。）

### (教育改革について)

- ①建学の理念も規模も学生層も異なる大学の共同による汎用性のあるモデル開発が順調に進展している点。
- ②ライティング能力だけでなく、「考え、表現し、発信する力」を育成し、それをキャリア支援に結びつける特色ある取組である点。  
(ただし、単なる就職活動に役立つ文章力育成に陥らない工夫が必要である。)
- ③ライティングに関するコモンルーブリックを開発した点。  
(ただし、関西大学だけでなく、連携大学が共通して評価する体制を整備する必要がある。)

### (ステークホルダーとの協働と評価体制について)

- ④多種多様なステークホルダーと適切に協働を実施している点。
- ⑤内部評価委員会・外部評価委員会の評価に基づいて取組を改善する体制が整えられている点。

### (取組の実施体制・継続発展について)

- ⑥学長をトップとするマネジメント体制が整備されおり、継続性が期待できる点。

以上がコメントの概要であるが、さらに「留意事項」（関係大学のみに表示）として、本取組におけるライティングセンターのモデルを今後全国に普及させるための具体的方法について、どのような準備をおこなうのか、支援期間中に明確にしておく必要があるという指摘を受けている。

1) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/kaikaku/renkei/1359496.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/renkei/1359496.htm) (2015年12月23日に確認)

### 3. 評価結果から浮かび上がる課題

---

今回の中間評価では、本取組の目的とその意義、具体的な成果、取組実施にあたってのステークホルダーとの連携、内部評価・外部評価を通しての改善、組織としてのマネジメント体制など、本取組の特色と意義を十分に踏まえたうえで、取組全体を高く評価していただいたと考えている。

もちろん、取組において、改善すべき余地があることは確かである。コメントにおいては、但し書きとして、特に二点の指摘があった。

コメント②における、「単なる就職活動に役立つ文章力育成に陥らない工夫」という指摘については、取組当初から、従来の狭い枠にとらわれない観点から新しいキャリア支援のあり方を模索する旨が謳われている。これまでの取組でも、支援体制の整備にあたっては、この点を十分に配慮してきたつもりであるが、今後もこの点を肝に銘じ、新しいキャリア支援の模索と実効的な支援体制の整備を進めていきたい。

コメント③におけるルーブリックの活用に関する指摘に関しては、当然、その活用体制を連携して整備していかなければならない。これまでは、ルーブリックに関する基礎調査と、開発・試行的運用の段階であり、関西大学を中心に作業を進めてきた。しかし、その後は、津田塾大学とのルーブリックの共同開発と運用が順調に進んでおり、今年度中に、十分な連携体制が整えられるものと考えている。

また、本取組における柱の一つとしてeポートフォリオシステムの開発と普及があるが、これについては言及がなされなかった。現段階においては十分な実績があがっていない以上、今後の展開を待たなければ評価は難しいということであろうが、その理念と具体的な機能については、ヒアリングでも質問が出るなど、一定の評価を受けていると考える。今後は、eポートフォリオシステムの有効活用と全国的な普及にも全力をあげる必要があるだろう。

さらに、コメントには指摘されていなかったが、達成目標の一つに「シンポジウム参加大学数の増加」が掲げられており、25校程度の大学の参加を目標にしている。平成26年度は諸般の事情から21校と目標を下回っているため、参加大学数の増加を図る必要もある。

さらに重要なのは、「留意事項」における指摘である。本取組の取組期間終了後の活動の具体像については現在検討中であるが、ライティング／キャリア支援体制の全国的普及のために有効な組織の設立につなげる努力をしていくつもりである。そのために、できるだけ早く将来像の具体的ビジョンを明確にして、その準備を進めていく必要があるだろう。

以下では、中間評価を受けての取組の改善について、平成27年度の実績、および平成28年度の予定と取組期間終了後のビジョンについて、まとめておきたい。

### 4. 平成27年度の取組について

---

平成27年度は、「成果の検証」を目的に掲げており、中間評価の結果を受けて、これまでの環境整備と実践の成果を再度反省し、その改善をはかる作業をおこなった。そのさい、中間評価で評価された点は、さらに効果が高まるような工夫を施した。また、指摘された問題点については、その改善策を検討し、実行に移した。以下、具体的な取組内容と、その成果をまとめる。

まず、①ライティング／キャリア支援の汎用的モデル開発については、ルーブリックやeポートフォリオの活用と普及に力を入れた。ルーブリックについては、その意義について評価を受けたが(③)、両大学での連携による活用の必要性を指摘された。そのため、今年度は評価指標開発部会の機能を強化し、両大学の連携を活発にして、より多様で効果的なルーブリックの開発と活用を共同で実施した。また、ルーブリックの活用テーマとする連携シンポジウムも開催した。その結果、両大学がカリキュラムの中で有機的にルーブリックを活用する仕組みが整備され、カリキュラムとの連携をさらに押し進めることができた。

さらに、②キャリア支援を促進するための〈考え、表現し、発信する力〉の育成についても、本取組でのキャリア支援のあり方を再度問い直し、ルーブリックやeポートフォリオの開発に反映させた。

また、④多様なステークホルダーとの協働の重要性を再認識し、ステークホルダーとの協力関係の強化に力を入れた。

⑤の内部評価と外部評価による改善についても、平成27年度については、その実施方法を改善し、評価委員の声をより改善に反映できるように工夫する予定である。

## 5. 平成28年度の取組について

最終年度の平成28年度については、「改善と完成」を目標にしている。今年度までの取組の成果を集大成するとともに、さらなる改善を検討し、ライティング／キャリア支援モデルの完成をはかる予定である。さらに、その成果の全国への普及のための準備を進めていくことが求められる。そのため、平成28年度においては、取組終了後のビジョンを早期に明確化し、支援期間終了後もライティング／キャリア支援を継続させるとともに、支援モデルの全国への普及という最終目標を実現しうる体制作り力を入れていく予定である。

## 6. 取組期間終了後のビジョンについて

本連携事業は、取組期間終了後の取組の継続が求められている。本取組においては、取組期間内に確立されたライティング／キャリア支援モデルによる支援体制を維持・改善し、全国に拡充していくことが必要であり、これを通して、学士教育の質的転換と、社会的要請に合致した人材育成を実現することが最終目標となる。

そのためには、各大学においてライティング／キャリア支援を継続していく仕組み作りが不可欠だが、それに加えて、支援の継続と普及のための連合組織を共同で設立し、運営していく必要がある。これについては、取組期間終了までに具体的な方策を検討し、必要な準備を進めていく予定である。ここでは、そのための現段階でのビジョンを提示しておく。

### (1) 関西大学における取組期間終了後のビジョン

関西大学では、本取組は、教育推進部・教育開発支援センターに設置された「ライティング支援プロジェクト」によって運営されている。取組の継続のために、取組期間終了後も、「ライティング支援プロジェクト」を引き続き存続させ、これを母体として、活動を維持していく予定である。これによって、取組期間終了後も、学長をトップとするマネジメント体制の中で、ライティングラボによるライティング／キャリア支援の活動を、維持・発展させていくことが可能である。

ライティングラボの活動の維持においては、施設や指導場所の確保のほか、現在の事業内容のどの部分をどの程度の規模で継続させていくかの検討が、重要な課題となる。また、英語ライティング支援や留学生の日本語支援のあり方、さらには、キャリアセンターとの連携のあり方など、今後のライティングラボの支援のあり方を、他部署との関係も含めて、総合的に検討しておく必要があるだろう。検討にあたっては、予算上の過大な負担をかけることなく、効果的な支援を実現しうる、コストパフォーマンス性の高い支援体制作りをしていくことが肝要であろう。

なお、支援の実施においては、本取組で開発された環境や、支援のノウハウや専門性の継承と保持が重要となる。これについては、本取組に関わった教員・職員が引き続き支援に関与することによって、十分に可能であると考えている。

支援のための予算については、すでに大学の経費による補助を受けているほか、人件費についても、一部は大学の予算でまかなわれている。とはいえ、現在、人件費の大部分が連携事業の予算によってまかなわれていることは事実であり、支援期間終了後も現在の体制を維持するためには、大学の予算による人件費の負担が必要となる。関西大学の場合、指導をおこなうTAの確保が重要となる。これについては、支援体制の効率化をはかったうえで、必要な人件費の負担を求めていく予定である。

## (2) 津田塾大学における取組期間終了後のビジョン

津田塾大学では、取組終了後もライティングセンターを引き続き存続させ、これを母体として、ライティング／キャリア支援を継続していく予定である。関西大学と同様に、取組終了後も学長をトップとするマネジメント体制の下で、ライティングセンターの活動を維持・発展させていく。

ライティングセンターの活動を維持・発展させていくには、ライティングセンターの活動と個別指導に専門的に従事する教員とチューターの継続的な確保が不可欠となる。予算上の負担が過剰になることなく、効果的な活動が展開できるよう、イベントやレクチャーシリーズ等についてもより工夫された体制の構築を検討する必要があるが、日本語ライティング支援と英語ライティング支援を担当する教員、チューター、そして事務職員の雇用を引き続き大学執行部に求めていく予定である。すでに一部の活動は学内の予算を用いて展開しているが、今後、どのようにしてバランスのとれた人件費を捻出するかが大きな課題となろう。

また、学内でライティングセンターの活動に関わった専任教職員は今後ともライティングセンターの発展のために、委員会活動を通して得られた知見を学内に波及させていく。そして、これまでに蓄積したノウハウやリソースは今後とも継承しつつ、全国のライティングセンターのモデルとなるべくさらに尽力していきたい。

## (3) 連携事業の継続のありかたについて

本取組を連携事業として維持していくためには、なんらかの連合組織の設立が不可欠であるが、その具体的な姿については、さまざまな可能性が考えられる。最終的には、全国のライティングセンターによる連合体に発展させていくことが望ましいと考えるが、これについては、本取組のステークホルダーとなっている「The Writing Centers Association of Japan」などの学会組織や、他大学のライティングセンターの協力も仰ぎつつ、時間をかけて慎重に進めていく必要があるだろう。

そのため、取組期間終了後、しばらくは、関西大学と津田塾大学による連合組織として、現行の「プロジェクト運営委員会」を母体とした新組織を設立し、両大学でのライティング／キャリア支援を維持・発展させていくなかで、関係組織との協力関係を構築していき、徐々に組織の拡大を図っていくのが現実的であろう。いずれにしても、この点については、平成28年度の早い時期に検討を行ない、より具体的な将来像を提示することにした。

「大学間連携共同教育推進事業」中間評価結果

連携の種類	分野連携	整理番号	17
取組名称	〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援		
連携校 ※下線は代表校	津田塾大学、 <u>関西大学</u>		

(総括評価)

A：計画どおりの取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を達成することが期待できる。

[コメント]

本取組は、学士課程教育の質的転換と有為な人材育成のために欠かせない「考え、表現し、発信する力」を培うためのライティング／キャリア支援体制を、ライティングセンター整備を核に、総合的に構築することを目的としている。

教育改革については、建学の理念も規模も学生層も異なる大学の協働による汎用性のあるモデル開発が順調に進展しており、評価できる。ライティング能力だけでなく、「考え、表現し、発信する力」を育成し、それをキャリア支援に結びつける特色ある取組であり、高く評価できるが、単なる就職活動に役立つ文章力育成に陥らない工夫が必要である。また、ライティングに関するコモンループリックを開発したことは高く評価できるが、そのループリックに基づく評価を、関西大学の実施にとどめるのではなく、連携大学が共通して評価する取組を整備することが望まれる。

ステークホルダーとの協働・評価については、多種多様で協働が難しいと思われるステークホルダーとも、社会の要請に応えるべく体制を組み、適切に実施されている。また、内部評価委員会・外部評価委員会の評価に基づいて取組を改善できる体制も整えられている。

取組の実施体制・継続発展については、学長をトップとするマネジメント体制が整備されていることから、継続性も期待できる。

# III

## 2015（平成27）年度の 取組の概要

1. 本年度の位置づけ・実施事業の概要・活動成果の概要
2. プロジェクト運営委員会の活動概要
3. 各部会の活動概要

## 1. 本年度の位置づけ・実施事業の概要・活動成果の概要

5年間の連携事業の中で、本年度は「成果の検証」に該当し、これまでの3年あまりの間に実現された環境整備と、それに基づく支援の実践の成果を検証し、本取組の5つの柱のそれぞれについて、具体的な改善をおこなうとともに、改善に基づいた支援の実践をおこなった。

（以下、その全体のまとめであるが、個々の取組成果の詳細については、各大学の取組成果報告をご覧ください。）

### 【平成27年度における実施事業および成果の概要】

#### 【1】本補助事業全体に関わる取組

取組項目	取組内容	取組成果
①本取組のホームページを運用する。	ホームページを通して、本取組に関わる情報公開等を行う。公開に当たっては、これまでの実績を検証した上で、内容の改善を図る。	本取組のホームページに適宜情報を掲載し、情報公開を行った。公開にあたっては、より一般にアピールするよう、内容を工夫した。
②シンポジウムを開催する。	本事業の取組の内容をテーマとした連携シンポジウムを、ステークホルダーの協力のもとで開催し、本取組の内容を広く公表するとともに、ライティング／キャリア支援体制の必要性について啓発を行う。内容に関しては、これまでの開催実績を検証し、改善を図る。	2015年9月12日に、連携シンポジウム「大学教育における『書く力』どう測る どう伸ばす—ループリックの活用と課題—」を The Writing Centers Association of Japan の協賛を受けて津田塾大学・関西大学（中継）で開催（参加者計73名）。なお、テーマや開催時期に関して改善を図った。
③自己点検評価委員会・内部評価委員会・外部評価委員会による評価・改善を実施する。	自己点検・評価委員会による自己点検、内部評価委員会による内部評価、外部評価委員会による外部評価を実施し、事業内容の点検・評価・改善を行う。	実施中。
④本年度の取組の報告書を作成する。	本年度の取組内容の報告書を作成し、本取組の点検・評価と改善に役立てる。	2015年度報告書を作成中。

#### 【2】ライティングセンターの整備に関わる取組【詳細は両大学ライティングセンターの報告を参照】

取組項目	取組内容	取組成果
①TA（チューター）・SAを募集・任用する。これまでの研修方法を検証し、改善された研修を実施する。	ライティング指導の主体となるTA（チューター）を募集・任用し、指導のために必要な研修を、これまでの方法の検証と改善に基づいて、実施する。	両大学のライティングセンターにおいて募集・任用を行い、研修を実施した。
②ライティングセンターのホームページを運用するとともに、これまでの成果を踏まえて改善を施す。	ホームページを通して、ライティング支援に関わる情報公開等を行う。また、その内容を再検討し、改善する。	両大学のライティングセンターのホームページに講演会・シンポジウム・イベント等の情報を掲載した。また、内容を検討し、改修を実施した（関西大学）。

取組項目	取組内容	取組成果
③成果検証に基づき、ライティングセンターの運用を行うとともに、ライティング指導を実施する。	成果検証に基づき、ライティングセンターの運用を行い、TA（チューター）によるライティング指導を実施する。	両大学において、ライティング指導を実施した。なお、成果検証により、ライティングセンターの運用システムを改善した。ライティング指導についても、改善策を検討し、TA研修に反映させた。
④成果検証に基づき、ライティングセンターでの新しい企画を、実施していく。	これまで実施されてきた様々な企画の成果検証に基づいて、新たな支援プログラムを企画し、実施する。	これまで導入してきた「ワンポイント講座」・「Learning Cafe」（関西大学）、「Writing Cafe」（津田塾大学）について、その内容に改善を施したうえで、実施した。
⑤各種ガイドブック・リーフレットを作成し、ライティング指導で活用する。	ライティングに関するガイドブック・リーフレットを利用し、ライティング指導を実施する。	関西大学において「レポートの書き方ガイド（発展篇）」を作成。津田塾大学でもガイドブック「レポートの書き方」を作成した。なお、作成されたガイドブックは、相互活用を図った。
⑥TA（チューター）の研修プログラムを、成果検証に基づき改善し、実施する。	TA（チューター）に対するこれまでの研修プログラムの指導法、ガイドライン、マニュアル等の再検討に基づき、より効果的な研修を実施する。	前年度の指導マニュアルとそれに基づく研修プログラムの成果を検証し、新たなプログラムにもとづいて、研修を実施した。
⑦TA（チューター）合同研修を、成果検証に基づき改善し、実施する。	TA（チューター）合同研修をステークホルダーと協力して実施し、TA（チューター）の指導力の向上を図るとともに、その成果を検証し、研修プログラムの内容改善を行う。	2015年10月28日に、TA合同研修を実施した。実施に際しては、これまでのTA合同研修の成果検証に基づき、実施方法の改善を図った。
⑧教職員合同FD／SD・国際WSを、これまでの成果の検証に基づいて、企画し、実施する。	これまでの教職員合同FDワークショップの検証に基づいて、より効果的なワークショップを企画・実施し、教職員の能力向上を図る。	2015年9月13日に、津田塾大学において教職員合同FD／SDワークショップを実施した。
⑨啓発行事（講演会）を、成果検証に基づき改善し、実施する。	ステークホルダーと協力して実施する、ライティングおよびキャリア支援をテーマとした講演会に関して、その成果を検証し、より効果的な学生の啓発を図る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関西大学において、社会連携ワークショップ「未来の旅行を考える」を、ステークホルダー（株式会社JTB西日本）と連携して実施した。</li> <li>・津田塾大学において、講演会「書くということと私」、「女性のリーダーシップから学ぶ」、「日本語ライティング講座」を開催した。</li> </ul>
⑩共同して作文コンテストを実施する。	関西大学は、昨年度に引き続き、ステークホルダー（伊丹市教育委員会）と協力して作文コンテストを企画・実施し、学生の自己発信の支援を行う。津田塾大学は「高校生エッセー・コンテスト」を実施し、高大連携を推進する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関西大学において、「平成27年度『考動力』作文コンテスト」を実施した。</li> <li>・津田塾大学において「高校生エッセー・コンテスト」を実施した。</li> </ul>
⑪他大学のライティングセンターの運営とライティング支援に関する国内調査を実施する。	国内の他大学で運営されているライティングセンターを訪問し、運営や学生指導に関する実地調査を行ない、その現状と課題点を明らかにする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他大学のライティングセンターの視察、調査を実施した。</li> <li>・ライティング支援およびキャリア支援に関わる学会、シンポジウム等に参加し、調査を実施した。</li> </ul>

[3] e ポートフォリオの開発に関わる取組【詳細は部会の報告を参照】

取組項目	取組内容	取組成果
① e ポートフォリオの運用を本格的に開始し、基本機能であるライティングセンターの予約や指導記録を活用して、利用者の増加を図る。	開発したeポートフォリオの機能のうち、基本機能であるライティングセンターの予約や指導記録の機能を、ライティングセンターで活用し、その効果の検証と改善するとともに、利用者の増加を図る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関西大学では、4月より、eポートフォリオの予約機能(TEC-book)の本運用を開始し、予約や指導記録に活用した。</li> <li>・ライティングセンターで本運用したことによる効果とともに、システムの検証、改善を行った。</li> <li>・津田塾大学では、予約機能におけるカスタマイズを進めた。</li> <li>・津田塾大学では、12月より、TEC-bookの本運用を開始した。</li> </ul>
② e ポートフォリオのポートフォリオ機能を実装・運用し、その検証と改善を実施するとともに、利用者の増加を図る。	前年度に設計を行ったポートフォリオ機能に関して、実装と試験的運用を行ない、検証と改善を行う。今年度中のできるだけ早い時期に、本格的な運用を開始し、利用者の増加を図る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関西大学では、eポートフォリオのポートフォリオ機能(TEC-folio)の活用を12月から本格的に開始した。</li> <li>・津田塾大学では、現在、システムの稼働に向けて準備中。</li> </ul>

[4] 評価指標の策定に関わる取組【詳細は部会の報告を参照】

取組項目	取組内容	取組成果
①開発された評価指標(ルーブリック)を授業の中で活用する協力クラスを策定し、授業の中での活用を促進するとともに、その効果を検証して、改善を図る。	開発された評価指標(ルーブリック)を正課授業の中で活用する協力クラスを20クラス程度作り、春学期および秋学期の授業の中で活用してもらう。担当者からの意見調査と評価のデータを元に、評価指標の使用による指導効果の向上を検証すると共に、評価指標の内容および利用方法の改善を図る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関西大学では、春学期に協力クラスを44作り、授業の中で活用してもらった。活用にあたっては、担当者にアンケートを取り、意見を収集すると共に、評価のデータを収集し、分析した。</li> <li>・秋学期は春学期の分析をもとに利用法の改善を図り、9の協力クラスで活用してもらった。</li> <li>・津田塾大学では、11クラスで使用した。</li> </ul>
②ライティング力の向上を自己評価するための自己評価指標を授業の中で活用するとともに、その効果を検証して、改善を図る。	開発された評価指標(ルーブリック)を正課授業の中で自己評価指標として活用してもらい、担当者からの意見調査と評価データに基づき、その内容と活用方法の改善を図る。	①の調査に合わせて、数クラスの授業において、ルーブリックを自己評価指標として活用してもらい、意見とデータの収集を行うとともに、その内容を分析し、改善を図った。
③〈考え、表現し、発信する力〉をめぐる評価指標を、授業の中で試験的に運用し、検証と改善を図る。	ライティング力以外の諸能力(リーディング、クリティカルシンキング、プレゼンテーションなど)に関わる指標群である〈考え、表現し、発信する力〉をめぐる評価指標を、協力クラスで試験的に活用してもらい、その効果の検証を行なうと共に、内容の改善を図る。	いくつかのクラスの協力のもとで、〈考え、表現し、発信する力〉をめぐる評価指標を使い、プレゼンテーション等の評価を試験的に実施した。実施結果をもとに、効果を検証し、内容の改善を検討した。
④ライティングの評価指標を含む実践的参加型のワークショップに参加する。	ライティングの評価指標を含む実践的参加型のワークショップに参加し、評価指標の作成と運用方法について検証する。	開発の事例報告を大学教育研究フォーラムにて行い、運用の事例報告を、本取組シンポジウムおよび関西大学FDフォーラム・大学教育学会課題研究合同企画FDにて行った。

## [5] 教育カリキュラムとの連動に関わる取組

取組項目	取組内容	取組成果
①国内外での事例を参考にしながら、既存授業の内容改善の効果を検証し、さらなる改善を行う。	「文章力をみがく」（関西大学）、「日本語ライティング」（津田塾大学）などの既存の授業について、海外での視察調査や海外からの講師招聘によるFDの成果を踏まえたうえで、これまでの実施状況を検証し、ライティングセンターの活用の方、TA（チューター）の活用の方等に関して改善を施す。	両大学における既存授業について、これまでの成果の検証に基づいて、ライティングセンターおよびTA（チューター）の活用の方を検討し、協力クラスにおける活用法の改善を図った。
②国内外での事例を参考にしながら、ライティングセンターとの連携授業の増加を図るとともに、効果検証に基づき、より有効な連携方法を検討する。	モデルクラスを選び、国内外での事例を参考にしながら、ライティングセンターとの連携を本格的に実施する。春学期の授業終了後、連携の方を検討し、秋学期の授業での連携の改善を図る。	・春学期は、約42クラスとの連携を実施した。連携の結果は、授業終了後に分析され、改善策を検討した。 ・秋学期は、改善に基づき、約15クラスとの連携を行った。
③国内外での事例を参考にしながら、新しい学生参加型授業、ステークホルダーとの共同授業等を引き続き実施し、検証と改善を行う。	海外での授業実践をモデルにして、アクティブ・ラーニングを積極的に取り入れた学生参加型の新しい授業を実施する。	アクティブ・ラーニングの手法を取り入れたライティング力育成の授業を実施した。

## [6] 社会連携に関わる取組

取組項目	取組内容	取組成果
①高大連携による啓発行事を実施する。	高大連携に関して、ステークホルダー（伊丹市教育委員会）と連携して各種の啓発行事を実施するほか、各種の高大連携の企画を実施する。実施に当たっては、これまでの連携の方を再検証し、改善につなげる。	作文コンテストをステークホルダーの協力の下で実施するとともに、高校生向けのセミナーの実施等を行った。
②これまでの連携の成果の検証に基づき、ステークホルダーとの関係の深化を図り、新たな連携企画を検討する。	社会連携に関して、ステークホルダーとの連携企画を、これまでの企画を再検証したうえで、実施する。	・ステークホルダー（株式会社JTB西日本）と連携して、社会連携ワークショップ「未来の旅行を考える」を実施した。

## 2. プロジェクト運営委員会の活動概要

昨年度に引き続き、「プロジェクト運営委員会」を、ほぼ月1回のペースで、TV会議によって開催し、重要案件を審議した。開催の日時および議事内容については、以下の通りである。

### 2015（平成27）年度 プロジェクト運営委員会開催記録

回	日時	主な議事内容
1	2015年5月13日(水) 9:00～10:10	・今年度のeポートフォリオ事業について ・シンポジウムについて ・両大学の取組実施報告

回	日時	主な議事内容
2	2015年6月10日(水) 9:00～10:25	・ 出版企画について ・ シンポジウム、教職員合同 FD/SD 研修会について ・ 両大学の取組実施報告
3	2015年7月8日(水) 9:00～10:10	・ 出版企画について ・ シンポジウム、教職員合同 FD/SD 研修会について ・ 両大学の取組実施報告
4	2015年7月29日(水) 12:15～13:00	・ 中間評価の結果と追加配分額について ・ 出版企画について ・ 両大学の取組実施報告
5	2015年9月1日(火) 10:00～10:53	・ 出版企画について ・ シンポジウム、教職員合同 FD/SD 研修会について ・ 両大学の取組実施報告
6	2015年10月14日(水) 9:00～10:00	・ 内部評価・外部評価について ・ TA 合同研修会について ・ 両大学の取組実施報告
7	2015年11月18日(水) 9:00～9:55	・ 成果報告書について ・ eポートフォリオについて ・ 両大学の取組実施報告
8	2015年12月16日(水) 9:00～10:00	・ 出版企画について ・ eポートフォリオについて ・ 両大学の取組実施報告
9	2016年1月20日(水) 9:00～10:00	・ 成果報告書について ・ 内部評価・外部評価について ・ 両大学の取組実施報告
10	2016年2月16日(火) 10:00～10:35	・ 内部評価・外部評価について ・ 成果報告書について ・ 両大学の取組実施報告
11	2016年3月15日(火) 10:00～10:40	・ 成果報告書について ・ eポートフォリオについて ・ 両大学の取組実施報告

会議は予定通り実施されており、両大学の綿密な情報共有と意思疎通のもとで、事業は進められている。

### 3. 各部会の活動概要

#### 3.1 ライティングセンター企画運営部会

それぞれの大学のライティングセンターの運営に関わる個別的な議案については、それぞれの大学において当部会が開催され、方針が決定される。両大学における部会の活動については、それぞれのライティングセンターの活動報告をご覧ください。

#### 3.2 eポートフォリオシステム開発部会

本部会は、eポートフォリオの開発のために結成された部会であり、両大学で協力しながら開発を進めている。

今年度の部会の開催記録は下記の通りであるが、これ以外にも、本部会の下部組織である「開発者ミーティング」と「コアチームミーティング」を頻繁に実施し、密接な連携のもとに開発を進めた。

### 2015 (平成27) 年度 eポートフォリオシステム開発部会 開催記録 (2015年4月～2016年2月)

回	日時	主な議事内容
1	2015年4月24日(金) 12:15～12:50	・TEC-folio 開発の進捗状況について ・今後の予定について
2	2015年5月22日(金) 12:15～12:50	・TEC-folio 開発の進捗状況について ・今後の予定について
3	2015年6月19日(金) 12:40～13:10	・TEC-folio 開発の進捗状況について ・今後の予定について
4	2015年9月25日(金) 12:20～12:50	・TEC-folio 開発の進捗状況について ・今後の予定について
5	2015年10月30日(金) 12:15～12:50	・TEC-folio 開発の進捗状況について ・今後の予定について
6	2015年11月20日(金) 12:15～12:50	・TEC-folio 開発の進捗状況について ・今後の予定について
7	2015年12月18日(金) 12:15～12:50	・全体の進捗状況と予定について ・多言語化の進捗状況について
8	2016年1月22日(金) 12:15～12:50	・TEC-folio の進捗状況について ・今後の予定について
9	2016年2月26日(金) 12:15～12:50	・TEC-folio の進捗状況について ・今後の予定について
10	2016年3月25日(金) 12:15～12:50	・TEC-folio の進捗状況について ・今後の予定について

一年間の取組で、システム全体(TEC-system)は、予約システム(TEC-book)とeポートフォリオ部分(TEC-folio)に区分された。TEC-bookは関西大学で春学期から本格的な運用を開始し、稼働中である。TEC-folioは、開発とテストを終了し、本格稼働に向けて試験運用中である。津田塾大学では、現在サーバの整備とカスタマイズを実施中であり、来年度より本格的に稼働予定である。また、多言語化をめざして、システムの調整中である。なお、開発・運用と並行して、オープンソース化の議論も進展しており、来年度の早い時期にオープンソースとして公開される予定である。(詳細は「VI eポートフォリオシステム開発部会の取組」を参照。)

### 3.3 評価指標開発部会

評価指標開発部会では、前年度におけるループリックの試験的活用と検証・改善を経て、今年度から本格的な活用を開始した。これに加え、作業部会を設置して、ライティング・ループリック以外のループリックの開発を共同で進めている。(詳細は「IX 評価指標部会の取組」を参照。)

#### 〈資料〉活動記録

本年度の部会・FDの開催および成果発表記録は以下のとおりである。

年度前半は、シンポジウムの準備を主とし、各ループリックの開発・運用など、関西大学および津田塾大学がそれぞれ行い、年度後半は、両大学共通のループリックを共同開発している。

2015（平成27）年度 活動記録（2015年4月～2016年3月）

回	日付	種類	主な活動内容
1	4月2日(木)	FD	打合せ・統合科目群科目クラス担当教員
2	4月18日(土)	FD	FD・新任教員
3	5月20日(水)	部会	シンポジウムの検討、今年度の進め方、各大学の実施状況
4	6月17日(水)	部会	シンポジウムの検討、各大学での実施状況、ルーブリックの共有方法、各大学の実施状況
5	7月22日(水)	部会	シンポジウムの検討、ルーブリックの共有方法、各大学の実施状況、成果発表について
6	9月12日(土)	成果発表	本取組シンポジウム：大学教育における「書く力」 どう測る どう伸ばす—ルーブリックの活用と課題—
7	9月13日(日)	部会	各大学の現状及び計画、ルーブリックの共有方法、ライティングセンタールーブリックの提案
8	10月3日(土)	成果発表	関西大学FDフォーラム・大学教育学会課題研究合同企画FD：「関西大学GPにおけるライティング・ルーブリックの開発と評価課題」
9	10月16日(金)	部会	ライティングセンタールーブリック作成(1)、成果発表について
10	10月30日(金)	部会	ライティングセンタールーブリック作成(2)
11	11月20日(金)	部会	ライティングセンタールーブリック作成(3)
12	12月2日(水)	FD	ガイダンス・学部専任教員
13	12月11日(金)	部会	ライティングセンタールーブリック作成(4)、成果発表について
14	1月8日(金)	部会	ライティングセンタールーブリック作成(5)
15	1月29日(金)	部会	ライティングセンタールーブリック作成(6)
16	2月12日(金)	部会	ライティングセンタールーブリック作成(7)、成果発表について
17	2月23日(火)	部会	ライティングセンタールーブリック作成(8)
18	2月24日(水)	FD	ガイダンス・学部専任教員
19	3月9日(水)	FD	ガイダンス・学部専任教員
20	3月17日(木)	成果発表	大学教育研究フォーラム：「ライティングセンターによるライティング支援のためのルーブリック開発」

### 3.4 社会連携推進部会

社会連携推進部会では、作文コンテストや講演会の開催など、各種の連携事業の実施のためにステークホルダーと協議するとともに、高大連携の推進のために、作文コンテスト等に取り組んでいる。また、各ステークホルダーと協議を重ねながら、新たな企画を検討し、順次実行している。

## 2015 年度社会連携ワークショップ

タイトル	未来の旅行を考える～〇年後、日本は、世界は、どんな社会になっているのだろうか?～
日時	2015年11月6日、13日、20日(3週連続) 14:40～16:10(4時限) 第1回:講義 第2回:グループワーク 第3回:発表会&茶話会
場所	関西大学千里山キャンパス第2学舎3号館D304教室
講師	占部礼二氏(株式会社 morisemi 副代表) 小林至道(関西大学教育推進部特任助教)
コメンテーター	縄船猛治氏(株式会社 JTB 西日本) 四宮幹人氏(株式会社 JTB 西日本) 参加者21名(1年生:6名、2年生:4名、3年生:8名、4年生:3名)

2015年度、社会連携推進部会では、ステークホルダーの一つである株式会社 JTB 西日本と連携し、ワークショップを開催した。その概要は、以下のとおりである。

### 【ワークショップの目的】

本ワークショップは、「旅行に関する企画を作成する」ことを通して、学生のライティング/キャリア活動を支援することを目的とした。企画段階から占部氏(株式会社 morisemi 副代表)、縄船氏(株式会社 JTB 西日本)にご協力いただきながら議論を重ねるなかで、単に旅行を企画するのではなく、数年、数十年後の未来の社会の在り方を想像しつつ、未来の新しい旅行の形を創造することを、参加学生には求めるワークショップとなった。

応募条件は3週連続で参加できる、先着30名とした。参加申込は24名、そのうち当日の参加者は、関西大学の学部生21名(女子学生:15名、男子学生:6名)であった。8つの学部の1年生から4年生まで、多様な学部、学年からの参加という点に特徴がみられた。

占部礼二氏

縄船猛治氏

四宮幹人氏

### 【プログラム内容と当日の様子】

ワークショップのプログラムは、次のとおりに進められた。第1回は講義とし、ワークショップの趣旨説明と「企画」を作成するうえでのポイントの解説を、講師が行った。それを踏まえ、3人から4人の各グループ(6グループ)で、企画案のブレインストーミングが行われた。第2回はグループワークとし、翌週(第3回)の発表に向けて、各グループで前週から続く企画案のブレインストーミングと、発表スライドの作成が行われた。第3回の発表会では、全6グループが、それぞれ7分から10分のプレゼンテーションを行った。各グループのプレゼンテーションに対しては、株式会社 JTB 西日本の縄船氏と四宮氏の両名から、「旅行の企画案としてどうだったか」という観点を中心にコメントをしていただいた。全グループの発表およびそれに対するコメントの後、講師の占部氏から、「ワークショップの趣旨に沿っていたかどうか」という観点から、総評が行われた。

発表会に引き続き、「参加学生から講師、コメンテーターに広く質問する機会」を趣旨とする茶話会へと移行

した。ここでは、参加学生から就職・企業・仕事にかんしてだけではなく、大学卒業後も見据えた学生生活の送り方などの質問も見受けられた。

講義とグループワークの様子

発表会の様子

茶話会の様子

#### 【事後アンケートの結果】

ワークショップ終了後には、4件法と自由記述によるアンケート調査を実施した(N = 17:回収率81%)。「本ワークショップは為になりましたか?」の設問に対して、「大いに為になった」が10名、「為になった」が7名、「本ワークショップの内容はいかがでしたか?」の設問に対して、「大変満足」が8名、「満足」が9名、という結果が得られた。また、ワークショップに対する感想を尋ねた自由記述では、「実際の企業の方と接する機会があって良かった。」「他学部で学年も違った人たちと交流できてよかったです。また、苦手だったプレゼンも楽しくできたので、参加してよかったと思いました。」「3回という回数がちょうどよかった。進行がとてもきびきびしていて長く感じなかった。」など、こちらも概ね良好な回答が目立った。なお後日、アンケート結果と併せて、各グループの発表に対して「学術的な観点から」小林が行った講評を、フィードバックとして参加学生全員に周知した。

以上から、本取組の掲げる、学生が「考え、表現し、発信する力を培うライティング/キャリア支援」の一つの在り方を当ワークショップで具現化することができたと言えよう。

■設問2：本ワークショップに参加した理由を、すべて選んでください。(N = 17)

- ・テーマに関心があったから：13名
- ・友だちの勧めがあったから：4名
- ・就職に役立ちそうだから：3名
- ・講師に関心があったから：2名
- ・先生の勧めがあったから：1名
- ・書く力を向上させたいから：0名

■設問5：本ワークショップの良かった点、改善すべき点など感想を自由にご記入ください。

- ・実際にJTBの方が来て話が聞けたことが良かった。
- ・実際の企業の方と接する機会があって良かった。
- ・他学部で学年も違った人たちと交流できてよかったです。また、苦手だったプレゼンも楽しくできたので、参加してよかったと思いました。
- ・他学部、他学年の人と「観光」を様々な目線から話し合うことができ楽しかったですし、勉強になりました。
- ・他の班の発表に対して学生も紙などにコメントを残してフィードバックできたら良かったと思います。発表を聞くだけで、意見しにくかったです。
- ・旅行会社の方に実際に発表をきいてもらえたのがとても良かったです。
- ・3回という回数がちょうどよかった。進行がとてもきびきびしていて長く感じなかった。
- ・今まで企画したことがなく、今回初めて企画して難しさの中にも楽しさがあったよかったです。

文部科学省 平成 24 年度採択 大学間連携共同教育推進事業  
 〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング/キャリア支援  
 2015 年度 社会連携ワークショップ



# 未来の旅行を考える

～〇年後、日本は、世界は、  
 どんな社会になっているのだろうか?～

このワークショップは、株式会社 JTB 西日本との連携のもと、「旅行に関する企画を作成する」という課題を通して、みなさんのライティング/キャリア活動の支援を目的とするイベントです。  
 みなさんが授業で課されるレポートや発表資料を作成するというライティング活動が、実は、「社会で仕事をする場面でも存分に生かせる!」ということを体験してみませんか?  
 本ワークショップの講師には、キャリア支援がご専門であり、全国の大学で文章力アップや企業研究のご講演をされている、占部礼二氏をお招きします。また、株式会社 JTB 西日本でキャリアを積まれている縄船猛治氏とも、みなさんから直接、質問をできる機会があります。関西大学出身で、みなさんの先輩として社会で大活躍されているお二方です。  
 「大学でライティング活動をする意義とは?」「社会で働くとは?」ということに興味関心があるみなさんの参加を、心よりお待ちしております。

**参加費不要**

**事前申込必須**

## 第 1 回 講義

**日時：11月6日（金）4時限（14：40～16：10）**

場所：関西大学千里山キャンパス 第2学舎3号館 D304 教室

趣旨説明：小林 至道（教育推進部 特任助教・ライティングラボ）

講義：企画作りのポイント 占部 礼二 講師（株式会社 morisemi）

講師紹介：占部礼二氏「文章を書くことと職業を選ぶことは同じ」というテーマを掲げ、大学生のキャリア支援を行っている。  
 著書に「知っておきたい業界別『仕事』を考える本」がある。

## 第 2 回 グループワーク

**日時：11月13日（金）4時限（14：40～16：10）**

場所：関西大学千里山キャンパス 第2学舎3号館 D304 教室

ファシリテーター：占部 礼二 講師、小林 至道

## 第 3 回 発表会&茶話会

**日時：11月20日（金）4時限（14：40～16：10）**

場所：関西大学千里山キャンパス 第2学舎3号館 D304 教室

グループワークの発表

講評・質疑応答：占部 礼二 講師、縄船 猛治 氏（株式会社 JTB 西日本）

### ■応募条件

条件 1 全3回すべてに出席できること。

条件 2 定員は先着 30名までとなります。定員に達し次第、応募を締め切ります。

### ■応募方法

インフォメーションシステムの「申請アンケート」より、10月25日（日）23時55分までにお申込みください。

### ■問い合わせ先

関西大学 教育推進部 教育開発支援センター事務局 06-6368-1788



# IV

## 関西大学 ライティングラボの取組

関西大学ライティングラボ（以下、ラボと表記）は、教育推進部の管轄のもと、ライティングを支援する機関である。ラボでは、大学院生のティーチングアシスタント（以下、TAと表記）による学部生に対する文章作成上の個別相談対応を中心に、ライティングにかんする講座、ステークホルダーと連携したセミナー、そのほかライティングに関わるイベントを企画し、実施している。

2015年度は、千里山キャンパス内でのラボ設置場所が増え、ラボ利用者数を大きく伸ばした。また、新しい予約システム「TEC-system」を導入し、キャンパス内の設置場所が増えても、円滑にラボを運営することが可能になった。そのほか、2014年度までの活動を継続しつつ、内容を見直し、より一層の充実を図った。

本章では、ラボが行った2015年度の活動内容と2014年度までの活動からの変更点について報告する。

1. ライティングセンター企画運営部会の開催
2. 個別相談
3. ワンポイント講座
4. 講演会・セミナー
5. 出版物『レポートの書き方ガイド [発展篇]』の作成と活用
6. 広報活動
7. 高大連携事業：「考動力」作文コンテスト
8. SF 生対象文書作成能力向上講習会
9. コラボレーションコモンズ内ライティングエリアの活用：Learning Café の実施
10. 視察対応
11. 次年度に向けて

## 1. ライティングセンター企画運営部会の開催

ライティングセンター企画運営部会では、ラボの運営方針の決定や各種講座の企画と実施、そのほかラボに関わるあらゆる問題の検討を行った。2015年度は、以下のとおり部会を開催した。

表1 ライティングセンター企画運営部会開催記録

回	日付	主な検討・報告事項
1	4月8日(水)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2015年度の取り組み内容 (ステークホルダーとの連携講演会、教職員合同FD/SD研修会、TA合同研修会、作文コンテスト、レポートの書き方ガイドおよびリーフレットの発行)</li> <li>・ラボの運営について(千里山キャンパス第1学舎1号館、千里山キャンパス総合図書館、高槻キャンパス)</li> <li>・TA研修予定</li> </ul>
2	5月13日(水)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ルーブリックについて(教育推進部とラボ、それぞれの活動報告)</li> <li>・『レポートの書き方ガイド』の制作スケジュール等確認</li> <li>・ステークホルダーとの連携講演会</li> <li>・レポートの書き方ワンポイント講座のスケジュール確認</li> <li>・SF生対象講習会のスケジュール確認</li> </ul>
3	6月10日(水)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ステークホルダーとの連携講演会の進捗報告</li> <li>・TEC-systemの他大学展開についての報告</li> <li>・各大学からの視察報告 ・第37回大学教育学会での発表について</li> <li>・他キャンパスへのワンポイント講座の中継について</li> </ul>
4	7月8日(水)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ステークホルダーとの連携講演会の内容検討</li> <li>・入学前教育へのかかわり ・ラボHPの更新</li> <li>・留学生に対する文章作成支援について国際部との連携内容検討</li> <li>・TEC-systemの広報 ・作文コンテストの進捗報告</li> <li>・経済学部との連携 ・Learning Café</li> </ul>
5	7月29日(水)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ラボの春学期の運営のふり返りと秋学期の運営について(高槻キャンパスでの運営内容の検討)</li> <li>・経済学部との連携内容 ・入学前教育についての確認</li> <li>・ステークホルダーとの連携講演会の進捗報告</li> </ul>
6	9月9日(水)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学部や他部署との打ち合わせ日程と内容(高槻キャンパス、経済学部、国際部)</li> <li>・シンポジウムでの発表内容 ・評価指標部会の進め方</li> <li>・ステークホルダーとの連携講演会についての検討</li> <li>・教職員合同FD/SD、TA合同研修会の内容検討</li> <li>・秋学期のSF生対象講習会のスケジュール</li> </ul>
7	10月8日(水)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・留学生の文章作成支援に対する対応検討</li> <li>・高槻キャンパスとの打ち合わせ内容の報告</li> <li>・評価指標部会の進め方についての報告</li> <li>・経済学部との連携内容についての打ち合わせ内容報告</li> <li>・作文コンテストの進捗報告 ・春学期の支出と予算</li> <li>・『レポートの書き方ガイド(発展篇)』の発行</li> <li>・秋学期の各種講座、イベント開催予定の確認</li> </ul>
8	11月18日(水)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育推進部でのルーブリックの開発と学部への普及</li> <li>・教育推進部で実施した試行的パネル調査</li> <li>・TA合同研修会の確認 ・ラボ合同ガイダンスの開催</li> </ul>
9	12月16日(水)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ルーブリックの運用と展開 ・高槻キャンパスの運営</li> <li>・2016年度のワンポイント講座</li> <li>・学部教員へのガイダンス実施報告と今後の実施</li> <li>・TEC-folioの利用ガイダンス ・関西大学高等部との連携</li> <li>・作文コンテストへのステークホルダーの協力</li> </ul>

回	日付	主な検討・報告事項	
10	1月13日(水)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ラボ HP 改修</li> <li>・図書館との連携について</li> <li>・TEC-folioの利用ガイダンス</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作文コンテストの進捗報告</li> <li>・各学部に対するラボ利用ガイダンス</li> </ul>
11	2月16日(火)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2016年度のラボ運営</li> <li>・ラボ HP 改修の進捗報告</li> <li>・TEC-folioの利用ガイダンス</li> <li>・ラボの利用にかんする教員へのアンケート</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2016年度のワンポイント講座</li> <li>・作文コンテストの進捗報告</li> <li>・各学部に対するラボ利用ガイダンス</li> </ul>
12	3月15日(火)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2016年度のラボ運営</li> <li>・ラボ HP 改修完了の報告</li> <li>・作文コンテストの進捗報告</li> <li>・各学部に対するラボ利用ガイダンス</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2016年度のワンポイント講座</li> <li>・留学生のライティング支援(国際部)</li> <li>・TEC-folioの利用ガイダンス</li> <li>・ラボの利用にかんする教員へのアンケート</li> </ul>

## 2. 個別相談

ラボでは、相談を経て、学生が自ら主体的に書き直せるようになることを目指している。基本方針は、学生の「気づき」を促すことである。大学院生の TA が学部生の文章作成上の相談に対応しているが、TA が一方的に指導したり、学生の文章を修正するなどの答えを与えたりするのではなく、質問を投げかけて学生に自ら考えてもらい、対話を通して学生が何を書きたいのかを明確にし、どのように文章を書いていけばよいのかについてアドバイスをしている。

### (1) 施設

千里山キャンパスでは、第1学舎1号館5階に「ライティングラボ1」、同6階に「ライティングラボ2」を設けた。「ライティングラボ1」(図1)では学部生の個別相談に対応し、「ライティングラボ2」では各種の会議や研修などを行った。また、2015年度は、第1学舎に加えて、総合図書館1階に開設された「ラーニング・commons」内の「ライティング・エリア」(図2)にも TA が在席し、第1学舎と同様に個別相談を受け付けた。これにより、千里山キャンパスでは、2つの場所で個別相談に対応することが可能になった。一方、凜風館1階のコラボレーションcommons内ライティングエリアでは、2013年度から実施している「Learning Café」という講座を引き続き開催した(講座の詳細は後述する)。

高槻キャンパスでは、2014年度に引き続き、C棟1階の学生サービスステーション(図3)で個別相談を受け付け、対応した。

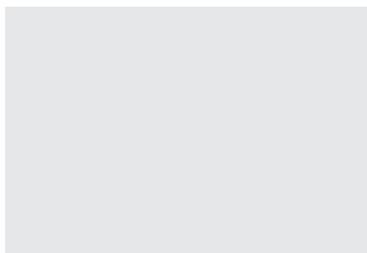


図1 第1学舎1号館5階ライティングラボ1

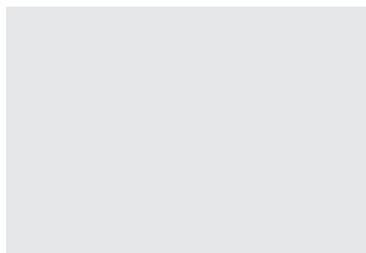


図2 総合図書館ラーニング・commons内ライティング・エリア

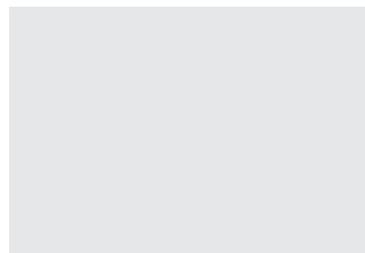


図3 高槻キャンパスC棟1階学生サービスステーション

### (2) スタッフ

2015年度の春学期開室(4月20日)時は、特任教員3名、事務員1名、千里山キャンパス TA 19名、高槻キャンパス TA 6名(2015年3月に採用した新規 TA3名を含む)の体制であった。特任教員はコーディネーターと

してラボの運営を管理し、TAは学生の個別相談に対応した。開室時間中、TAは1から3名が常駐し、予約相談に対応するとともに、予約しないで来室する学生の相談にも対応した。TAは、全て関西大学大学院に在学する博士前期あるいは後期課程の大学院生、および同大学院OB・OGであった。千里山キャンパスのTAは、文学、法学、社会学、経済学など文系の学問を専攻する学生が主であった。一方、高槻キャンパスのTAは、設置されている学部が総合情報学部であることから、情報学を専攻する学生が主であった。

千里山キャンパスでは、4月に書類審査、面接を経て新たに2名のTAを採用し、6月からはTA21名の体制となった。また、高槻キャンパスでは、2015年3月に新たに3名のTAを採用し、4月からTA6名の体制であった。新規TAは、およそ1ヶ月の研修期間を経て、学部生の相談に対応した。研修の内容については(10)①で後述する。秋学期開室(10月12日)時には、学業の都合などによりTA数が減少し、千里山キャンパスのTAは18名となった。

### (3) 開室期間・時間と開室日数

#### ①千里山キャンパス

各学期の始めは授業でレポート課題が出されることが少ないことを考慮し、春学期は授業開始日の2週間後、秋学期は授業開始日の3週間後に開室した。また、両学期とも、最終授業日より後にレポート課題の締め切りが設定される授業が多く見られることを考慮し、最終授業日の翌週まで開室した。

開室曜日は、原則として、月曜から金曜までとし、土曜、日曜、祝日は閉室した(2015年度は、関西大学の授業暦により祝日でも授業が実施される日はラボも開室した)。開室時間は、11:30から17:00までとし、1回40分の相談時間帯を1日に7つ設けた(表2)。千里山キャンパスでの開室日数は、春学期が4月20日(月)から7月31日(金)までの71日間、秋学期が10月12日(月)から1月29日(金)までの65日間であった。

表2 ライティングラボの開室時間と相談時間枠

枠	A	B	C	D	E	F	G
時間	11:30～ 12:10	12:15～ 12:55	13:00～ 13:40	13:50～ 14:30	14:40～ 15:20	15:30～ 16:10	16:20～ 17:00

#### ②高槻キャンパス

高槻キャンパスのラボは、2014年10月の開設からまだ日が浅く、学生や教員の認知度および利用者数が千里山キャンパスに比し、低いという事情がある。その点を考慮し、春学期の開室曜日は月曜日を閉室とする平日4日間、開室時間は11:30から15:20までとした。秋学期の開室前には、それまでの利用者数を再度見直した。その結果、平日5日間の開室とし、時間を13:00から16:10までと変更した。高槻キャンパスでの開室日数は、春学期が4月21日(火)から7月31日(金)までの57日間、秋学期が10月12日(月)から1月29日(金)までの61日間であった。

### (5) 相談対象

ラボでの相談対象は、レポート、卒業論文、授業での発表資料(レジュメ、スライドなど)が中心であった。2015年度の特徴として、ゼミや留学の志望理由書などの相談が増加した点が挙げられる。2014年度に引き続き、交換留学の志望理由書については関西大学国際部との連携により、ラボでアドバイスが可能な内容と国際部で確認が必要な内容を明確にして支援を行った。また、エントリーシートなど就職活動にかかわる文章については、関西大学キャリアセンターと連携し、対応の棲み分けを図った。

### (6) TEC-systemの導入

「TEC-system」(<https://tecfolio.kansai-u.ac.jp/kwl/>)は、本取組で開発されたeポートフォリオシステムであり、

ライティングセンターの運営にかかわる部分（TEC-book）とeポートフォリオシステム（TEC-folio）から成っている。ラボでは、2015年度春学期よりTEC-bookの本運用を開始した。

ラボは、昨年度まで、千里山キャンパス第1学舎1号館と高槻キャンパスC棟の2箇所で開催してきた。その際、2014年10月にオープンした高槻キャンパスでは、相談予約と指導記録の管理を紙媒体で行っていた。その背景には、旧システム（まなかんウェブ）が複数箇所利用を前提としておらず、並行利用をすると千里山キャンパスと高槻キャンパスで予約状況や指導履歴データの混在が生じてしまうため、それを避けたいという運営管理者の意向があった。並行して複数箇所での利用が可能なTEC-bookは、上述の問題状況を解消するシステムである。

TEC-bookの導入により、従来の2箇所に「千里山キャンパス総合図書館ラーニング・コモンズ内」を加えた計3箇所体制でのラボの運営が可能となり、スタッフ間の情報共有の利便性が格段に向上した。なお、TEC-systemのより詳細な機能については、「VI eポートフォリオ開発部会の取組」を参照されたい。

## (7) 授業科目との連携

学生の学びを授業外でも支援する目的で、2012年度より、ラボと教育カリキュラムの連携を進めている。2015年度は、本格的なルーブリックの活用と合わせて、ラボとの連携を教員に提案する機会が複数設けられた（ルーブリックについての詳細は、「IX 評価指標部会の取組」を参照されたい）。また、学部執行部や教授会後に学部の教員全員に対してラボの概要や授業連携の方法を説明する機会が設けられた。そのほか、2014年度までと同様に、千里山キャンパスに所属する全学部の専任教員を対象にラボ利用案内の書面を配布し、利用の促進を図った。

授業科目とラボとの連携内容は大きく分けて3つであった。

第1に、授業時間内にラボ利用ガイダンスを実施した。ガイダンスの内容は、学生を対象に、ラボの活用方法を紹介し、具体的な予約方法のデモンストレーションを行うものであった。ガイダンスは、第1学舎のラボ、あるいは総合図書館のラーニング・コモンズでの実施か、講義教室に出張して実施する形態をとった。

第2に、教員から授業を通して学生にラボの利用指示が出された場合は、ラボにも課題内容を通知してもらうよう教員に依頼した。学生が相談に来る前にTAが課題内容を把握することで、課題により適した支援を行うためであった。また、教員の指示により学生がラボを利用した際には「ラボ利用証明書」を発行し、入室時の学生の状況やラボでの支援内容を教員にフィードバックする試みも行った。

第3に、特任教員が講義教室に出張して講座等を実施し、授業とのより密な連携を図った。出張講座の内容は、レポートや卒業論文に取り組む際の姿勢や文章構成、引用の方法などについて、ワークを交えて解説するものであった。そのほか、レジュメやスライドなどの発表資料の作成についての小講座や、演習授業に参加し学部生の発表に対してコメントするなど、さまざまな形で授業と連携した。

2015年度の連携授業件数は、春学期42件、秋学期18件、総数60件であった。この数値は、2012年度の27件、2013年度の33件、2014年度の48件と、着実に増加の傾向がみられる。今年度利用ガイダンスや出張講座を行った授業科目、およびラボに課題内容の通知があった授業科目は下記の表3、4のとおりであった。

表3 連携した授業科目とその内容（春学期）

学部	授業科目	配当年次	連携の内容
共通	文章力をみがく	1年次	利用ガイダンス、教員から学生へのラボ利用指示、レポート・小論文の個別相談
	スタディスキルゼミ (ノートをまとめる)	1年次	教員から学生へのラボ利用指示、レポートの個別相談
	スタディスキルゼミ (プレゼンテーション)	1年次	教員から学生へのラボ利用指示、レポートの個別相談、発表資料の個別相談
	スタディスキルゼミ (レポートを作成する)	1年次	教員から学生へのラボ利用指示、レポートの個別相談
	メディア教育論		教員から学生へのラボ利用指示、レポートの個別相談
	関大生の私にできること		教員から学生へのラボ利用指示、文章課題の個別相談

学部	授業科目	配当年次	連携の内容
文学部	知のナビゲーター (複数クラス開講)	1年次	利用ガイダンス、出張講座、教員から学生へのラボ利用指示、レポートや文章課題の個別相談、発表資料の個別相談
文学部	知へのパスポート	1年次	利用ガイダンス、発表資料作成の小講義、発表に対するコメント
文学部	専修フランス語(二) a	3年次	教員から学生へのラボ利用指示、文章課題の個別相談
文学部	フランス学総合研究 a	4年次	教員から学生へのラボ利用指示、文章課題の個別相談
経済学部	経済学ワークショップ	1年次	利用ガイダンス
商学部	専門演習	3年次	利用ガイダンス、出張講座
社会学部	基礎研究 (複数クラス開講)	1年次	利用ガイダンス
政策創造学部	導入ゼミ I	1年次	利用ガイダンス、教員から学生へのラボ利用指示、レポートの個別相談
政策創造学部	専門演習	3年次	利用ガイダンス、発表資料の個別相談
外国語学部	基礎演習	1年次	教員から学生へのラボ利用指示、文章課題の個別相談

表 4 連携した授業科目とその内容 (秋学期)

学部	授業科目	配当年次	連携の内容
共通	文章力をみがく	1年次	利用ガイダンス、教員から学生へのラボ利用指示、レポート・小論文の個別相談
	スタディスキルゼミ (ノートをまとめる)	1年次	教員から学生へのラボ利用指示、レポートの個別相談
	スタディスキルゼミ (プレゼンテーション)	1年次	教員から学生へのラボ利用指示、レポートの個別相談、発表資料の個別相談
	スタディスキルゼミ (レポートを作成する)	1年次	教員から学生へのラボ利用指示、レポートの個別相談
法学部	基礎演習	1年次	教員から学生へのラボ利用指示、レポートの個別相談
文学部	知のナビゲーター (複数クラス開講)	1年次	教員から学生へのラボ利用指示、レポートの個別相談
文学部	文学部専修ゼミ (専修ごとに開講)	2年次	利用ガイダンス、発表資料作成の小講義、発表に対するコメント
文学部	文学部専修ゼミ (専修ごとに開講)	3年次	利用ガイダンス
商学部	卒業研究	4年次	利用ガイダンス、出張講座
社会学部	基礎研究 (複数クラス開講)	1年次	利用ガイダンス

## (8) 利用実績

### ① 過去 5 年間の利用者数 (延べ人数) の推移

これまでにラボを利用した学生の延べ人数は、表 5 のとおりである。卒論ラボとして開設した 2011 年度から比較すると、利用者数は年々増加の傾向にある。2015 年度は、2014 年度よりさらに利用者数を伸ばした。これは、千里山キャンパスにおいて総合図書館内でも個別相談が受け付けられるようになったことが主な理由であろう。そのほかにも、TEC-book の導入による予約の取りやすさの向上や、ループリックの活用と合わせて正課科目とラボの連携を積極的に教員に働きかけたことが功を奏したものと考えられる。

表5 2011年度から2015年度までの利用者数（延べ人数）

	4月	5月	6月	7月	9・10月	11月	12月	1月	年間計
2011年度	5	39	79	56	40	53	71	33	376
2012年度	2	26	62	139	57	18	34	54	392
2013年度	19	167	131	150	36	74	60	50	687
2014年度	38	115	152	257	59	76	91	67	855
<b>2015年度</b>	<b>36</b>	<b>213</b>	<b>262</b>	<b>304</b>	<b>107</b>	<b>127</b>	<b>124</b>	<b>169</b>	<b>1,342</b>

### ②リピーター（複数回利用者）の割合の推移

後述のラボ利用アンケートにおいて、学生が回答したラボ利用回数の値に基づき、ラボ利用が2回目以上である学生を「リピーター」とした。図4は、リピーターがその学期（あるいは通年）の利用者に対して占める割合を年度ごとに示したものである。2015年度は、通年のリピーター率が過去5年間のうちで最も高くなった。学期ごとの傾向を踏まえると、春学期のリピーター率の上昇が大きく影響していると考えられる。

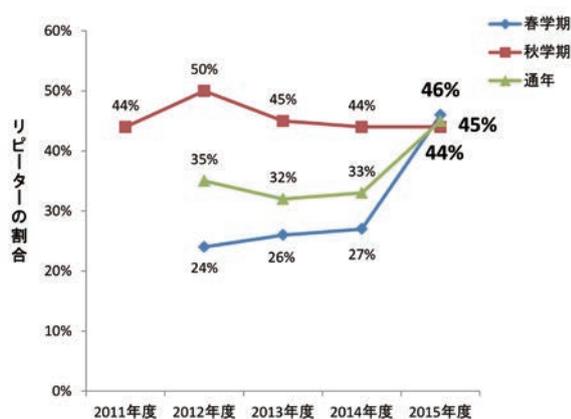


図4 2011年度から2015年度までのリピーターの割合  
(2011年度春学期は利用回数についての回答なし)

### ③今年度の利用者における学年別、および相談する文書の種類別の傾向

2015年度にラボを利用した学生を、学期ごとに学年別に集計したものを表6と図5に示す。また、同様に相談する文書の種類別に集計したものを表7と図6に示す。

春学期は、1年生による利用が73.5%となっており、他の学年よりも多いことが特徴的である。これは、1年生が授業でレポートを課された際に、これまでレポートを書いたことがないため、書き方や内容に不安があり、教員の指示により、あるいは自発的にラボを利用していることが推測される。相談する文書の種類を見ると75.0%がレポートの相談となっていることから、春学期はレポートに何をどう書いてよいかわからない1年生のニーズが高いと言える。

一方、秋学期は、1年生の利用が46.7%と最も多いが、2年生と4年生の割合が合計して43.5%（春学期は同17.9%）と増えていることが特徴的である。また、相談する文書の種類を見ると、卒業論文は25.4%（春学期は同1.3%）、志望理由書は16.3%（春学期は同5.9%）と、秋学期利用者全体に占める割合が増えている。秋学期に留学の志望理由書の提出期間が設けられていること、2年生はゼミや演習の志望理由書を提出するよう設定されている学部があること、4年生は卒業論文の提出時期であることから、秋学期はこれらの相談にかんするニーズが高いと言える。

上記の傾向を踏まえ、今後のラボの課題として、3年生の利用を増やすこととレポート以外の文書への支援体制を拡充することが挙げられる。例えば、3年生の多くは、ゼミにおける発表資料の作成や卒業論文の準備（プレ卒論など）を抱えていることが考えられる。そうした学生向けのワンポイント講座（詳細は後述する）を開講したり、授業担当者への広報活動を強化したりする必要がある。

表6 学年別の利用者延べ人数 (割合)

学年	春学期	秋学期
1年生	599( 73.5)	246( 46.7)
2年生	114( 14.0)	109( 20.7)
3年生	68( 8.3)	37( 7.0)
4年生	32( 3.9)	120( 22.8)
その他 過年度生や大学院生等	2( 0.2)	15( 2.8)
合 計	815(100.0)	527(100.0)

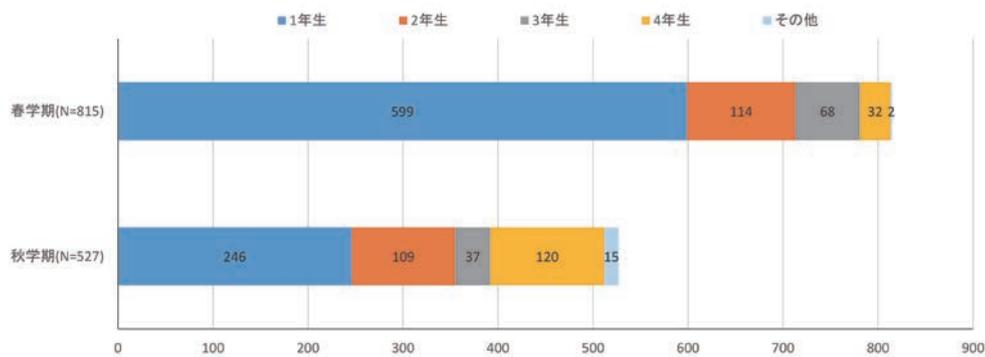


図5 学年別の利用者数 (延べ人数)

表7 相談する文書の種類別の利用者延べ人数 (割合)

文書の種類	春学期	秋学期
レポート	611( 75.0)	258( 49.0)
卒業論文	11( 1.3)	134( 25.4)
レジュメ	41( 5.0)	9( 1.7)
スライド	13( 1.6)	5( 0.9)
志望理由書	48( 5.9)	86( 16.3)
その他(記入なしを含む)	92( 11.1)	35( 6.6)
合 計	815(100.0)	527(100.0)

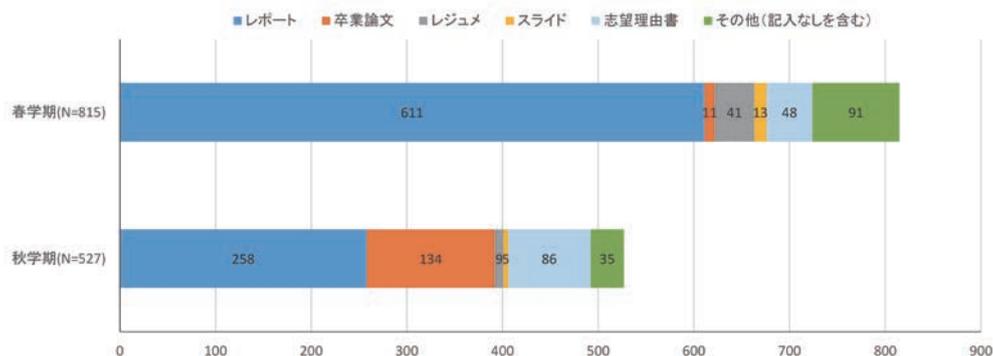


図6 相談する文書の種類別の利用者数 (延べ人数)

#### ④今年度の利用者における学部別の傾向

2015年度にラボを利用した学生を、学期ごとに学部別に集計したものを表8と図7に示す。

春学期、秋学期ともに文学部の学生の利用が最も多かった（春学期 42.9%、秋学期 30.9%）。これは、ラボの前身が文学部の設置した「卒論ラボ」であること、2014年度までラボの活動が文学部の授業が多く実施されている第1学舎のみで行われていたこと、および「知のナビゲーター」をはじめとする文学部の授業との連携が多かったことの名残であると考えられる。しかし、2015年度春学期は、商学部（13.3%）、政策創造学部（12.3%）、秋学期は社会学部（14.2%）、法学部（10.1%）など、文学部以外の利用者の合計が過半数を占め、利用学部の多様化が進んだ。

その一方で、理工系学部（システム理工学部、環境都市工学部、化学生命工学部）の利用者が少なかった。同学部では、数学や物理学などの基礎分野を中心として教員や学生チューターが学生の質問に対応する学習支援室が設置されている。そのため、文章作成にかんする小さな質問はそこで解消している可能性がある。しかし、文章作成そのものに支援を必要とする学生がいるとも考えられるため、今後の課題として、理工系学部の教員や学生へのヒアリング等から理工系学部の学生に対するライティング支援のニーズを明らかにし、ラボが提供できる支援内容を検討する必要がある。

また、所属キャンパスにラボがないにもかかわらず、人間健康学部の学生のラボ利用もみられた。これは、後述するワンポイント講座の参加者の多さにも表れているように、同学部でライティング支援のニーズが高く、同講座の参加やラボの利用に対して教員から学生に積極的なはたらきかけがあったことが一因である。このように、ラボがないキャンパスにおけるライティング支援もラボの課題として考えていかねばならない。

表8 学部別の利用者延べ人数（割合）

学部	所属キャンパス	春学期	秋学期
法学部	千里山	70( 8.6)	53( 10.1)
文学部		350( 42.9)	163( 30.9)
経済学部		27( 3.3)	44( 8.3)
商学部		108( 13.3)	39( 7.4)
社会学部		54( 6.6)	75( 14.2)
政策創造学部		100( 12.3)	32( 6.1)
外国語学部		25( 3.1)	13( 2.5)
人間健康学部	堺	28( 3.4)	17( 3.2)
総合情報学部	高槻	40( 4.9)	76( 14.4)
社会安全学部	高槻ミューズ	0( 0.0)	0( 0.0)
システム理工学部	千里山	9( 1.1)	1( 0.2)
環境都市工学部		0( 0.0)	4( 0.8)
化学生命工学部		3( 0.4)	1( 0.2)
その他(大学院)		1( 0.1)	9( 1.7)
合計		815(100.0)	527(100.0)



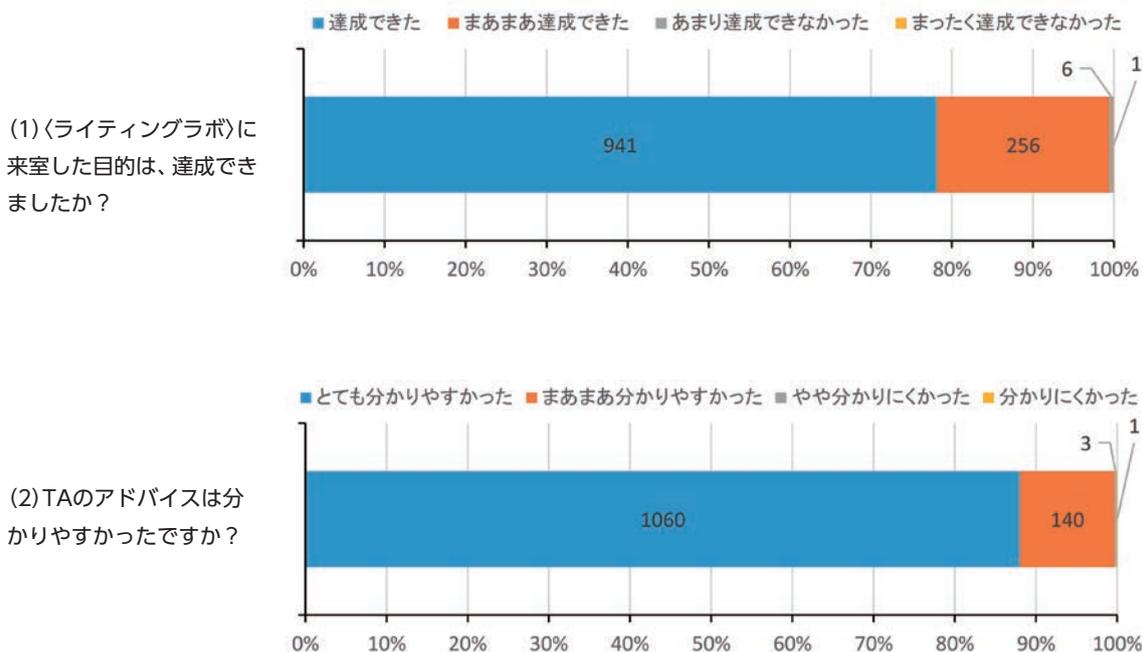
図7 学部別の利用者数（延べ人数）

### (9) 利用者アンケート

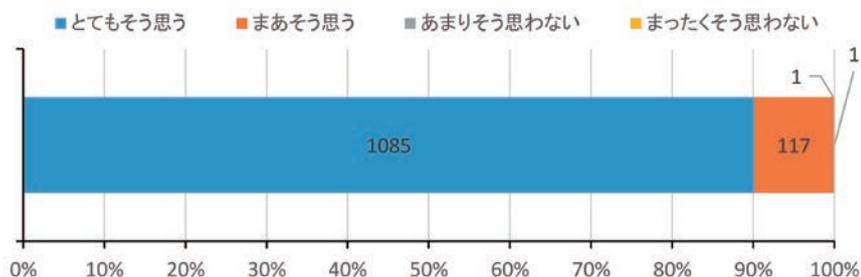
今後のラボの運営や相談の質の向上のため、個別相談終了後に、学生にはアンケートへの回答を依頼した。設問は以下の4つであった。

- (1) 〈ライティングラボ〉に来室した目的は、達成できましたか？
- (2) TAのアドバイスは分かりやすかったですか？
- (3) TAから受けたアドバイスは、今後の役に立ちそうですか？
- (4) 〈ライティングラボ〉をまた利用したいと思いますか？

回答選択肢は4段階であり、低評価の回答（4段階のうちの下位2つの選択肢）であった場合には、その理由を自由記述でたずねた。さらに、ラボに対する感想や要望などを自由に記述する欄を設けた。2015年4月から2016年1月までの集計結果は図8のとおりである（いずれも N=1204）。



(3)TAから受けたアドバイスは、今後の役に立ちそうですか？



(4)〈ライティングラボ〉をまた利用したいと思えますか？

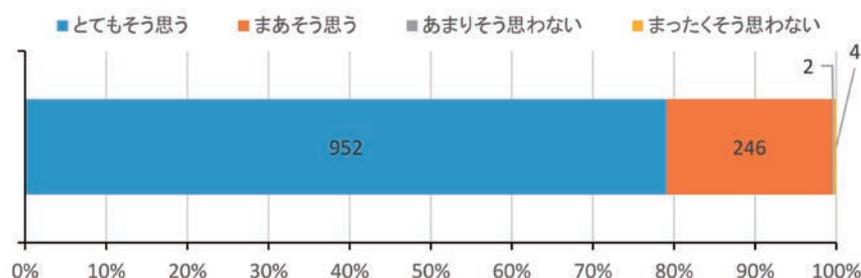


図8 利用者アンケート集計結果

アンケートの結果をみると、TAのアドバイスにかんする設問2、3においては、8割以上の学生が4段階のうち最も高い評価を選択していた。上位2つの選択肢まで含めると、いずれの設問においても9割以上がラボの利用に満足し、また利用したいと感じていることが示された。自由記述の回答からも、「レポートに対する疑問点が解消されました」「自分では気づけなかった点や、どうしても出てこなかった考えなどをTAさんが丁寧に導いてくださったので、とても参考になりました」など、ラボでの支援に概ね高評価が得られていることがわかる。

## (10) TAの研修

### ①新規TAの導入研修

新規TAには採用後、実際の学生相談を担当する前におよそ1か月の導入研修を行った。研修は特任教員がファシリテーターとなって実施した。研修の内容は表9のとおりである。

表9 新規TA研修の内容

日程(目安)	研修内容	概要
1週目	業務説明	雇用契約、TAマニュアルの配布、ラボの概要、TA業務(学生相談の流れ、勤務日のラボでの過ごし方)の詳細や注意事項(勤務態度、連絡先)などの説明を受ける
2週目	コミュニケーション研修	TAとしての心構え、コミュニケーションにおける注意点の講義を受け、実践する(傾聴など)
3週目	ロールプレイ	TAと学生役に分かれて、さまざまな状況設定のもと、ロールプレイを行う ロールプレイ後にはふり返りを行い、注意すべきことを共有する
	セッション見学	ラボに入り、実際の相談状況を見学する 見学後には、先輩TAと相談対応についてディスカッションを行う

## ②全体研修

2015年度の全体研修の日程と内容は表10のとおりであった。春学期の開室前には、2014年度に問題として挙がっていた配慮の必要な学生に対する研修を行った。講師として関西大学学生相談・支援センターより近森聡氏を招き、講義と全体討論により学生に対する接し方を検討した。また同時期に、TEC-book利用にかんする研修も行った。

先述したとおり、ゼミや留学の志望理由書の相談が増加傾向にあることを踏まえ、秋学期には、志望理由書にかんする対応を検討する機会を設けた。その際、キャリアにかかわる文章に多く対応している津田塾大学ライティングセンターと連携し、TV会議システムを用いたTA合同研修会として実施した。研修内容の詳細は「Ⅶ TA合同研修会」で後述する。

表10 全体研修の日程と内容

開催日	内容
4月7日(火) 4月9日(木) 4月14日(火)	TEC-book利用の研修、および今学期の運営について確認 ・改訂版マニュアルの配付 ・TEC-bookを用いた相談予約の取り方、相談履歴の残し方の実践 ・電子出勤システムについて ・千里山キャンパス2場所体制の勤務について
4月15日(水)	学生相談・支援センターによる研修 ・配慮の必要な学生について ・質疑応答
10月28日(水)	TA合同研修、志望理由書の相談対応についての検討 ・問題点の抽出とその対策の共有(グループディスカッション) ・実際の相談文書を例に用いたアドバイス内容の検討

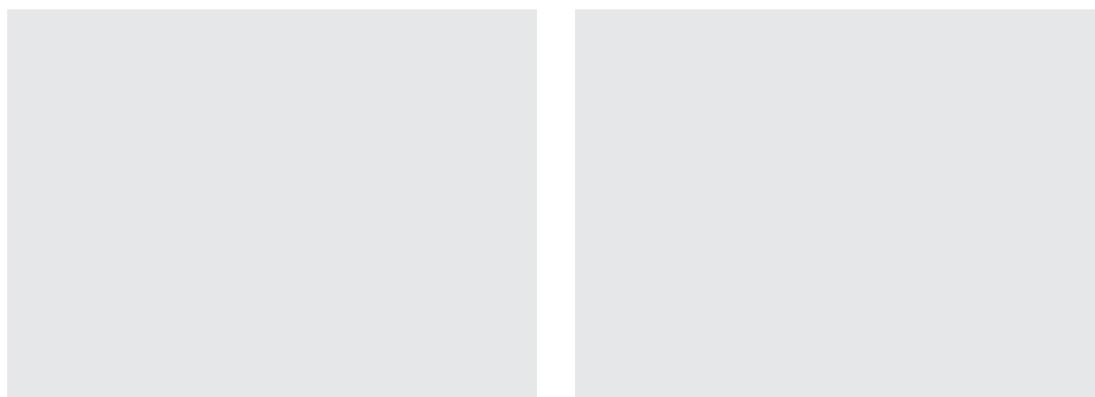


図9 TA合同研修会の様子

## ③ミーティング

2015年度は、千里山キャンパスにて、秋学期の終わりにTAミーティングを開いた(表11)。1年の勤務をふり返り、TAと特任教員が学生対応上の問題点や運営にかんする改善点などを中心に意見を交わした。なお、すべてのミーティングで出された意見を後日、ミーティング不参加者も含めて全体で共有した。

表 11 ミーティングの日程と主な内容

開催日	開催場所	参加 TA 数	主な内容
1月22日(金)	総合図書館	4名	教員の指示により来室する学生への対応 ・授業連携で課される課題の種類・内容 ・特任教員からTAへの伝達方法 ・教員の指示で来る学生とそうでない学生の区別 ・締め切り直前にラボに来る学生への対応 留学生の対応についての確認 理系の学部で課される課題への対応
1月25日(月)	総合図書館	2名	
	第1学舎	3名	
1月26日(火)	総合図書館	3名	
1月27日(水)	総合図書館	3名	
1月28日(木)	総合図書館	2名	
	総合図書館	1名	

### 3. ワンポイント講座

千里山キャンパス、高槻キャンパス、高槻ミュージックキャンパス、堺キャンパスの各キャンパスにおいて、レポートを書くためのワンポイントを昼休みの30分で学ぶ授業外講座を実施した。講座内容は、特任教員が企画した。『レポートの書き方ワンポイント講座』と題して各キャンパスで実施した講座内容の詳細は、下記のとおりである。

#### (1) 千里山キャンパス (春学期)

図 10 ワンポイント講座の様子

表 12 のとおり実施した。全 5 回の参加者総数は 120 名であった。

表 12 レポートの書き方ワンポイント講座の日程とタイトル (千里山キャンパス・春学期)

回	日付	担当者	講座タイトル
1	5月20日(水)	小林至道 毛利美穂 西浦真喜子	なぜ大学でレポートを書くの？
2	5月27日(水)		レポートの基本形とは？
3	6月3日(水)		レポートを書くネタをどう探す？
4	6月10日(水)		さあ、何から書き始める？
5	6月17日(水)		コピペの何がいけないの？

#### (2) 高槻キャンパス (春学期)

表 13 のとおり実施した。全 5 回の参加者総数は 94 名であった。

表 13 レポートの書き方ワンポイント講座の日程とタイトル (高槻キャンパス・春学期)

回	日付	担当者	講座タイトル
1	5月26日(火)	小林至道	なぜ大学でレポートを書くの？
2	6月2日(火)	小林至道	レポートの基本形とは？
3	6月4日(木)	西浦真喜子	レポートを書くネタをどう探す？
4	6月9日(火)	毛利美穂	さあ、何から書き始める？
5	6月11日(木)	西浦真喜子	コピペの何がいけないの？

### (3) 高槻ミュージックキャンパス (春学期)

表 14 のとおり実施した。全 2 回の参加者総数は 33 名であった。

表 14 レポートの書き方ワンポイント講座の日程とタイトル (高槻ミュージックキャンパス・春学期)

回	日付	担当者	講座タイトル
1	7月9日(木)	小林至道	レポートの基本形とは？
2	7月10日(金)	西浦真喜子	コピペの何がいけないの？

### (4) 堺キャンパス (春学期)

表 15 のとおり実施した。全 2 回の参加者数は 293 名であった。

表 15 レポートの書き方ワンポイント講座の日程とタイトル (堺キャンパス・春学期)

回	日付	担当者	講座タイトル
1	7月7日(火)	毛利美穂	レポートの基本形とは？
2	7月9日(木)	西浦真喜子	コピペの何がいけないの？

### (5) 高槻キャンパス (秋学期)

表 16 のとおり実施した。全 2 回の参加者総数は 3 名であった。

表 16 レポートの書き方ワンポイント講座の日程とタイトル (高槻キャンパス・秋学期)

回	日付	担当者	講座タイトル
1	12月3日(木)	毛利美穂	レポートの基本形とは？
2	12月10日(木)		コピペの何がいけないの？

### (6) 高槻ミュージックキャンパス (秋学期)

表 17 のとおり実施した。全 2 回の参加者総数は 4 名であった。

表 17 レポートの書き方ワンポイント講座の日程とタイトル (高槻ミュージックキャンパス・秋学期)

回	日付	担当者	講座タイトル
1	12月11日(金)	小林至道	レポートの基本形とは？
2	12月18日(金)		コピペの何がいけないの？

## (7) 堺キャンパス (秋学期)

表 18 のとおり実施した。全 2 回の参加者総数は 7 名であった。

表 18 レポートの書き方ワンポイント講座の日程とタイトル (堺キャンパス・秋学期)

回	日付	担当者	講座タイトル
1	12月9日(水)	西浦真喜子	レポートの基本形とは?
2	12月16日(水)		コピペの何がいけないの?

## (8) 事後アンケート結果

ワンポイント講座では、受講者に事後アンケートを実施した。結果は、以下のとおりであった。

表 19 ワンポイント講座事後アンケートの結果 (4 キャンパス別・春秋学期合算)

キャンパス	選択肢	千里山	高槻	ミューズ	堺	合計
ワンポイント講座 開催回数		5	7	4	4	20
アンケート回答者 延べ人数		120	94	33	219	466
学年	1回生	114	73	25	209	421
	2回生	4	10	2	3	19
	3回生	1	11	6	2	20
	4回生	1	0	0	5	6
性別	男	41	52	29	132	254
	女	79	42	4	87	212
これまでのラボ (個別相談) 利用	教員指示で利用	1	0	キャンパスに ラボが無いので 不問		1
	自主的に利用	1	3		4	
	利用したことがない	32	21		53	
	存在を初めて知った	6	8		14	
	無回答	4	7		11	
ワンポイント講座開催を 何で知ったか	インフォメーションシステム	18	2	2	7	29
	学内掲示板	13	11	2	12	38
	ライティングラボのHP	0	0	0	4	4
	ラボ予約システムの案内版	0	0	1	7	8
	チラシ(置き配布)	5	2	2	2	11
	教員から	3	8	16	18	45
	他の学生から	8	13	8	2	31
無回答	3	7	0	0	10	
ワンポイント講座を 受講した理由	テーマに興味があったから	14	5	4	17	40
	時間が空いていたから	2	5	4	7	18
	レポートのことで困っていたから	21	13	7	40	81
	教員に薦められたから	1	3	7	40	51
	なんとなく	1	6	6	10	23
	無回答	3	8	0	2	13

表 19 は、今年度春学期、秋学期に 4 キャンパスで実施したワンポイント講座の事後アンケート結果を示したものである。以下、アンケート結果の数値から読み取れる 4 点について述べる。

第一に、受講者の約 9 割が初年次生であった。この講座は、レポートの書き方にかんする基本を 30 分×開催回数の中で学ぶことを主眼としているが、「そもそもレポートの書き方が分からない」「レポートを書くのが初めてなので、その基本的な書き方を知りたい」という初年次生の多くが受講したことがわかる。

第二に、ワンポイント講座を受講する前のラボ利用の有無を問うた設問では、約8割の学生が、「利用したことがない」「存在を初めて知った」と回答した。この講座は、ラボの学内認知度を上げることもその目的の一つとして開催してきた。ラボでの個別支援とは別に一斉講義形式でレポートライティング支援を行うこの講座をキッカケとして、いかに広くラボの存在を知ってもらうか、どれだけラボ利用につなげていくことができるかという点は、引き続き課題であると言える。

第三に、ワンポイント講座の開催を知った経緯については、キャンパス間で若干の差異が見られた。ラボが設置されていない高槻ミューズ、堺の両キャンパスでは、授業担当教員からの薦めが最も多かった。一方で、千里山キャンパスにおいては、学生個々に情報を届けられるインフォメーションシステムを通しての通知が、高槻キャンパスでは学内掲示板に貼ったチラシが、広報上、効果的であったことがうかがえる結果となった。

第四に、ワンポイント講座を受講した理由は、「レポートのことで困っていたから」が最も多かった。堺キャンパスでは「教員に薦められたから」が最も多かったが、これはラボとの連携のもと、授業担当教員から多くの学生に働きかけていただいたという背景があつてのことである。「テーマに興味があったから」と回答した学生が少なからず見られることから、各回30分で伝えるワンポイントのテーマを何に設定するのかという点は、開催者にとって検討し続けなければならない重要な課題であると言える。

続いて表20・21では、各回の難易度と満足度についての回答結果をキャンパス別に整理し、対照表とした。難易度については、ほとんどの学生が「ほどよかった」あるいは「易しかった」と回答したことから、難易度の設定は適切であったと考えられる。満足度についても、概ね良好な結果が得られた。

表 20-1 ワンポイント講座の難易度（テーマ別・キャンパス別）

第1回 なぜ大学でレポートを書くの？			
	千里山	高槻	合計
易しかった	2	8	10
ほどよかった	19	14	33
やや難しかった	0	0	0
難しかった	0	0	0
無回答	1	1	2

表 20-2 ワンポイント講座の難易度（テーマ別・キャンパス別）

第2回 レポートの基本形とは？					
	千里山	高槻	ミューズ	堺	合計
易しかった	2	5	6	16	29
ほどよかった	33	15	10	76	134
やや難しかった	1	0	1	8	10
難しかった	0	0	1	1	2
無回答	1	0	0	6	7

表 20-3 ワンポイント講座の難易度（テーマ別・キャンパス別）

第3回 レポートを書くネタをどう探す？			
	千里山	高槻	合計
易しかった	5	3	8
ほどよかった	14	10	24
やや難しかった	0	0	0
難しかった	0	0	0
無回答	0	0	0

表 20-4 ワンポイント講座の難易度（テーマ別・キャンパス別）

第4回 さあ、何から書き始める？			
	千里山	高槻	合計
易しかった	3	4	7
ほどよかった	13	13	26
やや難しかった	3	2	5
難しかった	1	0	1
無回答	0	0	0

表 21-5 ワンポイント講座の難易度（テーマ別・キャンパス別）

第5回 コピペの何がいけないの？					
	千里山	高槻	ミューズ	堺	合計
易しかった	5	0	1	10	16
ほどよかった	14	16	13	95	138
やや難しかった	2	2	1	4	9
難しかった	0	0	0	1	1
無回答	1	0	0	4	5

表 21-1 ワンポイント講座の満足度（テーマ別・キャンパス別）

第1回 なぜ大学でレポートを書くの？			
	千里山	高槻	合計
満足	12	8	20
まあ満足	9	14	23
やや不満	0	1	1
不満	0	0	0
無回答	1	0	1

表 21-2 ワンポイント講座の満足度（テーマ別・キャンパス別）

第2回 レポートの基本形とは？					
	千里山	高槻	ミューズ	堺	合計
満足	28	10	7	42	87
まあ満足	9	10	11	51	81
やや不満	0	0	0	8	8
不満	0	0	0	3	3
無回答	0	0	0	3	3

表 21-3 ワンポイント講座の満足度（テーマ別・キャンパス別）

第3回 レポートを書くネタをどう探す？			
	千里山	高槻	合計
満足	7	5	12
まあ満足	12	6	18
やや不満	0	1	1
不満	0	1	1
無回答	0	0	0

表 21-4 ワンポイント講座の満足度（テーマ別・キャンパス別）

第4回 さあ、何から書き始める？			
	千里山	高槻	合計
満足	10	5	15
まあ満足	9	6	15
やや不満	1	1	2
不満	0	1	1
無回答	1	0	1

表 21-5 ワンポイント講座の満足度（テーマ別・キャンパス別）

第5回 コピペの何がいけないの？					
	千里山	高槻	ミューズ	堺	合計
満足	14	7	8	45	74
まあ満足	7	12	7	67	93
やや不満	0	0	0	0	0
不満	0	0	0	0	0
無回答	0	1	0	2	3

## 4. 講演会・セミナー

### 社会連携ワークショップ：「未来の旅行を考える」～〇年後、日本は、世界は、どんな社会になっているのだろうか？～

講 師：占部礼二氏（株式会社 morisemi）、小林至道（関西大学教育推進部特任助教）

コメンテーター：縄船猛治氏、四宮幹人氏（株式会社 JTB 西日本）

日 時：2015年11月6日（金）、13日（金）、20日（金）の14：40～16：10

場 所：関西大学千里山キャンパス第2学舎3号館D304教室

本ワークショップの詳細は、「Ⅲ 2015年度の取組の概要 3.4 社会連携部会」を参照されたい。

## 5. 出版物『レポートの書き方ガイド [発展篇]』の作成と活用

2015年度、新たに『レポートの書き方ガイド [発展篇]』を作成し、発行した。2012年度に初版を発行し、2014年度に改訂版を発行した『レポートの書き方ガイド [基礎篇]』、2013年度に発行した『レポートの書き方ガイド [入門篇]』と同様、A5判で40頁程度のハンディなものとした。基礎篇の内容をさらに発展させるとともに、これまでのラボでの支援を通して学生やTAからのニーズが高かった、文献の要約の仕方、発表資料の作成ポイント、レポートでよく使う表現などを教材としてまとめた。また、サンプルレポートと2014年度に作成した「レポートの書き方チェックシート」を載せた。同冊子は、ラボでの活用のみならず、初年次生を対象とする授業でも配布、活用された。



図11 レポートの書き方ガイド[発展篇]の表紙

## 6. 広報活動

これまでに引き続き、ラボの認知度の向上や利用者数の増加を図るために、以下の広報活動を行った。

### (1) リーフレットの作成と活用

リーフレットには、学生を対象として、ラボの利用方法、予約の方法などが掲載されている。2015年4月には、各学部の入学時オリエンテーションなどを利用して、千里山キャンパス、高槻キャンパスの入学者全員にリーフレットを配布した。また、ラボ利用ガイダンス時に配布したり、各学舎で置き配布したりするなどの方法により、学生や教員が手に取りやすいようにした。

### (2) ポスターの掲示

ラボの概要を記したポスターを作成し、大学内に掲示した。具体的には、千里山キャンパスの各学舎に加え、図書館事務室、キャリアセンター、スポーツ振興グループなど、他部署の協力により学内の随所にポスターを掲示した。また、ラボのポスターだけではなく、ワンポイント講座やステークホルダーとの連携講演会、「考動力」作文コンテスト（詳細は後述する）などのイベントのポスターも併せて掲示した。

### (3) 教員への書面配布

ラボの基本的な方針と活用例を紹介する書面を作成し、関西大学の教員に配布した。この書面は、教員から学生へラボの利用を推奨することに加えて、ラボ利用ガイダンスを授業に取り入れることを勧める内容であった。

### (4) 学生対象のラボ利用ガイダンスの実施

ラボの利用ガイダンスは、これまで授業担当教員から依頼があったときに授業単位で実施してきたが、2015年度は、広く公開した形でのラボ利用ガイダンスを試みた。千里山キャンパスでは、10月23日（金）に図書館のラーニング・コモンズで、2つの授業の受講者が合同で参加する形で実施した。参加者は36名であった。高槻キャンパスでは、5月20日（水）にラボTAが担当して実施し、参加者は7名であった。

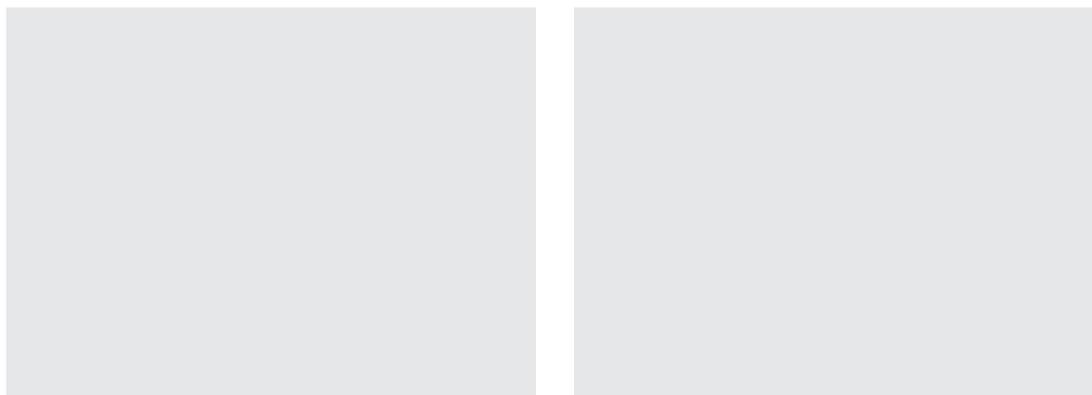


図 12 ラボ利用ガイダンスの様子（左：千里山キャンパス、右：高槻キャンパス）

### (5) 教員対象のラボ利用ガイダンスの実施

学部執行部や教授会で、FD活動を兼ねて、授業担当教員を対象にラボの概要や授業連携の仕方などを説明する機会を設けた。

### (6) 「関西大学ライティングラボ」ウェブサイト (URL <http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/>) の更新

2013年度に開設した同サイトでは、ラボ主催のイベントの情報発信、ラボの利用案内、よくある質問、ラボのウェブ予約の仕方、利用者の声などを掲載している。2016年1月にウェブサイトの改修を行い、ラボにかんする情報発信の場とすることを目的として「ラボの成果の発信」を設けた。

## 7. 高大連携事業：「考動力」作文コンテスト

2013年度より継続して、ステークホルダーである伊丹市教育委員会後援のもと、作文コンテストを実施した。本コンテストの目的は、文章を書くことを通じて考える力を培い、身につけたそれらの力を発信する場を提供することであった。これまでと同様に、大学生の部と高校生の部を設け、それぞれ小論文部門、ショートショート部門で募集を行った。

2015年度の高校生の部では、これまでの伊丹市立伊丹高等学校および関西大学併設校（3校）の生徒に加え、応募資格者を一般の高校生にも拡大するため、関西大学高大連携グループの協力を得て、近隣の高校へポスターを送付した。また、ラボのウェブサイトを通して募集を行った。その結果、10月12日の応募締め切りまでに、総計740編の応募があった。そのうち、関西圏の高校だけではなく茨城県や静岡県の高校など、一般の高校からは5校35編の応募があった。

大学生の部はこれまでと同様、関西大学の学部生のみを応募資格者とした。1月12日の応募締め切りまでに、125編の応募があった。

審査は、中澤務・取組責任者を審査委員長に、関西大学教育開発支援センターにかかわる教員・研究員8名、事務職員3名、ラボTA24名の計36名で行った。



図13 平成27年度「考動力」作文コンテスト（高校生部）ポスター

## 8. SF生対象文書作成能力向上講習会

2014年度に引き続き、関西大学スポーツ振興グループからの依頼を受け、SF生対象文書作成能力向上講習会を担当した。SF生とは、スポーツ推薦により関西大学に入学した学生のことであり、同グループでは彼らの修学上のサポートも行っている。本講習会は、SF生が大学生に必要とされる基礎的な文書作成能力を身に付けることが目的であり、体育会学生の学習支援策の一環である。

本講習会では、座学中心ではなく、グループワークや実践を多く取り入れて、レポートの書き方を体験できるように配慮した。対象者はスポーツ推薦入試により入学した1年生117名であった。各回の詳細は下記の表22、23のとおりである。

表22 SF生対象文書作成能力向上講習会の日程とタイトル（春学期）

回	日付			講座タイトル
	グループ1担当：毛利	グループ2担当：小林	グループ3担当：西浦	
1	6月16日(火)	6月17日(水)	6月18日(木)	レポートを書くための準備運動
2	6月23日(火)	6月24日(水)	6月25日(木)	レポートを書くための情報検索
3	6月30日(火)	7月1日(水)	7月2日(木)	レポートの書き方

表23 SF生対象文書作成能力向上講習会の日程とタイトル（秋学期）

回	日付	担当者	講座タイトル
1	11月27日(金)	西浦真喜子	作文コンテスト入賞への道
2	12月4日(金)	小林至道	SF生 vs 作文コンテスト
3	12月11日(金)	毛利美穂	作文コンテスト攻略編

## 9. コラボレーションコモンズ内ライティングエリアの活用：Learning Caféの実施

2013年度に開設されたコラボレーションコモンズ内のライティングエリアにて、Learning Caféと題したワークショップを開催した。各回のテーマは、大学生活で必要となる基礎的なスタディスキルを取り上げた。コラボレーションコモンズに最も学生が集まりやすい時間帯を考慮し、開講時間は14:45から15:55までとした。なお第6回はITセンター・サテライトステーションにて、第7回は総合図書館ラーニング・コモンズ内ワークショップ・エリアにて実施した。

ファシリテーターは山本敏幸（教育推進部教授）、岩崎千晶（教育推進部准教授）、佐々木知彦（教育開発支援センター研究員）の他、学生ラーニングアシスタント（以下、LAと表記）数名が務めた。春学期に9回、秋学期は12月までに7回開講し、受講者総数はそれぞれ53名、41名であった。各回の詳細などは下記の表24、25のとおりである。

表 24 Learning Caféの日程とタイトル（春学期）

回	日付	担当者	講座タイトル
1	5月13日(水)	佐々木知彦	文章を速く読むコツ!
2	5月20日(水)		クリティカル・リーディング入門
3	5月27日(水)	山本敏幸	情報整理術!可視化編
4	6月3日(水)		情報整理術!管理編
5	6月10日(水)	学生LA	要点をつかむ
6	6月17日(水)		みんなを巻き込め!グループワークのテクニック
7	6月24日(水)		“PREP”でプレゼンは伝わる
8	7月1日(水)	岩崎千晶	相手に自分の意図を分かりやすく伝えるコツ!
9	7月8日(水)		考え方を整理してみよう!

表 24 Learning Caféの日程とタイトル（秋学期）

回	日付	担当者	講座タイトル
1	10月14日(水)	佐々木知彦	読書と自分との関係を考える①速く読む
2	10月21日(水)		読書と自分との関係を考える②クリティカルに読む
3	10月28日(水)		読書と自分との関係を考える③精読する～感想を書く
4	11月11日(水)	学生LA	要点をつかむVol.2
5	11月18日(水)		“PREP”でプレゼンをもっと伝わる!
6	11月19日(木)		道徳の教科化について考えよう!
7	11月25日(水)		グループワークの役割
8	12月9日(水)	岩崎千晶	「コモンズのプロジェクター一体型ホワイトボード(電子黒板機能付き)を使って伝わるプレゼンテーション&授業をしよう! Part1」
9	12月10日(木)	学生LA	カウンセリングマインドを体験してみよう!

## 10. 視察対応

---

### (1) ラボへの視察対応

2015年度、ラボの視察に来た機関は下記のとおりである。

#### ①名桜大学

訪問日：2015年6月9日（火）  
訪問者：名桜大学教員2名  
対応者：毛利美穂、小林至道  
内 容：ライティングラボの概要説明、資料配布、施設見学

#### ②青山学院大学

訪問日：2015年6月19日（金）  
訪問者：青山学院大学教員3名、職員2名  
対応者：小林至道、宮田将  
内 容：ライティングラボの概要説明、資料配布、施設見学

#### ③ベトナム・ハノイ大学

訪問日：2015年12月2日（水）  
訪問者：ベトナム・ハノイ大学教員・研究員4名  
対応者：西浦真喜子、齋藤鮎子（ラボTA）  
内 容：ライティングラボの概要説明、資料配布、質疑応答、ライティング・エリアの見学

#### ④龍谷大学

訪問日：2015年12月9日（水）  
訪問者：龍谷大学教員1名、職員2名  
対応者：小林至道、宮田将  
内 容：ライティングラボの概要説明、資料配布、施設見学

#### ⑤東北大学

訪問日：2016年2月10日（水）  
訪問者：東北大学教員1名、職員1名  
対応者：小林至道、仁村万喜子  
内 容：ライティングラボの概要説明、資料配布、施設見学

### (2) コモンズへの視察対応

今年度、コラボレーションコモンズに視察に来た機関は下記のとおりである。

#### ①学研

訪問日：平成27年7月28日（火）  
訪問者：職員1名  
内 容：図書館ラーニング・コモンズとコラボレーションコモンズを見学。

## ②同志社女子大学

訪問日：平成 27 年 9 月 10 日（木）

訪問者：教員 1 名、職員 3 名

内 容：図書館ラーニング・コモンズとコラボレーションコモンズを見学。

今後建設を予定されており、現状と問題点について情報交換を行った。

## ③金沢大学

訪問日：平成 27 年 11 月 19 日（木）

訪問者：教員 3 名

内 容：図書館ラーニング・コモンズとコラボレーションコモンズを見学。

それぞれの大学の現状と問題点について情報交換を行った。

## ④早稲田大学

訪問日：平成 27 年 12 月 14 日（月）

訪問者：職員 8 名

内 容：施設見学と利用状況や問題点などについて情報交換を行った。

## 11. 次年度に向けて

---

次年度に向けてのラボの課題として、取組成果の学外への発信と学内の新たな部署との連携の強化が考えられる。

まず、本取組の最終年度を迎えるにあたり、ラボにおけるライティング支援の有効性を検証することが挙げられる。具体的には、レポートの相談では、学生がどのような点でつまずき、どのような支援を必要としているのか、それに対してラボがどう支援することが有効かなどを分析し、取組の成果として発信していく必要がある。その手段として、関連学会での発表、出版物の作成、ウェブサイト新たに設けた「ラボの成果の発信」における掲載などを予定している。

次に学内の他部署との連携については、新たに総合図書館と連携したイベントを企画中である。図書館がこれまで実施してきた図書館利用ガイダンスと連携する形で、ワンポイント講座やラボ利用ガイダンスを実施する予定である。これにより、これまでラボやワンポイント講座の開催を知らなかった学生に対してラボの認知度を高める機会になることが期待される。





# 津田塾大学 ライティングセンターの取組

2015年度は2014年度までの活動を継続しつつ、授業や学内各部署との連携の強化、学生の「発信力」を高める授業の工夫、ループリックの活用、そして1年生全員を対象にした「レポートの書き方」講座の実施、小冊子『レポートの書き方』の編集・発行などに取り組んだ。また、本学のライティングセンターは創設時から広い意味でのキャリア支援に力を入れてきたが、今年度は各種講演会や講座に卒業生を講師に招き、学生に多様、かつより身近なロールモデルを示すようにした。本センターの取組を以下の10項目について報告する。

1. 個別相談
2. ライティング・カフェ
3. 講演会「書くということと私」
4. 講演会「女性のリーダーシップから学ぶ」
5. 日本語ライティング講座
6. 授業科目
7. 「レポートの書き方」講座と小冊子『レポートの書き方』刊行
8. キャリア支援
9. 高大連携事業
10. 啓発・広報

## 1. 個別相談

学生との1対1の個別相談は、本センターの重要な柱である。2015年度も個別相談の実績を増やし、質をさらに充実させるための体制を整えた。また、英語相談のコマ数を増やすため、英語母語話者の講師をさらに1名採用した。相談件数は日本語、英語を合わせて1月末現在で688件に上った。昨年同期と比べて115件増となった。

### (1) スタッフ

日本語の文章の相談は、特任教員2名とチューター3名（国際関係研究所員、国際関係学研究科後期博士課程在籍者、文学研究科後期博士課程在籍者）の5名で週5日、英語文章は英語母語話者の講師2名が週2日担当した。日本語のチューター1名は2014年12月に採用、今年度から独り立ちし、シフトに入った。事務局の体制は変わらず、職員（派遣職員）1名、専任職員（兼任）1名、特任職員（兼任）1名である。

### (2) 開室期間・時間

日本語の相談は、2013年度から変わらず、週5日、午前9時40分から午後4時15分まで、1回45分のコマを1日8コマ受け付けている。ただし、一人のチューターが連続して4コマ担当することにならないよう、事務局で調整する。チューターが担当するアカデミック・ライティングの相談と、特任教員が担当する就職関連の相談が同じコマに予約された場合は、相談室以外の教室、会議室などを確保し、同時に相談に応じた。

英語の個別相談は火曜日6コマ、金曜日3コマの計9コマ対応が可能となった。

### (3) 利用実績

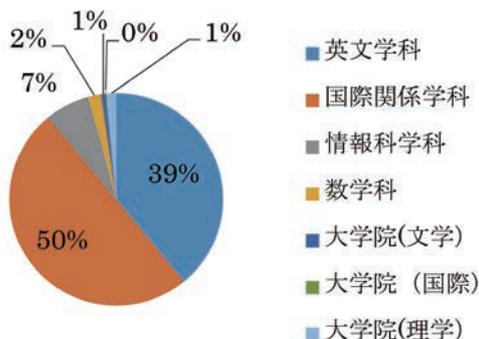
2015年度の日本語文章の相談件数は2016年1月末現在で550件、英語文章は138件であった。相談件数は毎年増え続けており、今年度も過去最高となった。月別に見ると、就職関連や、コース志望理由書、留学志望理由書などの相談者が増える5月、6月、10月が多い。また、相談は週の初めである月曜日と終わりの金曜日に増える。この傾向は他大学でも同様のようである。

繁忙期と閑散期が生じるのは、ある程度は避けられないことであろう。しかし、予約したくても予約できないという状況を極力減らし、逆に、余裕のあるときに学生を呼び込む仕掛けを考えるなどの工夫が今後必要だろう。

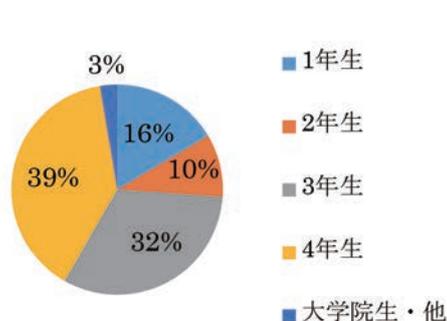
相談件数の推移（件数） \* 2015年度は1月相談分まで



学科別利用実績 (%)



学年別利用実績 (%)



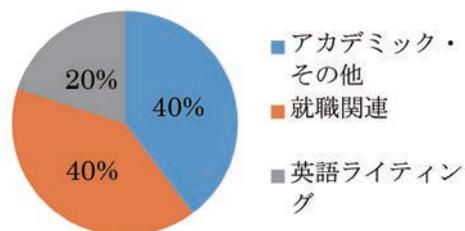
#### (4) 相談内容

2016年1月末現在の日本語の相談件数550件のうち、就職関連は277件、アカデミックな文章や留学・コース志望理由書などの相談は273件であった。

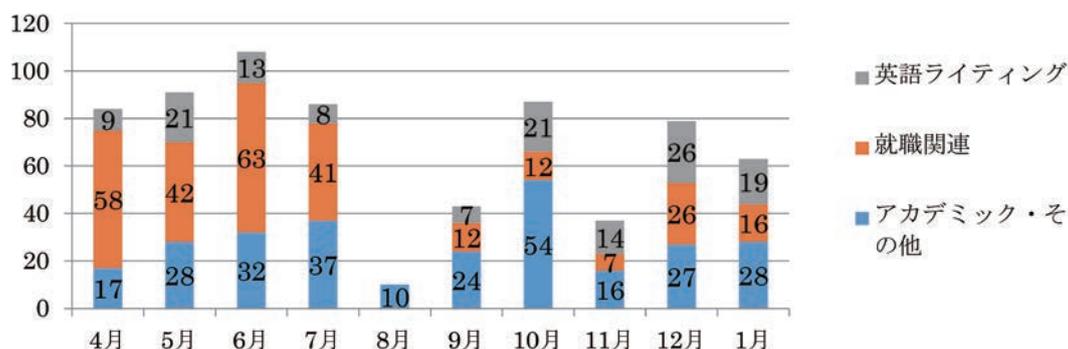
今年度は就職活動の時期が後ろ倒しとなった影響で、例年2月に集中した就職関連の相談が3月以降になり、またインターンシップと就職活動のエントリーシートの相談が重なることもあった。

一方、英語ライティングの相談138件では、留学関係の書類に関するものが多かった。

種別相談実績 (%)



種別月別相談実績 (件数)



#### (5) アドバイスの効果・評価

個別相談を利用した学生には、毎回アンケートを実施しており、1月末現在での回答者数はのべ390人である。チューター、教員の対応に「とても満足」が87.9%、「満足」が11.6%、「やや不満」が0.5%（2名）であった。「やや不満」の理由として1名は「前は『ここがわかりづらい』『何を伝えたいのか、はっきりしない』など、はっきり言っていたが、今回は『よく書けていると思います』『でも、どうだろう……』みたいなのが多かった」と書いている。また、もう1名は「アドバイスが不明瞭なところがあり、発言に責任を持ってくれなかった。第三者目線で読んでくださったため、主観がなくなり、フレッシュな意見を聞くことができなかった」という点に不満が残ったようであった。

「添削をしない」というセンターの方針上、学生が期待するようなダイレクトな「答え」を与えられない、と

いうのは当然のことであろう。センターの役割、できることとできないことなどを、セッションの初めに学生に十分説明する必要性を再確認した。

一方で、学生が「満足する」セッションとはどういうものであるか、という点は今後、研究に値するだろう。1対1の話し合いのなかで、問題点が次々と浮かび上がるセッションがある。何が足りないのか、何ができていないのか、という事実を突き付けられ、確認した学生は、得てして「とても満足」ではなく「満足」に丸をつける。「気づきを与えることができた」と評価する教員・チューターの満足感とのギャップが生じるセッションがいくつかあった。満足度に関しては、今後も検討・考察を続けたい。

なお、関西大学と共に、ライティングセンターを利用した学生向けのループリックを現在開発中である。センターを利用することで学生にどのように成長してほしいのか、どのような力をつけてほしいのか、学生が自身を振り返り、今後の学修の促進につなげられるようなループリックにする予定である。

## (6) チューターの研修

毎月1回、45分間のチューター勉強会を開催し、相談での対応法や難しい事例について情報を共有している。今年度は、昨年度作成した「レポートの書き方の基本」および「レポートを書く前のチェックポイント」のハンドアウトをもとに、小冊子『レポートの書き方』を製作した。ライティングセンター教員が中心となって執筆したが、内容に関してはチューター勉強会でも話し合った。また、学生へのアドバイスという視点でのコラムをチューターにも執筆してもらった。

チューター勉強会の開催日時と各回のおもな議題は次のとおり。

日 時	議 題
4月17日(金)	・今年度の体制と活動計画 ・『レポートの書き方』に載せる「よくある質問」と、それに対する答えを検討
5月8日(金)	・メディア・ワークショップのペアインタビュー原稿の相談にどう対応すべきか、授業で配った「チェックリスト」をもとに検討 ・ライティング・カフェの時期や内容を検討
6月12日(金)	・事例研究(留学の志望理由書、複数で来室した場合の対応)
7月10日(金)	・第1回ライティング・カフェの実施報告。実施タイミングについて ・事例研究(長い文章の相談の応じ方)
10月28日(水)	・多文化・国際協力コースの志望理由書相談への対応 ・『レポートの書き方』小冊子「よくある質問」の原稿、コラムの内容、分担 ・事例研究(フィールドワーク)
10月28日(水)	関西大学とのTA合同研修 志望理由書の相談
11月18日(水)	・小冊子の内容の確認 ・TECシステム テストについて ・事例研究(書評レポートの書き方)
12月16日(水)	・事例研究(要約の仕方が分からない、という学生への対応) ・新しい予約システムに関する研修
1月20日(水)	・新チューターの紹介 ・事例研究(アウトラインの作り方をどうアドバイスするか)

## 2. ライティング・カフェ

---

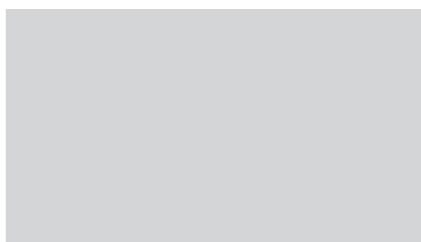
ライティングセンターの個別相談には、ウェブサイトからの予約が必要である。予約を面倒と感じたり、利用を躊躇していたりする学生のために、昼休みを活用してもっと気軽に立ち寄れる機会をつくろうと始めたのがライティング・カフェである。2013年度から実施している。

2015年度は日本語、英語、それぞれのカフェを実施した。

### (1) 「レポートの書き方」カフェ

6月22日から7月3日までの2週間、昼休みの12時10分から12時55分まで、ライティングセンターの事務室内で実施した。過去には、フラットと立ち寄るカフェ形式と、その日の担当チューターが講義をおこなうミニ講座形式と2パターン実施した。今回は「レポートの書き方」というテーマを掲げつつ、前者のパターンでおこない、「レポートに関して困っていること、聞きたいことがあったら気軽に来てください」と呼びかけた。

参加者数はのべ27名。カフェを実施する前にセンター特任教員が1年生全員を対象に「レポートの書き方講座」を実施していたため、さらに質問がある学生や、まだ不安に思う学生が多数来室した。



### (2) 英語ライティング・カフェ

2014年度に初めて実施し、好評だった英語のライティング・カフェを今年度も実施した。毎年10月に入ると、英語の留学志望理由書の相談が増え、個別相談の予約が取りにくい状況になる。そこで、「留学志望理由書」をテーマにしたカフェを10月13日と16日、計4コマ実施した。留学を担当している「国際センター」とも相談・連携して、日程を決めた。

しかし、参加者は予想を大きく下回り、3名に留まった。協定校留学には学内の選考がある。応募したり、落ちたりしたことを人に知られたくないので、カフェ形式よりも1対1の相談を望むのではないかと推察する。

ライティング・カフェは日本語、英語とも、実施のタイミングが非常に難しいことを実感した。

なお、英語のライティング・カフェは来年度以降、定期的に開設し、そこに行けばいつでも英語で話し、相談できる空間をつくることを検討している。

## 3. 講演会「書くということと私」

---

さまざまな分野で「書く」ことに関わる仕事をしている講師を招き、職業観や、書く喜び、苦勞などを聞く講演会である。2008年度からシリーズで開催しており、今年度で24回を数えた。大学での学びや「書く」ことが社会とどうつながるのか、具体的なイメージを学生に示すキャリア教育の一環でもある。

今年度の講師2名は本学の卒業生から選び、学生がより身近に感じられるロールモデルを提示した。また、講演会は関西大学にもテレビ中継した。

### (1) 「書くことにおける自力と他力」

6月9日（水）開催。参加者は津田塾大学60名、関西大学10名。

講師は、本学国際関係学科卒で詩人の小池昌代氏。詩や小説のほか、エッセイ、書評、映画評など、さまざまなジャンルの文章を書いてきた。しかし、たとえ自分が書くものであっても、そこには必ず他者の力や、他者との関わりがあること、書く人間にも読む人間にも想像力が必要であり、だからこそ読み方には幅があり、おもしろ

ろいのだと、具体例を示しながら語った。

自身の詩も2編朗読した。参加者は小池氏の声に耳を澄ませながら、言葉と同じくらい、沈黙もまた重要であることを体感し、言葉が立ち上がってくるような瞬間を共有した。言葉や文章と真剣に向き合う人の、静かな情熱が伝わる90分間であった。

#### 感想抜粋

- ・詩を交えた講演はひきこまれるようで、終わったときはちょっと夢から覚めた気分でした。私も何か書きたくなってきました。
- ・「どこにでも見つけようと思えば、どんなに回り道をしてでも詩は見つかる」という言葉が非常に印象に残りました。

## (2) 「博士号をとって、銀座でバーをはじめました」

11月11日（水）開催。参加者は津田塾大学52名、関西大学7名。

講師は、小関孝子氏。本学国際関係学科卒業後、会社員、劇団員、マーケティングやコンサルタントなどの仕事などをへて、36歳で立教大学大学院へ。社会デザイン学の博士号を取得する一方、銀座の一等地で「アカデミックバー」も経営するユニークな経歴の持ち主である。

小関氏は2015年、博士論文をもとに本を出版した。その体験から、論文執筆のポイントを話した。「参考文献を50冊リストアップする」「大筋に関係ない情報は、削除ではなく『注』へ」「まとめる段階では著者目線から編集者目線へ」など、どれも学部生のレポートやゼミ論などにもすぐに役立つような、具体的でわかりやすいアドバイスであった。

「私にとって、書くということは残すことであり、未来に伝えること。100年後の人々を読者に想定している」という小関氏の言葉から、書くことに向き合う真摯な姿勢が伝わった。

#### 感想抜粋

- ・論文に対する見方ががらりと変わりました。何か論文を読んでみようと思いました。
- ・津田塾生（真面目）というイメージを一掃するようなパワフルな先輩のお話がきけて良かったです。

## 4. 講演会「女性のリーダーシップから学ぶ」

女性が社会でリーダーシップを発揮するには何が必要か——。学生に多様なロールモデルを示し、キャリアや生き方を考えるきっかけにするための講演会である。今年度は、本学の卒業生で、Webメディアの世界で活躍している三代川律子氏と、2015年度津田梅子賞を受賞した浅川智恵子氏（IBMフェロー）を講師に招いて実施した。その分野を切り拓いてきたパイオニアならではの話は刺激的で、まさに女子学生のエンパワーメントにつながるものとなった。なお、浅川氏の講演会はインクルーシブ教育支援室と共催でおこない、視覚障がいのある本学の学生も参加した。

### (1) 「編集は一生の仕事—そして「つぶし」がききます」

5月20日（水）開催。参加者は津田塾大学73名、関西大学16名。

講師は、本学国際関係学科卒の三代川律子氏。コピーライターや雑誌の編集者などを経て、現在はWebメディアのJ-Castニュースを運営する株式会社ジェイ・キャストで執行役員を務める。

「紙であろうが、ネットであろうが、企画を考え、コンテンツをつくる編集の仕事は永遠に続く」と三代川氏は言う。編集者にとって大事なのは「好奇心・想像力・企画力」だと指摘し、さらに「おしゃべりな人、広く浅くなんでも知っている人、あいさつがきちんとでき、気持ちよく仕事ができる人」など、自身の経験からみた編集者の適性を分析した。

学生時代をどのように過ごすべきか、という会場からの質問には「大学時代に好きなことを深めること。学校の勉強は大事だが、世界の情勢にも目を向け、好きなこと、得意なこと、何か一つ専門にできることをつくること」とアドバイスした。

### 感想抜粋

- ・編集者になる一番適性のある人は「おしゃべりな人」というのが驚きました。話題が豊富で知識と教養による裏付けがあることが大切だということが印象に残りました。
- ・メディアスタディーズコースでペアインタビューをやっていて、編集のお仕事の難しさを体感しているの、この講演会はとてもためになりました。

## (2) 「あきらめなければ、道は拓ける」

12月4日（金）開催。参加者は津田塾大学89名、関西大学22名。

講師の浅川智恵子氏は、中学時代にプールの怪我がもとで失明したが、陸上、スケート、スキーと何にでも挑戦するスポーツウーマン。猛勉強の末、日本IBMに入社し、同社の技術職では最高位であるIBMフェローに、日本人女性として初めて任命された。

視覚障がい者向けインターネット専用音声ブラウザ「ホームページ・リーダー」の開発を手がけ、世界中の視覚障がい者の情報アクセス手段を格段に向上させてきた功績をもつ。現在は、情報アクセシビリティから実世界のアクセシビリティへ可能性を広げようと、米国カーネギーメロン大学で「考えるコンピュータ」の開発に取り組んでいる。それは視覚障がい者だけでなく、高齢者や車いすの人など、あらゆる人の社会参加を促し、人々のつながりや生きがいをもたらし技術であるという。

「私は女性であり、障がい者であり、アメリカではアジア系でもある。しかし、私は自分の経験やダイバーシティーをアドバンテージに変えてきた」と浅川氏は言う。「異なる視点がイノベーションを生み出すのは間違いない。みなさんも女性であるという視点をアドバンテージに変えてほしい」と学生たちにエールを送った。

講演の途中、音声を通常の2.8倍の速度にしたテープが流された。何を言っているのか、さっぱりわからない。しかし、視覚障がいを持つ人なら、この速度でも聞きとれるという。「みなさんは視覚に頼りすぎていて、触覚とか聴覚が磨かれていない」と浅川氏は指摘した。

「あきらめなければ、道は拓ける」のタイトル通り、夢を実現するために前向きに、ひたむきに努力してきた道のりを、時にユーモアを交えながら語る浅川さんの話で会場は引きこまれた。

### 感想抜粋

- ・障害を持っていながらも健常者と変わらず、またそれ以上に世界中に影響を与えるようなキャリアを積まれている姿を尊敬します。また、家庭と仕事を両立しており、女性として素晴らしく、憧れました。
- ・誰かの生きがいを技術によってサポートしたいという姿勢を見習い、私も自分ができることで誰かをサポートしていきたいと感じました。

## 5. 日本語ライティング講座

「書く」ことに関わる仕事をしている職業人を講師に、実践的なライティング力を磨く「日本語ライティング講座」は、授業が終わった後の午後6時から7時半まで開く全4回の講座である。受講生は20名以下の少人数とし、ライティングだけではなく、キャリア教育の一環としても定着している。

2015年度は前期に2回、後期に1回実施した。前期の講師は二人とも本学の卒業生である。また、どの講座も「発信力」を意識した内容となった。

### (1) 「ココロに響く！ 『書き方』入門」

6月16日から7月7日までの火曜日、全4回実施した。参加者は19名。講師は本学国際関係学科の卒業生で「日経ウーマンオンライン キャリア&スキル」編集長の常陸佐佳氏。新聞記者出身で、いまは人気Webサイトの編集長を務めている常陸氏は、読者に支持される魅力的な記事とはどのようなものか、その企画から書き方まで、さまざまなポイントを講義した。

その後、参加者によるグループワークもあった。それぞれのグループで、本学の公式ウェブマガジンである「プラム・ガーデン」に記事を書くとしたらどのような企画がよいか、アイデアを出し合った。同じようなテーマでも、切り口によって全く別の記事になる。グループで考え抜くことで、さまざまな可能性が広がることを、参加者たちは実感した。

小学生の子どもをもちながら、編集長という重責を担う常陸氏からは、出産・育児とキャリアをどう両立させるか、といった体験談やアドバイスもあった。学生たちにとっては「こうありたい自分」や将来のキャリアについても考える貴重な時間となった。

#### 感想抜粋

・「書き方」にとどまらず、働くということ、生きていくということについて考えるきっかけを作っていただきました。常陸さんは「私もこういう女性になりたい」と思うロールモデルになりました。

### (2) 「映像翻訳入門—セリフを楽しく訳してみよう！」

6月19日から7月10日までの金曜日、全4回実施した。参加者は20名。講師は本学国際関係学科卒業生で、映像翻訳家の瀬谷玲子氏。翻訳や映画に興味をもつ学生が集まった。

瀬谷氏はまず、字幕と吹き替えの違いを説明した。限られた文字数の中でセリフを取めなくてはならない字幕と違い、吹き替えは役者の口の動きに合わせて、「演技する」要素も考慮しなくてはならないという。また、「音」になっているものは、背景のテレビの音や駅のアナウンスまですべて訳さなくてはならない、という点が字幕と大きく異なるそうだ。

参加者は家であらかじめ課題の映画を見て、吹き替えの音を教室で実際に映像に重ねる演習もおこなった。わずか1分余りの映像だが、状況や時間にぴったり合ったセリフを重ねるのは至難の業だった。1本の映画の吹き替えをおこなう作業にどれほどの根気や語学力、ユーモアのセンスが必要か。学生たちは「憧れ」だけでは通用しない、プロの仕事の厳しさの一端も垣間見たようであった。

#### 感想抜粋

・留学経験がなかったため英語力がないと感じていましたが、映像翻訳の世界は、日本語力が試されることを実

感じ、興味がわきました。

### (3) 「隣のオジサンに伝わる文章を」

前期の講座の講師は、二人とも本学の卒業生であった。身近なロールモデルとして学生に接してくれたが、後期は朝日新聞記者でフェリス女子大の非常勤講師も務める牧村健一郎氏を講師に迎えた。タイトルの通り、「たまたま電車の隣に座ったオジサンに読んでもらっても、きちんと伝わる文章を書く」コツを学ぶ講座であった。11月20日から12月11日までの金曜日、全4回実施した。参加者は18名。

文章を書く際には①論理性（構成力）②具体性（細部）③訴求力（言いたいこと）④表現力（文章力）が大事である、と牧村氏は説く。参加者は800字の作文を40分ほどで書き上げる実習のほか、互いに読み合い批評し合うピア・ワークも体験した。また「表現力を磨くには、今まで使ったことがない言葉を、ちょっと背伸びして使ってみることも大事」といった牧村氏のアドバイスを受けながら、原稿を練り上げた。

#### 感想抜粋

- ・現役の「もの書き」である先生のご指導は的確でわかりやすかったです。
- ・他の学生さんの文章を読んだり聞いたりし、文章の上手さや考えていることの深さに刺激をもらいました。

## 6. 授業科目

正課科目だけでなく、今年度もメディアスタディーズ・コースとの連携授業を実施した。正課科目では「発信力」を重視し、学生に新聞投稿にも挑戦させるなどして成果を挙げることができた。

### (1) 正課科目

共通科目として、前期に「日本語ライティング Aa・Ab・Ac」、後期に「日本語ライティング Ba・Bb・Bc」を開講した。いずれも週に2時間、2単位、定員20名の少人数クラスである。

科目名	履修者数前期・後期
日本語ライティングAa・Ba	15・18(名)
日本語ライティングAb・Bb	19・20(名)
日本語ライティングAc・Bc	20・12(名)

#### ①日本語ライティング Aa・Ba

さまざまなテーマで2週間に1回、500～800字の作文を書き、それをクラス全員で読み、批評し合う。アカデミックな文章ではなく、自身の思いや体験を書く「パーソナル・ライティング」のクラスである。今年度はクラスを4～5人のグループに分け、グループ内で文章の改善策を考えたり、ディスカッションしたりする時間を増やした。受講者は1年生から4年生まで、後期のクラスには社会人学生もいた。多様な学生たちの集まりのおかげで、毎回活発な意見交換が見られ、アクティブな学びの場となった。

後述する「新聞読み方講座」の次の週には、新聞の投書欄を意識した意見文を書かせ、実際に投稿させた。その結果、前期に1名、後期には3名、採用され、新聞に掲載された。自分の意見が広く発信されたことで、学生

たちは書くことの意義や影響力、責任を実感したようである。また、クラスの他の学生たちの良い刺激にもなった。

### ②日本語ライティング Ab・Bb

プロセスを重視したレポートの書き方を学ぶクラス。テーマや問いの設定から、資料検索、アウトライン作成、ノート・テイキング、形式の理解というレポートを書くプロセスに沿って授業を進めた。受講者は1, 2年生で、半数以上がこれまでにレポートの書き方を習ったことがなかった。

授業では、ペアやグループでのワークを取り入れ、各自のアイデアや書いたものについて話し合う時間を設けた。互いにコメントし合うことで、自分自身の考えを深めたり、新たな気づきにつながったりする様子がみられた。

受講者は、この授業で学んだプロセスに沿って、各自の選んだテーマで、期末レポートを作成した。授業終了後のアンケートでは、アウトライン作成やノート・テイキングについて学んだことが、レポートを書く際に役立ったという回答が多く得られた。

### ③日本語ライティング Ac・Bc

「心を込めて日本語を書く」ことを究極目的としたクラスである。レポートであれ、奨学金の応募書類であれ、就職用のエントリーシートであったとしても、読む相手を見すえ、心を込めて書いていくことが何より大切であることを、繰り返し教えている。

今年度は少人数の利点を生かし、書くことはもちろん、人前で話す（発表する）ことにも力を入れた。書くよりも話したほうが自分の考えを発信できる学生が少なくない。話せたことを、書くことにもつなげていけるよう、指導している。

## (2) カリキュラムとの連動

### ①メディアワークショップとの連携

「電子書籍をつくる」という課題に取り組むメディアスタディーズ・コースの3年生必修授業と連携し、元新聞記者であるライティングセンター特任教員が講義を行った。昨年度から2回に分けた講座にし、まず4月22日に「記事の書き方1. インタビュー編」を、6月3日に「記事の書き方2. 執筆編」を実施した。受講者は34名。

授業の担当教員と話し合い、今年度は初めての試みとして、「インタビュー」「書き方」それぞれのチェックリストを作成し、受講者に配った。

チェックリストは「1つずつ確認しながら準備できてよかった」と、学生に好評だった。また「話が飛び過ぎないように意識できた」「大きな流れを想像しつつ質問を考えられたので、行き当たりばったりにならなかった」「原稿を書く際に軸ができ、まとめやすかった」など、インタビューや執筆の際に役立ててもらえたようである。

例年、原稿の誤字・脱字が多かった。チェックリストで「原稿は必ずプリントアウトし、誤字・脱字を確認する」という項目を入れたところ「パソコン上では見落としていたミスがたくさん見つかった」「プリントアウトしてミスが大量に見つかった」という学生が多かった。このチェックが功を奏し、今年度の原稿では誤字・脱字が大幅に減ったようである。

また、今年度も記事を書く際には必ずライティングセンターの個別相談を利用するよう指導教員から指示されていたため、個人やグループ単位で相談に訪れる学生が相次いだ。

### ②大学生のための新聞読み方講座

大学での学びや就職活動に新聞を役立ててもらおうと、5月15日と10月23日の2回、日本語ライティング Aa, Ba の授業内に、2015年度FD支援費「アメリカ研究の最前線」との共催で実施した。日本語ライティングの受講者以外の学生も含め、計69名が参加した。

講師は本学の卒業生でもある、朝日新聞東京本社の北郷美由紀記者。北郷氏は、「就職活動ではよく『私はこういう人間です。こういう問題に興味ある』』ということを伝えなくては

ならない。しかし、思ったことを説明し、伝えたいことを伝えるという訓練は日々やっていないとだめだ。日ごろから新聞を読む習慣をつけておき、視野を広げたり、考える『軸』を育てたりしておくことが大事だ」と語った。

参加者は、実際に新聞をめくりながら、「家族や友人に教えたい記事」「自分が知ってよかったと思う記事」などを選んで発表した。選ばれた記事やその理由はさまざまで、それぞれの関心や「喜怒哀楽」が反映された記事であった。

参加者からは「新聞を読みなさい、とよく言われるが、全部読んでいたら数時間かかってしまい、とても読み切れない。どう絞ったらよいか」という質問も出た。北郷氏は「全部読む必要なんてない。パラパラめくって、おもしろそう、役立ちそう、という自分の勘や気持ちを大事にして読めばよい」とアドバイスした。

### 感想抜粋

- ・新聞を読みたいと思っていたのですが、いつもどこを読めばいいのかわからず困っていました。自分に興味があることから読めばいいのだとわかりました。
- ・新聞をみんなで読みながら、気になった記事を発表しあうことが面白かったです。

## 7. 「レポートの書き方」講座と小冊子『レポートの書き方』刊行

### (1) レポートの書き方講座

教務委員会の依頼を受けて5月27日、6月10日、17日の3日間、ライティングセンター特任教員が1年生全員630名に「レポートの書き方」講座を実施した。学科で受講日を分け、参加は必修とした。レポートに取り組む前の準備から、資料やインターネットから参照、引用する場合の注意点などを90分間で講義し、講義内容をまとめた簡単な冊子も全員に配布した。

### (2) 小冊子『レポートの書き方』刊行

「レポートの書き方」講座で配布した冊子をより詳しくし、全学科の1年生から3年生に配布した。執筆や編集はライティングセンターの教員がおこない、企画運営部会の教職員も協力した。ライティングセンターのチューターもコラムの執筆などに加わった。全28ページ。

学生が手に取りやすく、長く使える冊子となるよう、内容はもちろん、装丁やレイアウトなども工夫した。ポイントだけを押さえた冊子ではあるが、ライティングがプロセスであることを強調し、執筆の準備段階から順を追って丁寧に説明した。



## 8. キャリア支援

2015年度も就職活動のサポートをおこなっている学生生活課との連携を強めた。ライティングセンター特任教員による「インターンシップのためのエントリーシート書き方講座」や、2年生向けの「今から経験しておきたい就職活動準備講座」などを学生生活課との共催で実施した。書くことを通して考えることの重要性を説き、就活のためだけの講座にならないよう工夫した。また、新聞社の見学会や、学内のポートフォリオシステムを利用したマスコミ志望者向けの勉強会などを通して、マスコミ業界志望の学生を支援し、成果を挙げることができた。

## (1) 学生生活課との連携講座

学生生活課からの依頼を受け、ライティングセンターの特任教授が全学年の学生を対象に5月22日「インターンシップのためのエントリーシート書き方講座」を実施、286名(前年は220名)が参加した。また、12月9日には、昼休みを利用して「今から経験しておきたい就職活動準備講座～インターンシップのエントリーシートを書いてみよう～」を実施した。2年生向けだったが、他学年の参加もあり、受講者は202名に上った。いずれの講座も学生の高い関心を集めた。

2講座とも、エントリーシートの書き方のテクニックを教えるのではなく、読み手や目的を意識しながら書くこと、設問の意図や、伝えなくてはならない事項をよく考えて書くことなどを説いた。マニュアル本やインターネットの情報だけを頼りにするのではなく、自分の頭でしっかり考え、自分の言葉で書く習慣をつけることは、エントリーシートだけでなく、あらゆる文章を書く際にも役立つ力になることも強調した。

### 感想抜粋

- ・自分にはアピールするポイントが全くないと思っていましたが、自分自身がどういう人間なのかを知る手がかりを教えてください、非常に役立ちました。
- ・普段から「書く」ということが重要なんだと思いました。
- ・自分が経験したこと、考えたこと、感じたことを「なぜ?」と問い続けることで気が付くことが大切だと思いました。
- ・書き方だけでなく、書くために今からできることを紹介してくださり、今後の計画や、やるべきことが考えやすかった。
- ・自分が何も考えていないことに気づいた。
- ・今やるべきことを、2年生の学年に合わせてガイダンスしてくださったのが分かりやすかった。

## (2) 朝日新聞社土曜見学会

新聞社の仕事に関心のある学生を対象に、土曜日の午後、朝日新聞社東京本社を見学する。印刷や発送の現場を見学するほか、一般の見学コースでは見ることができない編集局内や論説委員室などにも入ることができ、論説委員らと意見交換もおこなえる貴重な機会である。本学だけでなく、都内の他大学からも参加する。ライティングセンター教員が同行し、見学会後には懇談会も実施する。

2015年度は6月13日と11月7日の2回実施し、それぞれ9名、7名の参加があった。6月の回には関西大学からの参加も4名あり、このうちの1名の大学院生は他社の技術職ではあるが新聞社に内定した。

## (3) 学内ポートフォリオシステムを利用したマスコミ志望者勉強会

2014年11月、学内のポートフォリオシステム「マイ・ライティング・ポッド」を活用し、新聞社やテレビ局の記者を目指す学生有志によるコミュニティをつくった。このコミュニティには口コミで集まった英文学科、国際関係学科の3年生6名と、元新聞記者のライティングセンター教員が参加し、情報共有や作文練習などを行った。2015年度に入ってもコミュニティは続き、就職活動を支え合った。その結果、6名のうち4名が2015年8月、新聞社や通信社に内定するという大きな成果を挙げる事ができた。

## (4) 記者職内定4年生との懇談会

11月4日(水)の昼休み、新聞社や通信社の記者職に内定した4年生との懇談会を開いた。参加者16名。今年度ライティングセンターを利用した学生の中で、新聞社や通信社の記者職に内定する者が多かったことから、新たに企画した。「記者職を目指すには、どんな勉強が役立つか」「就職活動で一番大変だったことはなにか。また、それをどう乗り越えたか」など、4年生にざっくばらんに聞いてみよう、という会である。

内定者4名のうち、3名は上記(3)で紹介した勉強会の参加者であった。記者の仕事に関心のある1～3年生

が熱心に質問し、一部の学生は昼休みが終わっても残って質問していた。

## (5) 企業人による模擬面接（個人）大会

2016年2月14日、千駄ヶ谷キャンパスにて、本学総合政策学部創設準備室との共催で行った。企業や大学などに勤め、キャリアコンサルタントの資格をもつ20人が、津田塾生35名に一人15分の模擬面接を行い、一人ひとりに細かくアドバイスした。就職活動本番を目前にした実践的な面接とカウンセリングを受けることで、学生たちは自身の強みや課題などを明確にすることができた。また、仲間の面接を第三者の視点から見ることによって、さまざまな気づきも得たようであった。

## 9. 高大連携事業

### (1) 高校生エッセー・コンテスト

高校生を対象にした「第16回津田塾大学高校生エッセー・コンテスト」を実施した。募集期間は8月1日から9月7日（必着）まで。

戦後70年の節目の年であったため、旧西ドイツの大統領だったリヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカーが、1985年5月8日（ドイツの終戦記念日）にドイツ連邦議会でおこなった記念演説の一部を題材にし、ヴァイツゼッカーに宛てた手紙形式のエッセーを募集した。テーマは「未来のために 若い人たちへ～歴史に学ぶことを訴えた～ヴァイツゼッカーに手紙を書こう」。英語の場合は400words程度、日本語の場合は1200字程度で書く、という課題であった。

応募総数は237編（英語92編、日本語145編、女子207人、男子30人）。

高橋裕子・ライティングセンター長を審査委員長に、ライティングセンター運営委員、同特任教員の計3名で審査をし、最優秀賞1名、優秀賞5名、特別賞1名を選んだ。最優秀賞を受賞した生徒は10月11日の表彰式で作品を朗読した。本コンテストは「書く力」「伝える力」の大切さを高校生にアピールすることで、高大連携を推進する役割も果たした。



## 10. 啓発・広報

### (1) 本学ライティングセンターを視察に訪れた学校

#### ①中央大学

日時：2015年7月3日（金）

訪問者：中央大学理工学部事務 2名

内容：理工系のライティング指導に関する意見交換

#### ②岡山大学

日時：2015年12月1日（火）

訪問者：岡山大学附属図書館学術情報サービス課他 2名

内容：ライティング支援業務の運営面に関する情報交換

③大手前大学

日時：2016年1月26日（火）  
訪問者：大手前大学学習支援センター 1名  
内容：ライティング個別相談に関する意見交換

④大正大学

日時：2016年2月9日（火）  
訪問者：大正大学教育開発推進センター 4名  
内容：初年次を中心とするライティング指導などに関する意見交換

⑤広島大学

日時：2016年3月4日（金）  
訪問者：広島大学 9名  
内容：ライティングセンターの概要及び運営に関する情報交換

(2) 本学からの視察その他

①早稲田大学ライティング・フォーラム

日時：2015年7月20日（月）  
参加者：大原悦子  
内容：静岡大学の益川弘如准教授の講演「学習科学に基づいた学習環境と評価デザイン」

②平成27年度大学等における男女共同参画推進セミナー

日時：2015年12月3日（木）  
会場：プラザエフ（主婦会館）  
参加者：飯野朋美、大原悦子  
内容：ステークホルダーのひとつである国立女性教育会館が主催するセミナーに参加し、情報交換会で「男女共同参画の視点に立った大学のStrategy」に関する意見交換をおこなった。

# VI

## eポートフォリオシステム 開発部会の取組

1. はじめに
2. 取組項目①：ライティングセンターの予約や指導記録を活用して、利用者の増加を図る（TEC-bookの本運用）
  - 2.1. TEC-bookとは
  - 2.2. 関西大学におけるTEC-bookの本運用について
  - 2.3. 津田塾大学におけるTEC-bookの本運用について
3. 取組項目②：ポートフォリオ機能を実際に運用し、その検証と改善を実施するとともに、利用者の増加を図る（TEC-folioの開発と試験運用）
  - 3.1. TEC-folioとは
    - 3.1.1. Myスペース
    - 3.1.2. ファイル置場
    - 3.1.3. ポートフォリオ
    - 3.1.4. ルーブリック
  - 3.2. 利用シーン
    - 3.2.1. 授業での利用
    - 3.2.2. ライティング / キャリア支援施設での活動を軸とする利用
    - 3.2.3. その他の利用
4. 国際化と地域化
5. オープンソース化
6. 他組織への普及活動
7. 今後の展開

## 1. はじめに

本取組では、ライティング/キャリア支援システムを構築し、全国の大学に広げることが目標の一つとなっている。具体的には、1) ライティングセンターを中心とした支援体制、2) 評価指標の確立、3) カリキュラムとの連動、4) 社会との連動、そして5) これらを一つに結ぶコンピュータシステムとしての“eポートフォリオシステム”を開発し、国内の大学への普及を図るものである。単にeポートフォリオシステムを開発してその普及を目標とするだけでなく、1) - 4) を含むライティング/キャリア支援システムを包括して広げることが肝要である。

この取組で開発するのは、単なるeポートフォリオシステムではなく、1) - 4) を支援する機能を統合した「ライティング包括支援システム」である。今後、全国の大学へ紹介する際にはこの点を踏まえてわかりやすく説明する必要があることから、1) に相当するライティングセンター支援機能を持つシステムを「TEC-book」、2) - 4) に相当する機能を含むeポートフォリオシステムを「TEC-folio」とし、これらを合わせたコンピュータシステムの名称を「TEC-system」と改称した。TEC-bookとTEC-folioは個別のシステムとして導入することも可能であり、導入コストの低減を図っている。

取組4年目となる今年度のeポートフォリオシステム部会の活動は、TEC-bookの本運用と、前年度に仕様を策定したTEC-folioの実装である。この他、TEC-systemの国際化(i18n)および地域化(L10N)、オープンソース化に関わる作業も同時に進めてきた。

以下にeポートフォリオシステム開発部会の活動の概要を述べる。

## 2. 取組項目①：ライティングセンターの予約や指導記録を活用して、利用者の増加を図る (TEC-bookの本運用)

### 2.1. TEC-bookとは

TEC-bookは、関西大学と津田塾大学の運用をモデルに、「ライティングセンター運営に必須な機能を統合したシステム」である。たとえば、学生によるライティングセンターでの相談予約・相談履歴の蓄積、指導スタッフによるシフトの登録・指導履歴の蓄積、運営管理者による相談体制の管理、全指導履歴および利用統計による利用状況の把握などを行うことができる。利用シーンに沿った詳述については、2014年度取組報告書「V eポートフォリオシステム開発部会の取組」の72ページから76ページをご参照されたい。

関西大学では4月から、津田塾大学では機能細部のカスタマイズを経て12月から、それぞれのライティングセンターにおいてTEC-bookの本運用を開始した。

### 2.2. 関西大学におけるTEC-bookの本運用について

本節では、関西大学ライティングラボ（以下、ラボ）の事例をもとに、①利用者のヒアリングを通じたシステムの検証と改修、②利用件数の推移について述べる。

#### ①利用者のヒアリングを通じたシステムの検証と改修

ラボでは、4月の本運用以降、実際の利用者である学生、指導スタッフ、運営管理者のヒアリングを通して、システムのユーザビリティを検証し、不備が見つかった場合は、開発業者による改修を行う体制を敷いた。2016年1月末までに、インターフェイスのデザインや画面遷移にかかわる動作不良などの小さな不備に伴う改修が数点あったものの、ラボの運営に影響をもたらすような大きな不備は見つかっていない。次で述べる利用件数の顕著な増加と合わせて、順調に運用されているということが出来る。

## ②ラボ利用件数の推移

ラボは、従来の2箇所（千里山キャンパス「第1学舎1号館」と高槻キャンパス「C棟サービスステーション内」）に、千里山キャンパス「総合図書館ラーニングコモンズ内」を加えた計3箇所体制での運営展開に合わせて、2015年4月からTEC-bookの本運用を開始した。表1と2に示すとおり、TEC-book導入に伴うラボへのアクセシビリティの向上から、今年度のラボ利用件数（2015年4月20日から2016年1月29日まで）は、前年度のデータと比べて約1.5倍強と、着実に増加している。

表1 2015年度「春学期」のラボ利用件数および開室日数（前年度との比較）

キャンパス	2015年度春学期		前年度春学期	
	利用件数	開室日数	利用件数	開室日数
千里山	775	71	561	71
高槻	40	57	設置前のため利用実績なし	
合計	815		561	

表2 2015年度「秋学期」のラボ利用件数および開室日数（前年度との比較）

キャンパス	2015年度秋学期		前年度秋学期	
	利用件数	開室日数	利用件数	開室日数
千里山	453	65	250	78
高槻	74	61	43	57
合計	527		293	

## 2.3. 津田塾大学におけるTEC-bookの本運用について

津田塾大学では2015年12月からTEC-bookの本運用を開始した。以下、新システムになってからの変化を記す。

### ①個別相談の予約件数の増加

2016年1月の個別相談は63件と、昨年同月の件数（42）を大幅に上回った。新しいシステムに変わったことに関する周知が、そのままライティングセンターの周知にもつながったのかもしれないが、個別相談を利用した学生へのヒアリングでは、多くの学生が「予約方法がわかりやすく、予約しやすかった」と答えている。

### ②キャンセルの減少

相談予約の直前キャンセルは、多い時期には全体の30%を超えることもあり、ライティングセンター運営上の悩みの種であった。しかし、TEC-book導入後、1月のキャンセルは11件（2016年1月の予約総数の約15%）で、体調を崩したり、インターンシップの予定などが入ったりする1月のこの時期にしては、少ない数値と言える。

また、従来のシステムでは、連絡なしに相談に現れない無断キャンセルの学生が必ず数名おり問題となっていたが、新システムになってからはそれが全くなかった。相談の予約だけでなくキャンセルの連絡もしやすくなったこと、また後述するように、新システムでは事前に相談内容を学生が文章化して申し込むため、「とりあえず予約だけ入れておこう」という軽い態度での予約が減ったためと思われる。

### ③相談文書の選択間違いの減少

津田塾大学ライティングセンターでは「アカデミック」「就職関連」「英語」という種別によって、担当する教員・

チューターが変わってくる。留学やコースの志望理由書は「アカデミック」に入るのかどうか、選択に悩む学生がいたが、新システムではプルダウンメニューで選べるようになり、混乱や間違いが減った。

#### ④相談目的の明確化

前述したとおり、新システムでは予約の段階で学生が文章の「提出日」「進行状況」「授業科目」などをチェックし、「相談したいこと」も具体的に入力することになった。このため、何に困っているのか、何を相談したいのか、事前に文章化することで、自分のなかで課題を明確に意識して来室する学生が増えたと実感する。また、相談したい内容がより具体的に書かれていることで、対応するチューターの心理的な余裕にもつながっている。

### 3. 取組項目②：ポートフォリオ機能を実際に運用し、その検証と改善を実施するとともに、利用者の増加を図る（TEC-folioの開発と試験運用）

今年度の TEC-folio 開発は、前年度に策定された仕様に基づき、プロトタイプ設計とレビュー、そして実装とテストを行った。この間、コアチームミーティング（39回）と開発者ミーティング（16回）において、プロトタイプのレビューを繰り返し実施し、実装機能について検討作業を進めた（2016年1月末時点）。以下、TEC-folioの詳細について述べる。

#### 3.1. TEC-folio とは

学習者が学習成果物を収集し、到達目標に基づいて自己評価を実施するとともに他者（メンター）からの評価をも得、これらの活動を通して振り返りと改善を促す eポートフォリオシステムである。TEC-folio が既存の eポートフォリオシステムと異なる特徴は多々あるが、最大の特徴は、ルーブリックによる自己評価と他者評価をメンターとのコミュニケーションを通して容易に行えることにある。表3に TEC-folio の主要機能、図1に実装画面の一部を示す。

表3 TEC-folio の主要機能

機能名称		機能概要
仕様(2014年度)	実装(2015年度)	
Myスペース	Myスペース	学習活動のカテゴリとテーマ。 TEC コモンズを含むが今年度は未実装
活動記録	未実装	授業科目と学内支援組織との連携
学習成果物	ファイル置場	活動記録で生成されたコンテンツ(ファイル、文献情報)を蓄積・整理
ポートフォリオ	ポートフォリオ	「ファイル置場」に蓄積されているコンテンツを引用しながら、自己評価とともにメンターとのコミュニケーションやメンターによる評価を添えて振り返りを促す
ショーケース	未実装	ポートフォリオで評価・振り返りを行った学習成果物を発信
ルーブリック	ルーブリック	ルーブリックを閲覧・作成(インポートとエクスポート)
個人設定	個人設定	ユーザプロフィールの設定

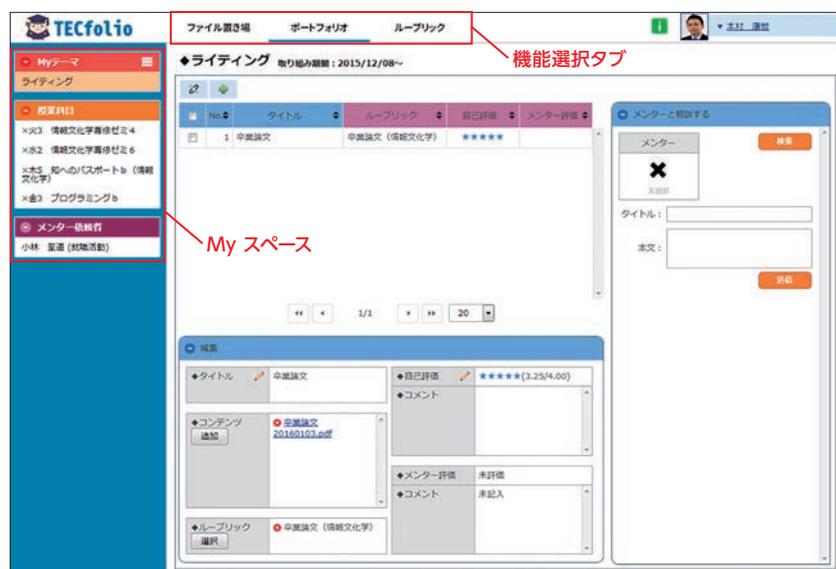


図1 TEC-folioの実装画面（ポートフォリオ作成画面）

### 3.1.1. Myスペース

ポートフォリオのテーマを設定する機能である。学習者が自由にテーマを設定できる「Myテーマ」、履修している科目がテーマとして設定される「授業科目」、ライティングセンターなどの学内施設との連携を踏まえた活動テーマ「学内施設」、メンターとなって他の学習者（メンター依頼者）の評価と助言を行う「メンター依頼者」がある。Myスペースで設定したテーマごとに、以下述べる「ファイル置場」「ポートフォリオ」「ルーブリック」の機能が利用できる。

- 「Myテーマ」: 任意のテーマの作成・名称編集・削除・隠ぺいを行うことができる。学士課程全体を通したテーマでポートフォリオを作成し、年度・semesterごとに振り返りを行うことによって、主体的な学びの態度を喚起し、学習活動の活性化を狙っている。
- 「授業科目」: TEC-folioと学事データベースとを連携させ、学生ユーザの場合は履修科目、教員ユーザの場合は担当科目がsemesterごとに表示される。授業カリキュラムとの密接な連携を図り、科目単位でポートフォリオの作成が可能となっている。
- 「学内施設」: TEC-book（対面相談支援システム）を利用するライティングセンター、キャリアセンターなどの学生支援施設での活動と連携し、施設ごとのポートフォリオの作成が可能である。
- 「メンター依頼者」: 各テーマのポートフォリオにおいて、他のユーザからメンター依頼を承諾した場合、ここに依頼者の名前がテーマとともに表示される。メンターは、教員以外に学生、事務職員、学外協力者などの幅広いユーザを設定することが可能である。これによって、教員の直接指導にとどまらず、学生同士のピア活動、学内外のステークホルダーとの交流を通して、幅広いコミュニケーションのもとに〈考え、表現し、発信する〉主体的な学びを進めることが可能である。

### 3.1.2. ファイル置場

学習者が自由にコンテンツ（ファイル、文献情報）を保存しておくことができる機能である。Amazon.comとCiNiiのAPIを利用することにより、簡便な文献情報の管理を実現している。

- 「Myテーマ」: ユーザが任意のコンテンツを配置することができる（図2）。コンテンツは後述のポートフォリオから引用される。

- 「授業科目」：履修者と教員間でファイル共有の機能を有し、教員・学生間での文献情報の共有や、資料・課題配布が行える（図3）。また、教員と履修者間でチャット形式のコミュニケーションができる機能「メンバーと相談する」が右ペインに配置される。
- 「学内施設」：学生ユーザが TEC-book で予約時に添付したファイルは、TEC-book の相談履歴以外に、TECfolio のこのテーマにも蓄積される。ライティングやキャリアを軸としたポートフォリオの形成を支援することになる。



図2 「My テーマ」のファイル置場



図3 「授業科目」のファイル置場

### 3.1.3. ポートフォリオ

前述の「ファイル置場」のコンテンツを取捨選択し、ループリックに基づく自己評価および他者評価を行うことによって、学習者が振り返りを実施する機能である（図4）。

中央ペイン上部には、コンテンツのタイトルが一覧できる。タイトルを押下すると、中央ペイン下部に編集画面が現れ、タイトルの内容を編集できる。ここでは、後述のループリック機能から引用されたループリックを用いて、学習成果物に対する評価を行う。なお、他者評価はメンターによって実施される。

また、右ペインで学習者はメンターを招へいして指導を受ける機能を備える。メンターは教員以外に事務職員、学生、学外協力者を招へいすることが可能であり、学内の局所的な学習環境だけでなく、広範なステークホルダーを巻き込みながら学習を進めることが可能となっている。また、右ペインでは、学習者とメンターとの間で、チャット形式でコミュニケーションできる機能「メンターと相談する」を有する。学生はメンターから指導を受けるだけでなく、学生自身がメンターとなって他学生を指導するピア活動も可能である。

なお、当初の設計では、作成したポートフォリオについて、公開範囲の設定とカバーレターを付与したうえで他者に発信する機能「ショーケース」を実装する予定であったが、予算減額のため今年度は割愛することとなった。

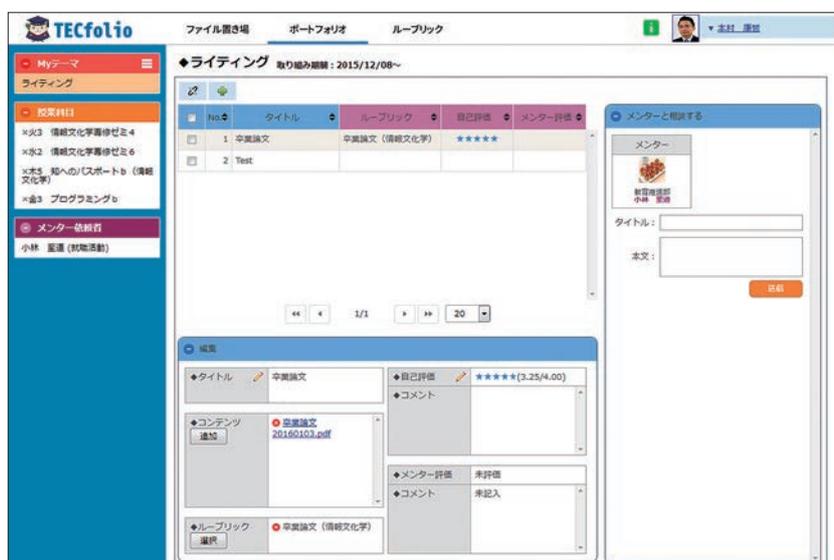


図4 ポートフォリオの作成

### 3.1.4. ルーブリック

評価指標であるルーブリックを管理する機能である（図5、図6）。TEC-folioのルーブリックファイルはExcelで作成し（図7）、インポートした後に、ポートフォリオで使用する。また、ルーブリックファイルをエクスポートして、他の学習者・指導者間で共有することが可能である。ルーブリックの初期画面にはサンプルルーブリックが用意され、ユーザはこれをもとに新たなルーブリックファイルを作成して利用することができる。

この他、ルーブリックに原著者・改変者、ライセンス条件などの属性情報を保持し、著作権管理のもとにルーブリックを共有する機能を有している。これにより組織内でのルーブリック評価の普及を狙っている。

なお、当初の設計では、ルーブリックを共有するリポジトリの役割を担う機能「TEC コモンズ」を実装する予定であったが、予算減額のため今年度は割愛することとなった。



図5 ルーブリックの一覧



図6 ルーブリックの表示

	A	B	C	D	E	F	G	
1	※緑色の部分に入力してください。							
2	タイトル	サンプルルーブリック						
3	課題文							
4								
5	※「観点」「尺度」の際は、右側に設定できます。							
6		評価→	1	2	3	4		
7	観点タイトル	尺度タイトル→	*	**	***	****		
8	教員の課題意図の理解	教員の課題意図を理解し、それに基づいた記述内容になっているか。	課題意図を理解できておらず、レポートの記述内容が課題に沿っていない。	課題意図を理解しているように見えて、レポートの記述内容が課題の要件を満たしていない箇所がある。	課題意図を理解しており、レポートの記述内容が課題の要件をおおむね満たしている。	課題意図を十分に理解しており、レポートの記述内容が課題の要件を満ち足りた形で満たしている。		
9	資料の取り扱い	資料に基づいて、その内容を適切に把握し、十分な検討を経てまとめられているか。	資料に関する記述がない。	資料に関する記述はあるが、その内容を把握できておらず、まとめられていない。	資料に基づいて、その内容が把握できており、まとめられている。	資料に基づいて、その内容が適切で、論に合ったまとめられている。		
10	自分の立場・意見	自分の立場や意見が、論理力のある説明とともに、明確に提示されているか。	自分の立場・意見が提示されていない。	自分の立場・意見は提示しているが、その論拠が十分でない。	自分の立場・意見が、論拠とともに提示されている。	自分の立場・意見が、論拠とともに提示されており、かつオリジナリティがある。		
11	全体の構成	文章全体の構成について、序論・本論・結論、P&P等の形式に沿った構成になっているかどうか。	序論・本論・結論、P&P等に沿った構成ができていない。	序論・本論・結論、P&P等に沿った記述はありつつも、形式的に欠けている部分がある。	序論・本論・結論、P&P等に沿った構成が形式的にできている。	序論・本論・結論、P&P等に沿った構成が形式的にできている。かつ内容的にも一貫している。		
12								
13	※観目タイトルに入力すると、観目が有効になります。							
14								
15	メモ	これはサンプルで作ったルーブリックです。						
16								
17	担当者							
18	改定者							
19								
20	ライセンス	すべての権利を放棄						
21								
22								

図7 Excelによるルーブリックファイルの編集

### 3.2. 利用シーン

#### 3.2.1. 授業での利用

ここでは、試験運用のひとつとして、関西大学における授業科目「文章力をみがく」の例を示す。この授業では、担当教員が学生にレポート課題を段階的に与え、その都度、TEC-folioでルーブリックに基づく振り返り（自己評価・他者評価およびコメント）を繰り返す実践を行った。以下に示すのは、学生が各自 TEC-folio の「ファイル置場」にレポートを提出後、「ポートフォリオ」で振り返りをする様子である。

- (1) 教員はレポート課題を出題（プリントで指示）
- (2) 学生は作成したレポートを TEC-folio の「ファイル置場」にアップロード
- (3) 教員は提出状況を「ファイル置場」の一覧でチェック（図8）
- (4) 学生は各自の「ポートフォリオ」でレポートを引用してポートフォリオを作成（図9）
- (5) 「ポートフォリオ」でルーブリックを使った自己評価と振り返りコメントを記入（図10）

- (6) 自己評価に対し、メンターがループリックを使った他者評価とコメントを記入 (図 11)
- (7) ループリックは、教員があらかじめ作成して用意しておく (図 12)

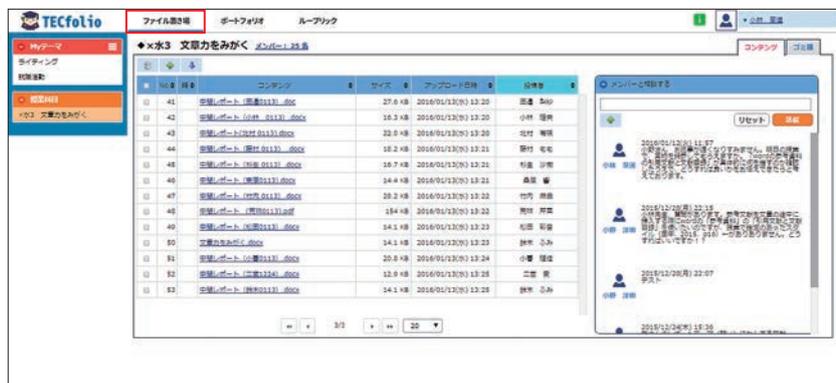


図 8 「ファイル置場」では、学生がアップロードしたレポートを一覧

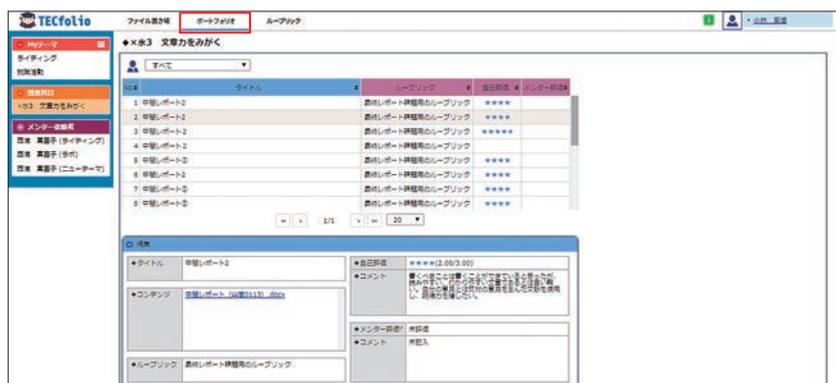


図 9 「ポートフォリオ」機能では、ファイル置場のファイルを引用してポートフォリオを作成

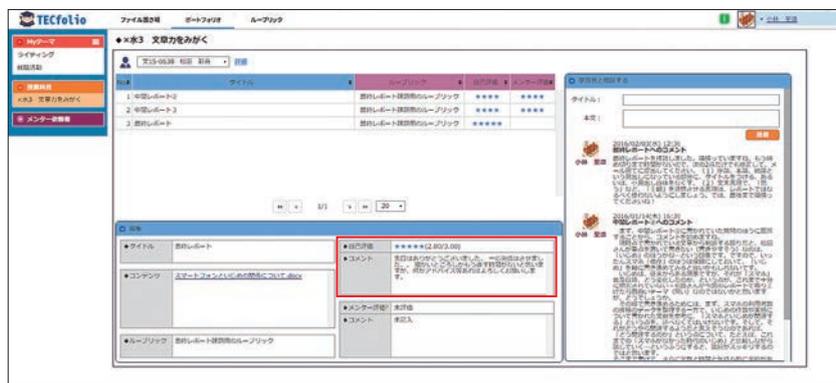


図 10 学生はループリックで自己評価しコメントを記入

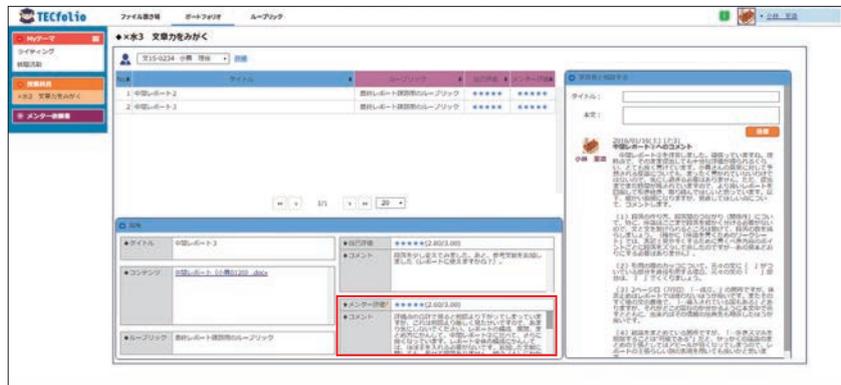


図 11 メンターがルーブリックで他者評価とコメントを記入



図 12 「ルーブリック」機能では Excel で作成したルーブリックをインポート・エクスポートできる

### 3.2.2. ライティング / キャリア支援施設での活動を軸とする利用

本システムの特徴として、「ライティング / キャリア支援に特化したシステムである」という点が挙げられる。具体的には、以下のような2点で、その特徴を活かした利用シーンが想定される。

ひとつは、TEC-book と TEC-folio が、学内のライティング / キャリア支援にかかわる施設（例：ライティングセンターやキャリアセンターなど）と連動したシステムになっていることである。学生が、大学生活を通して行ったライティング / キャリア活動において生成されるファイルとルーブリック評価に即して、すなわち、エビデンスにもとづく経年変化を参照しながら振り返りやすいという点に、大きな特徴がある。

ライティングセンターを例にすると、学生が TEC-book で相談予約をした際に添付したファイルは、すべて自動的に、TEC-folio の学内施設テーマ「ライティングセンター」のファイル置場に蓄積される。学生は、ファイル置場のファイルをポートフォリオに引用することでタイトルリストを作成し、ルーブリックにもとづく振り返りを行うことができる。

もうひとつは、ライティングセンターが主催するカリキュラム外の教育プログラム<sup>1)</sup>において利用するシーンが考えられる。たとえば、ライティング講座内で用いたワークシートやレポート課題を、学習コンテンツとして振り返るなど、学生の授業外学習を促進しうる。

これら2点の特徴は、カリキュラムでは支援することが難しい個別による比較的長いスパンでの学習支援を可能とする。

### 3.2.3. その他の利用

上記以外の利用としては、卒業論文の指導、教育実習、インターンシップ、就職活動、留学などが想定される。

1) 例：関西大学のレポートの書き方ワンポイント講座、津田塾大学の日本語ライティング講座など

## 4. 国際化と地域化

---

ライティングセンターのニーズのひとつに、外国人留学生の日本語ライティング指導がある。日本語の運用が不十分な学生にも TEC-system の利用を促すためには、システムのラベルやメッセージを多言語化して運用しなければならない。このため、TEC-system では、国際化（i18n：internationalisation：技術的な変更を加えることなく多様な言語に適合できるようにする）および地域化（L10N：localisation：翻訳テキストを加えて特定の言語に適合させる）の作業を行っている。2016年4月には日本語と英語による運用ができることを目指し、鋭意作業中である（2016年1月現在）。

## 5. オープンソース化

---

TEC-system のオープンソースソフトウェア（OSS）化については、申請書に「このシステム自体もオープンソースソフトウェアとして一般に公開し、モデルとともに普及を図る」と触れられているとともに、過去の内部評価・外部評価においても強い要望が述べられている。このため、今年度は、2016年度に OSS 化することを視野に入れた準備として、OSS ライセンスの検討を運営委員会、eポートフォリオ開発部会およびコアチームミーティングにおいて行った。

OSS は、ソースコード（可読プログラム）をインターネットで公開し、ライセンスで利用（複製・改変・再頒布）の自由を担保することによって、機能と品質の向上を目的としたソフトウェアである。また、OSS 化することによって、他システムへの転用・応用がしやすくなり、派生ソフトウェアへの発展とともに、ソフトウェア寿命の延長が期待できる。

OSS を利用しようとするユーザは、導入と運用に際して自己責任の範囲を選択する。リスクを抑えるためには、自組織内で技術・ノウハウを蓄積する、OSS を扱える人材を雇用する、SI ベンダーの有償サービスを利用するなど、コストをかける必要がある。

OSS ライセンスは、コピーレフト型と非コピーレフト型に大別されるが、他組織において広く普及を図るために、非コピーレフト型の BSD ライセンス（2条項）を採用することにした。このライセンスの特徴として、多くのソフトウェア開発者が利用（複製・改変・再頒布）を柔軟に行えるということがある。

2016年度には、OSS 化に必要となる作業（ドキュメント整備、Git 化など）を進め、他組織への普及活動を本格的に展開する予定である。

## 6. 他組織への普及活動

---

本取組終了時までには TEC-system を利用している大学数を順次増加させていくため、広報用チラシを作成のうえ、2015年5月より他大学への広報活動を開始した（広報用チラシについては巻末の添付資料を参照）。取組に関わる教員は、学会・研究会・本取組シンポジウムなどで TEC-system に関する発表およびデモを行い、関心をいただいた大学関係者のもとへ直接赴いて説明、あるいは、関西大学に来訪していただいてプレゼンテーションを行うなど、複数の大学に向けて積極的な普及活動を行った。その結果、ほとんどの大学で機能面に対する高い評価を得たが、導入・保守費用の予算確保の問題から、2016年度の導入を検討中の大学が2校という現状である（2016年1月現在）。

## 7. 今後の展開

---

2016年度からは、TEC-folio も本運用を予定しており、関西大学と津田塾大学双方の学内導入、展開へ向けての活動を行っていく予定である。たとえば、FD ワークショップ・説明会の開催を通して、教員への広報および

普及を図りたい。

また、他組織への普及活動については、予算確保の問題もさることながら、実システムの様子について十分な理解を得ることができているかは疑問である。このため、デモサイトおよびデモアカウントを用意して、学外からインターネットを通してお試し利用ができるような体制を整える必要があるだろう。

さらに、現状の TEC-folio 部分の実装は、プロトタイプ設計を終えながらも未実装部分が残っている。特に、ポートフォリオ発信のための「ショーケース」機能、ショーケースやルーブリックを共有する「TEC コモンズ」機能などは、TEC-folio の利用促進への寄与が期待されるため、今後何らかの形で実装を目指したい。

■添付資料：広報用チラシ（PDF）

# TEC-book

大学間連携共同教育推進事業（関西大学×津田塾大学）  
（考え、表現し、発信する力）を培うライティング/キャリア支援  
eポートフォリオ開発コアチーム

tecsystem@ml.kandai.jp

ライティングセンター運営の必須機能を統合

TEC: Think（考える）, Express（表現する）, Convey（発信する）

## TEC-bookとは？

関西大学と津田塾大学のライティングセンターを運用モデルに、ライティング相談予約・履歴の蓄積、指導スタッフによるシフト登録、指導履歴の蓄積と共有機能を提供します。

- ① ライティングセンター運営が開始される学期前に指導スタッフの相談受け入れシフト（相談時間）の登録を行います。
- ② 学期が始まると、学生は相談予約を申し込み、当日ライティングセンターに訪問して指導を受けます。
- ③ 相談終了後、指導スタッフが指導内容を入力し、履歴を蓄積します。
- ④ 履歴は、スタッフ間で共有し、指導の一貫性を担保します。

## 誰が使えるの？

ステイクホルダーは、①学生、②指導スタッフ、③運営管理者です。

### ①学生

- ・ 文書の種類、相談場所、相談日時を指定して、予約を入れます。
- ・ 相談場所は、複数のキャンパス・施設を設定可能です。
- ・ 相談内容を蓄積し、いつでも履歴を確認できます。
- ・ ライティングセンターからのお知らせ・確認メールを受け取れます。



### ②指導スタッフ

- ・ 対応可能な時間帯を事前にシフト登録し、指導に臨みます。
- ・ 予約がない学生の急な来室には「駆け込み予約機能」で対応可能です。
- ・ 相談終了後には、指導履歴を入力し、次回の指導に備えます。
- ・ 指導履歴は他のスタッフからも閲覧できます。



### ③運営管理者

- ・ 相談予約数、対応スタッフ数を把握し、シフト枠の調整・管理を行います。
- ・ 利用統計で稼働率、利用状況などを見ながら、センターの運営戦略を立案できます。
- ・ 指導履歴をCSV形式でダウンロードし、詳細な分析を行うことも可能です。



# TEC-folio

大学間連携共同教育推進事業（関西大学×津田塾大学）  
（考え、表現し、発信する力）を培うライティング/キャリア支援  
eポートフォリオ開発コアチーム

tecsystem@ml.kandai.jp

多様なシーンで学びをサポート

TEC: Think（考える）, Express（表現する）, Convey（発信する）

## TEC-folioとは？

個人学習、授業科目、課外活動など学生生活全般において学びのシーンをサポートするeポートフォリオシステムです。

**■ 授業で**

教員は、毎週の授業計画に沿って資料配布・文献情報提示・課題収集を行います。学生は、指示された課題をポートフォリオに反映できます。また、ループブックを使った学生同士のピアレビュー機能は学習促進にも役立ちます。

**■ 課外活動・インターンシップで**

指導者が作成する年間活動計画とともに、資料提示、課題収集などを行うことができます。学生は、これらの活動で蓄積した成果物をポートフォリオに持ち込んで、ループブックによる評価と振り返りを行います。

**■ 教育実習・就職活動で**

「Myテーマ」では、学生が自由にポートフォリオを作成できます。教育実習や就職活動の計画と記録をもとに、エントリーシートや成果物を蓄積し、ループブックによる自己評価だけでなく、メンター評価とコメント、ディスカッションボードによる指導を受けることが可能です。作成されたポートフォリオを他の利用者に発信し、評価とコメントをもらうこともできます。

グループワーク    授業    サークル活動    就職活動

PDCAサイクルに基づいた    学生の学習活動の視覚化



目標設定 → 学習 → 評価 → 振り返り → 発信



# VII

## 教職員合同FD・SD研修会、 TA 合同研修会

今年度は教職員FD・SD研修会とTA合同研修会を各1回実施した。以下、それぞれの概要を報告する。

1. 第1回教職員合同FD・SD研修会  
2015年9月13日  
津田塾大学小平キャンパス2号館  
関西大学第一学舎1号館5階ライティングラボ1
2. 第1回TA合同研修

## 1. 第1回教職員合同FD・SD研修会

開催日時	2015年9月13日(日) 10:00～12:30
会場	津田塾大学小平キャンパス2号館2105教室 関西大学第一学舎1号館5階ライティングラボ1
参加者	15名

### 1. 概要

本取組主催シンポジウム（2015年9月12日開催）の翌日、教職員合同FD／SD研修会「取組成果の効果的な普及に関する研修会」を開催した。津田塾大学の取組責任者・高橋裕子がファシリテーターを務め、関西大学会場で参加する教職員とはテレビ会議システムで結んで議論した。

前日のシンポジウムでの講演、パネルディスカッションを踏まえ、ルーブリックやTECシステムを今後、どのように発展・普及させていくべきか、他大学や社会との連携をどのように広げ、深めていけるのかなど、参加者全員で課題や認識を共有し、活発な意見交換や質疑応答をする場となった。取組最終年度も見据え、今後のライティング／キャリア支援の方向性や具体的な目標も、討論のなかで明確になった。

### 2. 討論

#### ①ルーブリック

前日に開催されたシンポジウムでは、学生・教員双方にとってのルーブリックの有効性を改めて確認するとともに、ルーブリックに対する他大学の関心の高さを知ることができた。講師の佐藤浩章氏が指摘した通り、日本のライティング教育の底上げにつながるような、汎用的なルーブリックをいかに作っていくかが議論の中心となった。「ライティングセンターは、利用した学生の学修促進につながるかどうか」を測る、ライティングセンターのためのルーブリック作りなども提案された。今後、両大学でさらに議論を重ね、作業にかかることになった。

また、開発したルーブリックを今後、他大学にどのように公開するのか、具体的な方法を探るとともに、学会等や書籍で成果を発表する計画も話し合った。

一方、もう一人の講師、藪塚謙一氏の講演では、ルーブリックでは必ずしも測りきれないライティング力があるのではないか、という問題提起があった。研修会では、この点も議論し、文章によっては「チェックリスト」のほうが有効であること、ピアラーニング、サンプルの提示なども役立つ、といった事例が参加者から紹介された。

#### ②TECシステム

前日、シンポジウム会場で行ったデモンストレーションには、多くの参加者が足をとめ、関心を示した。これまでの学会発表等でも学生の行動調査から開発した本システムが高く評価されていることが報告された。

2016年度中にオープンソース化され、幅広い活用が期待される一方で、システム導入に付随する経費の面から、目標としていた「10大学への拡大」を一気に進めることは難しいという現状がある。まずは、さまざまな大学で、関心のある教員だけにでも試験的に使ってもらう方針をとり、そのためにどのようなアプローチやサポートが必要か、話し合った。

#### ③さまざまな連携

授業との連携やステークホルダーとの連携などのほか、日本におけるライティングセンターの連合組織結成に向けて、どのような働きかけが必要か、意見を出し合った。また、取組の成果を広く発信していくために発行する書籍には、どのような内容を盛り込むべきか、検討した。

TAの研修方法は、他大学でも関心が高い分野である。これまでレポートなどアカデミックな文章を見てきた関西大学のTAは、最近増えてきたゼミなどの志望理由書の相談に戸惑っている、という。そこで、以前からさ

まざまな志望理由書の相談に応じてきた津田塾大学の TA と、合同研修会を行うことが提案された。研修会の内容や成果などを、今後他大学に広めていくことも視野に、近いうちに実施することを決めた。

#### ④成果の普及

TEC システムやルーブリックから得られた成果の普及のために、共同して発表できる学会への申し込みについても検討した。The Writing Centers Association of Japan の他、京都大学で開催される、大学教育研究フォーラム等でも 2 大学で共同して発表の申し込みをすることを決めた。

## 2. 第 1 回 TA 合同研修会

日時	2015 年 10 月 28 日(水) 14:40 - 16:10
場所	津田塾大学本館 H120 室 関西大学第 1 学舎 1 号館 6 階ライティングラボ 2
参加者	津田塾大学特任教員 2 名、チューター 3 名 関西大学特任教員 3 名、TA 16 名

### 1. 概要

関西大学ライティングラボでは、コース（ゼミ）や留学の志望理由書の相談件数が増えているという現状がある。また、津田塾大学ライティングセンターは、各種の志望理由書を含め、就職活動のエントリーシートなど、キャリアにかかわる文章も相談対象としている。そこで、両大学を TV 会議システムでつなぎ、志望理由書の相談に際し、問題となっている事項を共有し、その具体的な対応を議論した。特色が異なる 2 つの大学が意見を交わすことで、1 つの大学だけでは得られない視点で議論することができた。

### 2. 当日の進行

項目	詳細
1. 導入	配付資料の確認、趣旨説明、自己紹介
2. グループディスカッション	「志望理由書の対応の際の悩み」の資料内、関大側の(1) (2) (3)を中心に、対応についてグループディスカッション
	グループディスカッションの内容を発表・共有@適宜コメントをはさむ
3. 全体ディスカッション	実際の相談文書を配付し、各自で読んでアドバイス内容を考える
	アドバイス内容・対応のしかたについて、全体で共有・ディスカッション
4. まとめ	

### 3. 議論の内容

#### ①志望理由書に書く内容の適切性・妥当性

- ・学生に書くべき内容を把握させる
  - なぜ志望するのか、どうしてそのゼミや留学先でないといけないのか、これらを学生が明確に持っていないときは、ヒアリングを通して明確にする支援をおこなう
  - やりたいことを具体的にイメージできるように、筋道立てて話せるようにする
  - やりたい、がんばる、という情熱よりも、なぜ志望するかを深く掘り下げる

情熱だけでは他人の志望理由書との差別化ができない

- ・自己PRなどは、何が求められているのかチューター・TAにもわからないことがある
  - 学生が自分で調べなければいけないことは、教員や関連部署にたずねるよう促す
  - 「アルバイトをがんばっています」「留学経験があります」などは、その経験によって、どのような能力・スキルが身についたかをアピールする
    - その能力が、ゼミや留学にどう活かせるかにつなげると良い
    - 何かをがんばっているというアピールより、「ゼミや留学に対する準備」として位置付ける
- ・留学の場合は、主観的記述が多くなりがちだが、客観的記述も含まれるようアドバイスする（例 休みに旅行に行ったからさらに学びたい、という経験的な理由だけではなく、留学先で学べることや大学・ゼミ・コースで何ができるのかを関連付けて書く）

## ②志望理由書や課題の到達点の設定

- ・何も書いてこず、何を書いて良いかわからないと言う学生に対して
  - 何がしたいのか、なぜしたいのか、どう役立てるか、を学生にヒアリングし、明確にさせるところで一旦セッションを区切る
  - 学生が持ち帰り、文章化してから次のアドバイスをおこなう
- ・自分で自分の文章を批判的に読ませ、卒論等、今後の勉強にどう結びついていくのかについて考えて、書くように促す
- ・今後のことだけではなく、自分がこれまでやってきたことも志望理由に結び付けて書く
  - 志望理由書を書くことが学習の機会となる
- ・学生が論理的に書くスキルを持っていないときはそこを支援する
  - 主張にはその根拠があり、説得的に書けているかどうか
  - 論理展開、説得力があるか、日本語として問題ないかを確認し、アドバイスする

## ③アドバイスする側の問題

- ・ライティングセンターだけで相談が完結するのではなく、別部署（国際センター、教員、ゼミの先輩）や他の人にも相談してみることをアドバイスする
- ・チューター・TAのアドバイスにより、学生が混乱していると思われる場合は、家に帰って寝かせるように言う
- ・誰が読むための志望理由書なのか、読んでみて十分な内容が書けていると思うか、学生と一緒に考える

## 教員からのコメント：

- ・アカデミック・ライティングと志望理由書には共通点がある
  - 主張があり、それを裏付ける根拠を述べる
- ・両者の違い
  - 志望理由書は、誰に向けて何のために書いているのかをレポート以上に意識する
  - 選考を通るためには、他者のものに埋もれないようにすることも重要である
  - 当たり前のことばかり書いていても、読み手の目にとまらない
  - 書く内容には正解がなくて難しいが、埋もれてしまわないか、学生自身に問い、学生と一緒に差別化の方法を探る
- ・事前にチューター・TA同士が情報共有し合う
- ・作文のような課題では、書き手の普段の価値観があらわれる。チューター・TAは、読み手として、書き手の普段の価値観が読み取れるかを確認する
- ・自己PRの文章では、自分がどんな人間かが伝わっているかをみる
  - アルバイトをがんばっていることは、自分の何か良い点をアピールするための根拠として用いる

#### まとめ：チューター・TAが重視すべきポイント

- ・チューター・TAは、書かれている内容が差別的かどうかよりも、説得的に書けているかどうかをみれば良い
- ・どうしたら文章がもっと良くなるかをアドバイスする
  - 大学生として恥ずかしくない日本語、賢そうな表現に変える
  - 良い「つかみ」を一緒に考える（アカデミック・ライティングと同様）



# VIII

## シンポジウム報告

本章では、2015年9月12日に開催したシンポジウム「大学教育における『書く力』 どう測る どう伸ばす—ルーブリックの活用と課題—」の報告を行う。

なお、今年度は2016年3月5日にもステークホルダーの1つである The Writing Centers Association of Japan と共催し、津田塾大学でシンポジウム「Writing Centers Across Languages and Cultures」を開催する予定である。

1. 9月12日「大学教育における『書く力』  
どう測る どう伸ばす—ルーブリックの活用と課題—」 概要
2. 3月5日 The Writing Centers Association of Japan 共催  
「Writing Centers Across Languages and Cultures」

## 1. シンポジウム「大学教育における『書く力』 どう測る どう伸ばす —ループリックの活用と課題—」

開催日時	2015年9月12日(土) 14:00～17:30
会場	津田塾大学小平キャンパス7号館

### (1) 概要

2015年9月12日(土) 両大学主催の4回目のシンポジウム「大学教育における『書く力』 どう測る どう伸ばす—ループリックの活用と課題—」を開催した。

本取組では、ライティングセンターが中心となって、学生の「書く力」を養い、さらに向上させるための支援をおこなってきた。しかし、ライティングの評価や成果の実証となると、なかなか容易ではない。そこで、今回のシンポジウムでは「書く力」をどう測り、どう伸ばすかをテーマに、両大学で開発中のループリックに焦点をあてた。大学教育のユニバーサル化が進むなか、学修効果の可視化、および学生の振り返りによる学修効果向上を目的としたループリックが注目されている。では、ライティング教育にループリックはどのように活用できるのか。本シンポジウムでは、その可能性と課題を探ることにした。

一方、そもそも学生が身につけるべき「書く力」とはどのようなものなのか。社会で求められている力と、どうつながるのか、という問題もある。本取組では社会の声を代弁するステークホルダーとの課題共有と協働を進めてきた。シンポジウムには、そうしたステークホルダーの1つである朝日新聞社からも講師を招き、「書く力」を幅広い視点から検討した。

参加者は、全国25大学から教職員や学生ら73名に上った。また、シンポジウムは関西大学千里山キャンパスにも同時中継された。

### (2) 第1部 取組紹介・基調講演

総司会は飯野朋美(津田塾大学ライティングセンター特任講師)が担当した。國枝マリ津田塾大学学長の開会挨拶のあと、関西大学文学部教授の中澤務(取組責任者)による本取組の概要説明、その後、両大学の事例紹介があった。

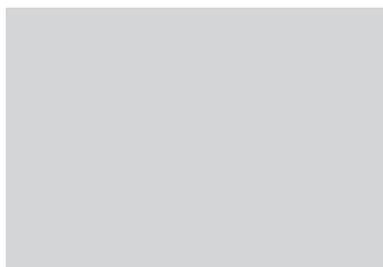
まず、関西大学教育推進部特任助教の毛利美穂が同大で開発したライティング・ループリックについて、どのような議論を重ねて開発し、授業に導入したかを紹介した。また、学生や教員に実施したアンケート結果から、ループリックによってレポートを書くときのポイントや、足りない部分、改善すべき点などを学生が意識できるようになった、といった効果を紹介した。

続いて、津田塾大学学芸学部英文学科教授の高橋裕子(取組責任者)が、英文学科3年生の英文リサーチペーパーにループリックを活用した事例を紹介した。この授業は3人の教員で担当したもので、ループリックが学生だけでなく、教員間のコミュニケーションツールとしても有用であったと報告された。

基調講演では、ループリックの第一人者である大阪大学教育学習支援センター副センター長の佐藤浩章氏が「大学で教える人のためのループリック入門」と題し、ループリックとは何か、またループリックを使用するメリット、留意点まで豊富な事例とともに詳しく紹介した。一見、評価が難しいと思われる「ライティング」だが、佐藤氏は「フィギュアスケートの採点と同じで、必ず評価できる」と指摘。「ループリックとは、簡便でありながらも、本当に大切なことを学生に伝えることのできる濃密なコミュニケーションの機会である」と説いた。受け取った学生の学習意欲が促されるよう、面と向かって話すメッセージのつもりでループリックを作成すること、教員がループリックの作成、共有、分析をおこない、改訂を繰り返すことによって授業改善の機会になり、また学科や学部、大学の教育組織の改善にもつながると話した。

続いて、朝日新聞長野総局長・藪塚謙一氏(チラシ作成時は人事部主査)が「『書く力』の鍛え方」と題して講演した。さまざまな大学で指導してきた学生の作文を例に、それが藪塚氏の質問を通して具体的に説得力のある文章に改善されていった経緯を紹介した。「相手に伝わる文章とは、自分の主張や思いがあって、その背景に

根拠がある、ということ。よくアカデミックライティングとパーソナルライティングは違うと思われるが、何がどこまで違うだろう。何か文章を書くときには根拠を示すというのは基本であり、それは社会に出てからも同じことである」「自分の体験も立派な根拠である。初年次のうちに学生に自分のこれまでの経験を書かせ、それを価値あるものとして認め、褒めてあげることが今の若い人には大事だ」と藪塚氏は指摘した。



### (3) 第2部 パネルディスカッション

第1部の登壇者全員が参加し、大原悦子（津田塾大学ライティングセンター特任教授）が進行を担当してパネルディスカッションとなった。

まず、関西大学、津田塾大学が第一部で紹介した事例に関して佐藤氏、藪塚氏がコメントした。佐藤氏は、関西大学の学生のアンケートに「レポートを書くことに関して、最初より成長したと思う」という記述があったことに注目。「自分の成長を把握でき、次に何を目指すべきかがわかるループリックになっていたことを示している。こういうコメントを引き出せるようなループリックにしないといけない」と評価した。また、津田塾大学では、ループリックが教員間の連携促進に役立った点を評価し、「ループリックを皆で作って、学内で普及させていくという作業自体が、アウトカムベースの議論を学内で普及させていくよききっかけになる」と語った。藪塚氏からは「ライティングループリックでは、書き方に関してはよく整っているが、資料をどのぐらい適切に集めているのか、という評価も必要ではないか」という指摘があった。

ループリックとシラバスとの関係、ループリックを配布するタイミングなど、会場から多数の質問が寄せられ、それらに1つひとつ答えながら、議論を深めていった。また、藪塚氏が授業で実践しているパーソナルライティングの手法に関心が集まった。藪塚氏が例として挙げた学生の文章は、氏の指導前でもループリックでは「いい文章」として高く評価されるのではないかと。しかし、何度も自分に問いかけ、掘り下げる作業を学生に繰り返させることで、さらによい文章に磨きあげられる。このような「掘り下げる」作業はループリックのできるのだろうか、という問題提起があった。

「ループリックで評価するようなものも必要だが、社会に出てから大事なものは、書き方というよりは、何を訴えたいと本人が思っているのか、そのためにその論拠をどれだけ掘り下げ、相手に語りかけようとするのか、ではないか」と藪塚氏が問いかけ、佐藤氏も「到達目標だけでなく、何のために書くのか、書く意義のようなものは、生身の先生がしっかりと伝えていく必要がある」と語った。

ループリックに対する会場の関心の深さがうかがえるパネルディスカッションとなった。ループリックが教員と学生、教員同士をつないでいくツールとして有効であること、これまで暗黙知として伝承されてきた大学の知を、形式知に置き換えていく作業がこれからますます必要になることを確認し、ディスカッションを終えた。

最後に、関西大学副学長の林宏昭（事業推進責任者）の閉会あいさつでシンポジウムは終了した。



文部科学省平成24年度大学間連携共同教育推進事業（考え、表現し、発信する力）を培うライティング/キャリア支援



## シンポジウム 大学教育における「書く力」 どう測る どう伸ばす ——ループリックの活用と課題——

参加  
無料

日時 2015年9月12日(土) 14:00~17:30

会場 津田塾大学小平キャンパス7号館7101教室

(同時中継 関西大学 千里山キャンパス第1学舎1号館ライティングラボ1)

本取組では、ライティングセンターが中心となって、学生の「書く力」を養い、さらに向上させるための支援をおこなってききました。しかし、ライティングの評価や、成果の実証はなかなか容易ではありません。取組4年目の今年のシンポジウムでは、「書く力」をどう測り、どう伸ばすかをテーマに、いま開発中のループリックをライティング教育に活用する可能性と課題を探ります。また、そもそも学生が身につけるべき「書く力」とはどのようなものか、社会で求められている力とどうつながるのかなど、幅広い視点から検討します。

ライティング指導やループリック、初年次教育に関心のある方をはじめ、教職員、学生、一般の方からのご参加をお待ち申し上げます。

### 第1部 取組紹介・講演

※講演タイトルは変更の可能性があります。

14:00	開会のあいさつ	津田塾大学 学長 藤板 マリ
14:05	趣旨説明	津田塾大学 ライティングセンター 特任講師 黒野 朋美
	取組の概要	関西大学 文学部教授/取組責任者 中野 藤
	関西大学事例紹介	関西大学 教育推進部特任助教 毛利 英樹
	津田塾大学事例紹介	津田塾大学 学芸学部英文学教科教授/取組責任者 高橋 栞子
14:45	<b>講演1</b> 「大学で教える人のためのループリック入門」	大阪大学 教育学部支援センター副センター長 佐藤 浩章氏
15:35	<b>講演2</b> 「『書く力』の鍛え方」	株式会社朝日新聞社 東京本社 人事課主査 飯塚 謙一氏

### 第2部 パネルディスカッション

16:20	第1 部登壇者によるパネルディスカッション	
17:25	開会のあいさつ	関西大学 副学長・経営学部長/事業推進責任者 林 宏昭

#### お申し込み方法

9月9日(水)までに、ライティングセンターHP  
[イベント・講座・講演会のお申し込み]  
<http://wcc.tusuda.ac.jp/contact/index.php>より、  
①9月12日 シンポジウム (津田塾大学会場)  
②9月12日 シンポジウム (関西大学会場)  
いずれかを選択のうえ、「お問い合わせ」欄に  
所属をご記入ください。

#### 交通アクセス

津田塾大学  
東京都小平市津田町2-1-1  
西武国分寺線 鷹の台駅 徒歩約8分  
JR武蔵野線 新小平駅 徒歩約15分  
※駐車場の用意がございませんので、  
公共交通機関をご利用ください。

#### お問い合わせ

津田塾大学  
ライティングセンター  
TEL/FAX 042-342-5120  
URL <http://wcc.tusuda.ac.jp/>  
E-Mail [WritingCenter@tusuda.ac.jp](mailto:WritingCenter@tusuda.ac.jp)

## 2. The Writing Centers Association of Japan 共催 “Writing Centers Across Languages and Cultures”

---

開催日時	2016年3月5日(土)
会場	津田塾大学小平キャンパス7号館

本取組のステークホルダーの一つ、The Writing Centers Association of Japan (WCAJ) および政策研究大学院大学と共催し、WCAJ の8回目のシンポジウムを津田塾大学で開催した。中国や台湾も含め、約20の大学や研究機関などから21のペーパー発表と2つのポスター発表があった。参加者は約80名。また、シンポジウムの最後に関西大学文学部教授の中澤 務（取組責任者）が、全国のライティングセンターによる連合組織づくりを提案した。



# IX

## 評価指標開発部会の取組

本取組では、取組の柱のひとつとして、評価指標の確立を掲げている。評価指標開発部会では、①〈書く力〉をめぐる評価指標、②自己評価指標、③〈考え、表現し、発信する力〉をめぐる指標、の計3種の指標の開発を目指す。

2015年度は、2014年度に開発・検証した指標の運用を行った。また、指標開発・運用によって得られた知見についての報告を関西大学FDフォーラム（2015年10月）および大学教育研究フォーラム（2016年3月）で行い、2015年9月のシンポジウムでは、ルーブリックをテーマとした「大学教育における『書く力』 どう測る どう伸ばす—ルーブリックの活用と課題—」を開催した。

本章では、2015年度の活動内容について報告する。

1. はじめに
  2. ルーブリック開発の概要
  3. 評価指標の開発と検証：関西大学の事例
    - 3.1. 〈書く力〉をめぐる評価指標の開発・検証
      - 3.1.1. 検証①：アンケートおよびヒアリング結果
      - 3.1.2. 検証②：モデルクラスにおける評価の試行的実施
    - 3.2. 自己評価指標の開発・検証
      - 3.2.1. 開発：ライティングにかんする自己評価のためのルーブリック開発
      - 3.2.2. 検証：アンケートおよびヒアリング結果
    - 3.3. 〈考え、表現し、発信する力〉をめぐる指標の運用
    - 3.4. 社会連携の事例①：「考動力」作文コンテスト
    - 3.5. 社会連携の事例②：関西大学高等部卒業研究
    - 3.6. FD活動
  4. 評価指標の開発と検証：津田塾大学の事例
    - 4.1. 〈書く力〉をめぐる評価指標の開発・検証
      - 4.1.1. 英語ライティング・ルーブリック
      - 4.1.2. 日本語ライティング・ルーブリック
  5. 評価指標の開発：両大学による共同開発事例
    - 5.1. ライティングセンタールーブリックの開発
  6. シンポジウム・FD活動
  7. TEC-system上での展開
  8. 次年度に向けて
- 〈参考資料〉

## 1. はじめに

本取組において開発する支援ツールのひとつに、評価指標がある。評価指標とは、広義にはルーブリック（評価基準）ともいい、アカデミック領域では、「学生が何を学習するのか」と「学生が学習到達しているレベル」の関係性を明らかにするために、質的違いをレベルに分けて表などに整理したもので、学修の達成度を測る評価法を指す [1] [2] [3]。特に、「他の手段では困難な、パフォーマンス等の定性的な評価に向くとされ、評価者・被評価者の認識の共有、複数の評価者による評価の標準化等のメリットがある」とあり、ライティング／キャリア支援における学生の現状把握と目標提示に効果的なツールと言える [4]。以下、開発する評価指標を、ルーブリックと称す。

本取組では、〈考え、表現し、発信する〉力の養成に際して、大きく3つの目標を掲げている。

第一に、学修の質保証とその効果の可視化を目的としたルーブリックの全学的な運用である。具体的には、関西大学ライティングラボ（以下、ラボと表記）、そして津田塾大学ライティングセンター（以下、センターと表記）を中心とした、学修支援機関とカリキュラムとの綿密な連携のもとでの導入を目標としている。

第二に、開発・運用したルーブリックについて、年度ごとに客観的評価を実施し、その質の向上を目指す。

第三に、多様かつ汎用性の高いルーブリックを蓄積し、利用者に広く提供することで、両大学のみならず、高等教育の益とすることである。ライティング／キャリア支援では、「書く」という行為をつうじた自己発信力を主眼に置くが、「書く」ことに求められる多様なスキルにたいし、ラボ／センターが蓄積してきたデータなどをいかすことで、より汎用性のあるルーブリックの提供が可能となる。

取組4年目となる本年度の評価指標部会の活動は、開発したルーブリックの運用・検証をもとに、新たなルーブリックの開発を進めると同時に、その過程で得た知見を学内外に広く公表することであった。以下に評価指標部会の活動内容を述べる。

## 2. ルーブリック開発の概要

開発にあたり、本年度は、評価指標部会を定期的に開催する体制を敷いた。また、検証にあたっては、検証のための教員、レポートおよび検証クラスの担当教員および学生など、開発の段階に応じて幅広く協力者を募り、作業を進めた。

なお、開発・運用・改善の一助とするため、オンラインストレージサービス上に両大学が作成したルーブリックを共有・蓄積した。

## 3. 評価指標の開発と検証：関西大学の事例

### 3.1. 〈書く力〉をめぐる評価指標の開発・検証

#### 3.1.1. 検証①：アンケートおよびヒアリング結果

関西大学では、〈書く力〉をめぐる評価指標として2014年度に開発した日本語ライティング・ルーブリックを、複数の授業クラスにおいて本格的に運用し、その内容の分析・改善を行った。（図1参照 [5]）

評価の観点	観点の説明	1	2	3	4
① 教員の 課題意図の 理解	教員の課題意図を理解し、それに沿った記述内容になっているか。	課題意図を理解できておらず、レポートの記述内容が課題に沿っていない。	課題意図を理解しているようだが、レポートの記述内容が課題の要件を満たしていない箇所がある。	課題意図を理解しており、レポートの記述内容が課題の要件をおおむね満たしている。	課題意図を十分に理解しており、レポートの記述内容が課題の要件を過不足なく満たしている。
② 資料の 取り扱い	資料に関して、その内容を適切に把握し、十分な検討をまとめてもらわれているか。	資料に関しての記述がない。	資料に関する記述はあるが、その内容を把握できておらず、まとめられていない。	資料に関して、その内容を把握できており、まとめられている。	資料に関して、その内容を把握できており、論に沿ってまとめられている。
③ 自分の 立場・意見	自分の立場や意見が、説得力のある論拠とともに、明確に提示されているか。	自分の立場・意見が提示されていない。	自分の立場・意見は提示しているが、その論拠が明らかでない。	自分の立場・意見が、論拠とともに提示できている。	自分の立場・意見が、論拠とともに提示できている。かつオリジナリティがある。
④ 全体の構成	文章全体の構成について、序論・本論・結論、PREP等の形式になっているかどうか。	序論・本論・結論、PREP等に沿った構成ができていない。	序論・本論・結論、PREP等に沿った記述はみられるが、形式的に欠けている部分がある。	序論・本論・結論、PREP等に沿った構成が形式的にできている。	序論・本論・結論、PREP等に沿った構成が形式的にできている。かつ内容的にも一貫している。
⑤ 学術的な作法	用語の定義、引用のルールなど、学術的な文章として適切な作法が守られているか。	満たしている項目が、1項目以下である。	満たしている項目が、2～3項目である。	満たしている項目が、4項目である。	満たしている項目が、5項目である。
⑥ 日本語の表現	日本語の文章として、表現・表記が適切であるか。	満たしている項目が、2項目以下である。	満たしている項目が、3～5項目である。	満たしている項目が、6～8項目である。	満たしている項目が、9項目以上である。

#### ⑤学術的な作法

1. 表題、所属（学籍番号、学部、学年等）、氏名の基本的な情報が記されている。
2. 出典を明示しており、自分の意見と他者の意見を区別している。
3. 本文中の引用方法について、ルールに従って表記されている。
4. 巻末の文献表があり、分野ごとのルールに沿って表記されている。
5. 専門用語の定義付けや使い方が適切である。

#### ⑥日本語の表現

1. 誤字脱字がない。
2. 文法の間違いが無い。
3. 一文の長さが適切である。
4. 文体が統一されている。
5. 主語・述語が呼応している。
6. 句読点の使い方が適切である。
7. 段落の作り方（一字下げ、行替え、長さ）が適切である。
8. 重複表現（接続詞、文末）がない。
9. 論文では避けたい表現（隠語、俗語、口語表現）がない。
10. ページのレイアウト（行数・文字数、余白、ページ数の付与）が適切である。

図1 日本語ライティング・ループリック

運用クラス数は、春学期は、共通教養科目および学部専門科目を中心に、44クラス（1年次30クラス、2年次11クラス、3年次2クラス、4年次1クラス）である。なお、44クラス中、ライティングラボ主体の運用は23クラスであり、下記のアンケート結果については、ラボ主体の23クラスのみを示す。

ループリックの検証は、授業への導入を希望する教員との密な連携のもと行った。ループリック使用による学修意識の変化および使用方法の確認、そしてループリックの改善点を把握するために、学生へのアンケートおよび教員へのヒアリングを実施した。

アンケートは、ループリックの使用前（事前）・使用後（事後）の2回行った。時期は、第1回もしくは第2回（4月）授業内および、第15回（7月）授業内である。教員へのヒアリングは、第15回授業後を中心に、随時行った。ヒアリングは、共通教養科目担当者2名、学部専門科目3名の計5名に行った。

春学期のアンケート実施状況などは以下のとおりで、有効回答数は205名であった。なお、事前・事後の片方しか回答していない者、および各設問群においてすべて無回答であった場合は無効とした。

表1 調査の概要（春学期）

時期	(事前) 第1回もしくは第2回(4月) 授業内 (事後) 第15回(7月) 授業内
内容	ループリックの使用について
目的	ループリックの改善点の把握
人数	事前(pre) = 391名、事後(post) = 267名 事前・事後の有効回答数205名

表2 学部・学年別（春学期内訳）

学部	1年次	2年次	3年次	4年次	総計	%
法学部	9	0	0	0	9	4%
文学部	113	5	2	0	120	59%
経済学部	0	1	1	0	2	1%
商学部	11	1	0	0	12	6%
社会学部	38	5	3	0	46	22%
政策創造学部	11	0	0	0	11	5%
外国語学部	2	0	1	0	3	1%
システム理工学部	1	0	0	1	2	1%
総計	185	12	7	1	205	100%

表3 科目別（春学期内訳）

科目名	学部	1年次	2年次	3年次	4年次	総計	%
文章力をみがく	共通	55	12	7	1	75	37%
知のナビゲーター	文学部	87	0	0	0	87	42%
基礎研究1	社会学部	34	0	0	0	34	17%
導入ゼミ	政策創造学部	9	0	0	0	9	4%
総計		185	12	7	1	205	100%

運用クラスの展開にあたっては、2015年1月28日に実施した文学部専門教育科目クラス担当教員へのガイダンスを皮切りに、3月24日および4月18日に実施したFD活動をはじめ、メールで教員に広報を行った。その結果は、表2・3のとおりである。

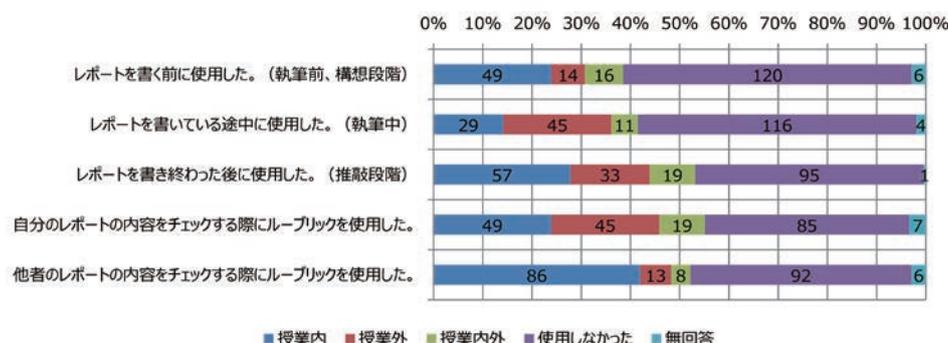


図2 授業におけるルーブリックの使用状況 (春学期) N=205

図2は、授業におけるルーブリックの使用状況である。ルーブリックの使用は、執筆の進捗に比例して多くなっていることがわかる。また、運用クラスにおいて「他者のレポートの内容をチェックする際にルーブリックを使用した」割合が50%を越えた理由として、担当教員にルーブリックを提供するにあたって、ピア評価を推奨したことが要因として挙げられる。

次に、ルーブリックの観点にそった学修達成度の結果を、図3に示す。

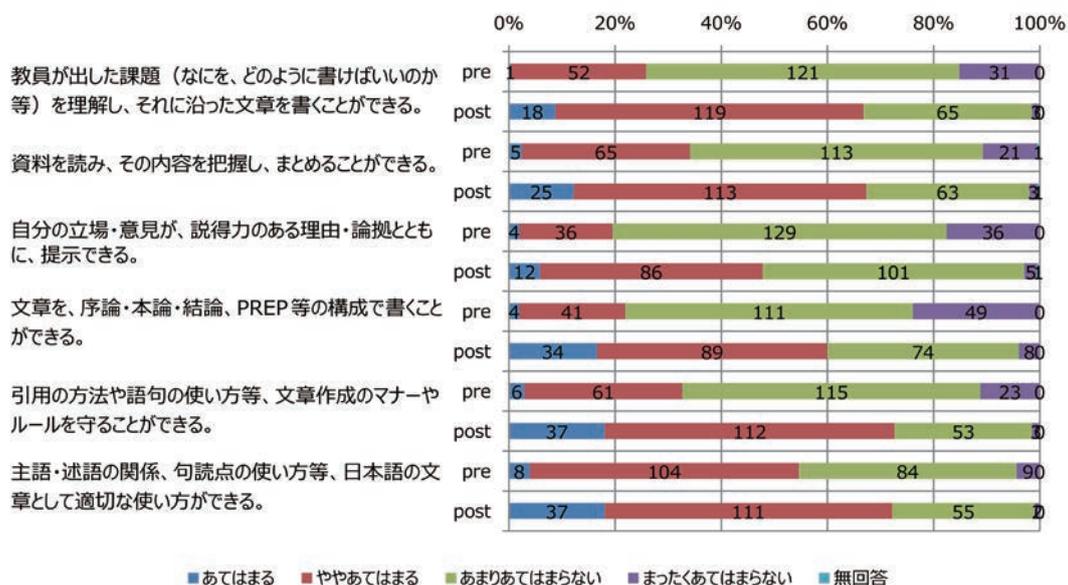


図3 授業で身についたライティング力 (pre・postの比較) (春学期) N=205

ルーブリックの使用前後で、「あてはまる」「ややあてはまる」が約2倍から3倍に上昇し、各観点ともにほぼ50%を上回った。特に、「教員が出した課題（なにを、どのように書けばいいのかなど）を理解し、それに沿った文章を書くことができる」にかんしては、ルーブリックによって到達目標を明示したことから、26%から67%になった。また、チェックリスト形式で使いやすいという意見があった「引用の方法や語句の使い方等、文章作成のマナーやルールを守ることができる」は、33%から73%となった。このことから、ルーブリックを使用することによって、観点（「教員の課題意図の理解」「資料の取り扱い」「自分の立場・意見」「全体の構成」「学術的な作法」「日本語の表現」）で示したそれぞれのライティングスキルのポイントについて、学生自身が意識的に確認するようになったことがうかがえた。

授業の課題でルーブリックを使用した際の感想について、「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の4件法でたずねた結果を図4に示す。

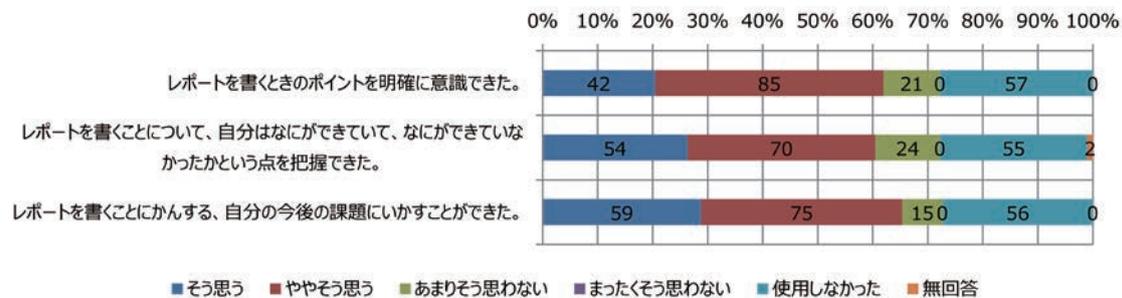


図4 授業の課題でのルーブリック使用の感想（春学期・事後）N=205

図4から、各設問において、「そう思う」「ややそう思う」の肯定的な回答をした学生が60%を上回ったことがわかった。ルーブリックで到達目標を事前に提示することによって、学生自身が現状を把握し、到達目標を意識できたことが確認できる。なお、「使用しなかった」という回答が30%近くあることについては、回答が特定のクラスに集中していたことから当該クラスの教員にヒアリングを行った結果、配付したルーブリックを「チェック表」などの他の名称で紹介していたことから、学生がルーブリックを「ルーブリック」として認識していなかった可能性があることが指摘できる。

ルーブリックを使用した際に感じたこと、良かった点や悪かった点、使いづらかった点などについてたずねた自由記述（原文ママ）を図4の設問にしたがって分類すると、以下のようになる。

#### (1) レポートを書くときのポイントを明確に意識できた

##### 【良かった点】

- ・レポートでどこをどのように評価しているのかが分かった。
- ・日本語の表現の評価について細かく項目があり、ひとつひとつ意識して書くことができた。
- ・レポートを書くときに、読み手を意識しながら書くことができるようになった。

#### (2) レポートを書くことについて、自分はなにができていて、なにができていなかったのかという点を把握できた

##### 【良かった点】

- ・レポートで構成であったり、書式であったり、自分の足りない点がピンポイントで分かり、改善しやすかった。これからのレポート作成の際にも利用したいと思う。

##### 【悪かった点、使いづらかった点】

- ・ルーブリックに書いてある基準が抽象的で、自分がどうであるのか、できているのかが分かりにくい点。
- ・判断がもうちょい細かい段階があっただけだった。1～4では、2、3あたりが微妙だったため。

#### (3) レポートを書くことにかんする、自分の今後の課題にいかすことができた

##### 【良かった点】

- ・自分の書いている文章が合っているのか不安になったり困った時に読むと、具体的にこうしないといけないなと自分で気づくことが出来たので、最初より成長したと思います。

#### (4) その他

##### 【良かった点】

- ・うすくて小さくてしっかりと書かれていたので持ち運びやすく、分かりやすかった。

ルーブリックがツールである以上、利便性も求められる。(4)の感想からは、ルーブリックを学生が常に参照できるように、コンパクトかつ一覧できる形状であることの重要性を再認識させられた。

他に、ルーブリックの効果を実感できたという意見がある一方で、(2)にかんしては、各段階の差がわかりに

くという改善すべき点も見つかった。

教員へのヒアリングでも同様の傾向が見られた。評価観点の意味や尺度の差については、学生にたいする教員からの十分な説明を要するものであったこと、尺度の差の不明瞭さが改善すべき点として挙げられた。すなわち、記述語が抽象的であるという指摘である。この改善にむけて、「学術的な作法」「日本語の表現」でチェックリスト形式とした観点にたいして、「チェックリストになっていることは、とてもわかりやすかった」という意見は大きなヒントになった。

### 3.1.2. 検証②：モデルクラスにおける評価の試行的実施

モデルクラス（2015年度春学期開講「文章力をみがく」）におけるルーブリックの試行的実施から、その効果と問題点を検討した。

共通教養科目「文章力をみがく」は全学科目である。今回の受講者数は24名であり、そのうち、最終レポートを提出した学生は23名であった。その内訳は、1年次生20名、2年次生2名、3年次生1名であり、所属学部は、文学部、法学部、商学部、外国語学部であった。モデルクラスの各回の授業内容は表4のとおりである。

表4 モデルクラスの授業内容

テーマ	回	内容
Ⅰ レポートの基礎	第1回	ガイダンス
	第2回	批判的読み
	第3回	要約とパラグラフライティング
	第4回	問いの立て方
	第5回	レポートの構成
Ⅱ 情報の整理	第6回	情報の収集
	第7回	情報の整理
	第8回	アイデアの構築①
	第9回	アイデアの構築②
	第10回	アウトライン作成
Ⅲ レポートの執筆	第11回	引用と参考文献
	第12回	相互推敲・修正①
	第13回	魅せる文章
	第14回	相互推敲・修正②
	第15回	振り返り

全15回授業を3期に区分し、段階的に作業を行った。第1～5回では、ルーブリックの各観点に沿った内容を盛り込んだ基礎的スキルの訓練を行い、第6～10回では、レポート作成のための情報収集と整理、および内容の検討、そしてその成果をふまえ、第11～15回では主にグループ作業によるレポートの作成作業を行った。この授業では、実際のレポート執筆との関連を意識づけるため、第12回でルーブリックを提示した。ルーブリック活用にかんする第10回から第15回の内容は以下のとおりである。

第10回：学生は、自ら選択したテーマをもとに、レポート内容（アウトライン）を発表する。教員および学生の感想をふまえ、第12回までに1稿を書いてくる。

第12回：学生にルーブリックを配付し、その意図と内容を解説する。学生はそのポイントにしたがって、1稿を3名から5名のグループで相互推敲（ルーブリックによるピア評価）し、改善策を話し合う。学生は、話し合いの結果を参考に自己評価を行うとともに、検討結果に基づき、第14回までに2稿を書いてくる。

第14回：2稿を、第12回と同じグループで相互推敲（ルーブリックによるピア評価）し、改善策を話し合う。学生は、話し合いの結果を参考に自己評価を行うとともに、検討結果に基づき、2週間後に最終レポートを提出する。提出の際には、ルーブリックによる自己評価結果を明記させる。

以上の作業によって、レポートは1稿から3稿まで、計2回のピア評価を経て推敲され、改善された。これらの原稿はすべて提出させ、最終的に、教員がすべての段階の原稿をルーブリックによって評価した。ルーブリックに基づく評価としては、学生によるピア評価、執筆者本人による評価、教員による評価のデータを収集することができた。以下、その結果を表5に示す。

表5 各項目における評価値平均の推移 (N=23)

	ピア評価		本人評価			教員評価		
	1稿	2稿	1稿	2稿	3稿	1稿	2稿	3稿
①教員の課題意図の理解	3.2	3.6	2.6	3.2	3.5	1.6	2.2	2.6
②資料の取り扱い	3.2	3.7	2.4	3.1	3.6	1.6	2.4	3.0
③自分の立場・意見	3.0	3.4	2.7	2.9	3.3	1.5	2.1	2.8
④全体の構成	3.4	3.7	2.9	3.1	3.8	1.4	2.0	3.3
⑤学術的な作法	3.3	3.4	2.5	3.0	3.8	1.7	2.4	3.2
⑥日本語の表現	3.2	3.4	2.8	3.2	3.7	2.9	3.0	3.5

ピア評価、本人評価、教員評価のいずれにおいても評価値は上昇しているが、本人評価は、ピア評価よりも厳しく、教員評価はさらに厳しい結果となっている。ピア評価と教員評価の1稿の差が2倍近くあり、本人評価と教員評価の3稿の差も最大0.9であることは、アンケート結果などにおいて尺度の差の不明瞭さが指摘されていることを勘案しても、改善すべきものであることがわかる。

一方、項目によって評価値が上昇しやすいものと、上昇しにくいものがあることも明確となった。観点⑥にかんしては、ピア評価、本人評価、教員評価の差が他の観点よりも少ない。このことは、アンケート結果などにおける、チェックリスト形式を採用した観点⑤⑥が具体的であるという意見からも確認できるように、評価者間の差が生じにくいものであることを示している。

## 3.2. 自己評価指標の開発・検証

### 3.2.1. 開発：ライティングにかんする自己評価のためのルーブリック

学生アンケートおよび教員へのヒアリング、モデルクラスの結果をもとに、ルーブリック開発における昨年度の作成ガイドラインの見直しを行った。

変更箇所は、尺度の設定段階と名称、そして記述語の表現の3点である。尺度の設定段階は、4段階（「(1) 課題目標が未達成な段階」「(2) 課題目標を部分的に達成している段階」「(3) 課題目標を達成している段階」「(4) 課題目標を達成しているとともに、+a（優れた点）がある」）から、3段階（「(1) 課題目標が未達成な段階」「(2) 課題目標を部分的に達成している段階」「(3) 課題目標を達成している段階」）とした。その理由として、4段階の(2)と(3)の差異がわかりづらいとの意見が学生・教員からあったことが挙げられる。尺度の名称は、数値（「1」～「4」）から行動レベルの評語（「がんばろう」「優秀までもう一步」「優秀」）に変更した[2]。また、記述語の表現は、一文で示していた内容を、リスト形式に変えて、内容の具体化を図った。（図5参照）

評価の観点	1	2	3	4
資料の取り扱い	資料についての記述がない。	資料に関する記述はあるが、その内容を把握できておらず、まとめられていない。	資料に関して、その内容が把握できており、まとめられている。	資料に関して、その内容が把握できており、論に沿ってまとめられている。



評価の観点	がんばろう!	優秀までもう一步	優秀
資料の取り扱い	資料にかんする記述がない	<ul style="list-style-type: none"> <li>資料にかんする記述がある</li> <li>自分の意見と取り上げられている資料との関連が分かりづらい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の意見に関連する資料が選択できている</li> <li>自分の意見について、賛成／反対などの複数の立場からの資料をもとに検討している</li> </ul>

図5 改善例（抜粋）

以上の見直した作成ガイドラインをもとに、利用シーンとして、「学生自身による学修成果物の評価」という行為に焦点をあて、ループリックを開発した。開発は、関西大学の特任教員3名が担当し、9月から11月の間に、2週間に1度のペースで合議の機会を設けた。

ライティング・ループリックからの大きな改善点は、以下の4つである。

1つ目は、尺度間の差を明確にするために、4段階から3段階に変更した。2つ目は、観点と記述語の対応を明確にするために、それぞれの項目内容を一文でまとめるのではなく、リスト形式であらわした。3つ目は、チェックリスト形式の観点（「学術的な作法」「日本語の表現」）について、フラットになっていた項目に重要度を加えた。4つ目は、各観点到コメント欄を設けた。

そして完成したループリックが図6である。

評価の観点	評価の観点の説明	がんばろう!	優秀までもう一步	優秀
①資料の取り扱い	自分の意見に関連する資料を選択し、十分な検討をしてまとめられているか	資料にかんする記述がない	<ul style="list-style-type: none"> <li>資料にかんする記述がある</li> <li>自分の意見と取り上げられている資料との関連が分かりづらい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の意見に関連する資料が選択できている</li> <li>自分の意見について、賛成／反対などの複数の立場からの資料をもとに検討している</li> </ul>
②自分の意見	文章において何がもっとも言いたいことなのか明確に示されている	自分の意見が提示されていない	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の意見が複数提示されており、どれももっとも言いたいことなのか分かりづらい</li> <li>自分の意見が、自らの体験や身の回りの出来事に基づいて述べられている箇所がある</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>文章において何がもっとも言いたいことなのか明確に示されている</li> <li>自分の意見が、自らの体験や身の回りの出来事に基づいて述べられていない</li> </ul>

評価の観点	評価の観点の説明	がんばろう!	優秀までもう一步	優秀
③全体の構成	文章全体の構成が整っているか ※序論・本論・結論の詳細については『レポートの書き方ガイド[基礎篇]』の24～26ページを参照	文章全体の構成ができていない	・序論・本論・結論に書くべき内容のいずれかが欠けている ・序論で取り上げている問題に対する答えが結論として示されていない	・序論・本論・結論に書くべき内容が提示されている ・序論で取り上げている問題に対する答えが結論として示されている
④学術的な作法	用語の定義、引用のルールなど、学術的な文章として適切な作法が守られているか	1～3の項目が満たされていない	1～3の項目を満たしているが、4～7の項目のいずれかが満たされていない	すべての項目を満たしている
⑤日本語の表現	日本語の文章として、表現・表記が適切であるか	1～3の項目が満たされていない	1～3の項目を満たしているが、4～8の項目のいずれかが満たされていない	すべての項目を満たしている

## ④学術的な作法

1. 表題、所属 [学籍番号・学部・学年]、氏名の基本的な情報が記されている
2. 出典を明示しており、自分の意見と他者の意見を区別している
3. 引用文として、wikipedia (孫引き) や質問サイト (例 Yahoo! 知恵袋) などを用いていない
4. 本文中の引用方法について、ルールに従って表記されている
5. 巻末の文献表があり、分野ごとのルールに沿って表記されている
6. キーワードの定義付けがなされている
7. ページのレイアウト (行数・文字数、余白、ページ数の付与) が適切である

## ⑤日本語の表現

1. 誤字脱字がない
2. 文体が統一されている
3. 話し言葉ではなく書き言葉を用いている
4. 助詞 (て・に・を・は)、ら抜き言葉、重複表現など言葉遣いが適切である
5. 主語・述語が呼応している
6. 段落の作り方 (段落ははじめの一字下げ、一段落一主張) が適切にできている
7. 読点が文章の意味が正しく伝わる箇所であり、句点が一文の終わりにある
8. 接続表現、文末表現において同じような表現がくり返されていない

図6 ライティングにかんする自己評価のためのループリック (コメント欄省略)

## 3.2.2. 検証：アンケートおよびヒアリング結果

開発したライティングにかんする自己評価のためのループリックは、秋学期の後半部にあたる11月から運用した。運用クラス数は、共通教養科目・学部専門科目を中心に9クラス (1年次8クラス、2年次1クラス) である。

分析・改善にあたっては、学生へのアンケートおよび教員へのヒアリングを実施した。秋学期のアンケートでは、ループリックの改善点把握を主とし、ループリックの使用後 (事後) のみとした。時期は、第15回 (12～1月) 授業内である (表7参照)。教員へのヒアリングは、春学期と同様、第15回授業後を中心に、随時行った。ヒアリングは、共通教養科目担当者2名、学部専門科目1名の計3名に行った。

運用クラスの展開にあたっては、春学期の運用クラス担当教員にたいし、アンケート結果のフィードバックと併せてメールで広報を行った。また、ラボと授業連携を行った教員にも広報を行った。その結果は、表7・8のとおりである。

表6 調査の概要 (秋学期)

時期	(事後) 第15回(12～1月) 授業内
内容	ルーブリックの使用について
目的	ルーブリックの改善点の把握
人数	144名(有効回答数143名)

表7 学部・学年別 (秋学期内訳)

学部	1年次	2年次	3年次	4年次	総計	%
法学部	27	0	0	0	27	19%
文学部	48	20	3	1	72	50%
経済学部	3	1	0	0	4	3%
商学部	6	2	2	0	10	7%
社会学部	13	5	4	0	22	15%
政策創造学部	1	0	0	0	1	1%
外国語学部	5	0	0	0	5	3%
環境都市工学部	1	0	0	0	1	1%
(空白)	1	0	0	0	1	1%
総計	105	28	9	1	143	100%

表8 科目別 (秋学期内訳)

科目名	学部	1年次	2年次	3年次	4年次	総計	%
文章力をみがく	共通	85	14	6	1	106	74%
基礎演習	法	10	0	0	0	10	7%
知のナビゲーター	文	10	0	0	0	10	7%
映像文化専修ゼミ2	文		14	3	0	17	12%
総計		106	28	9	1	143	100%

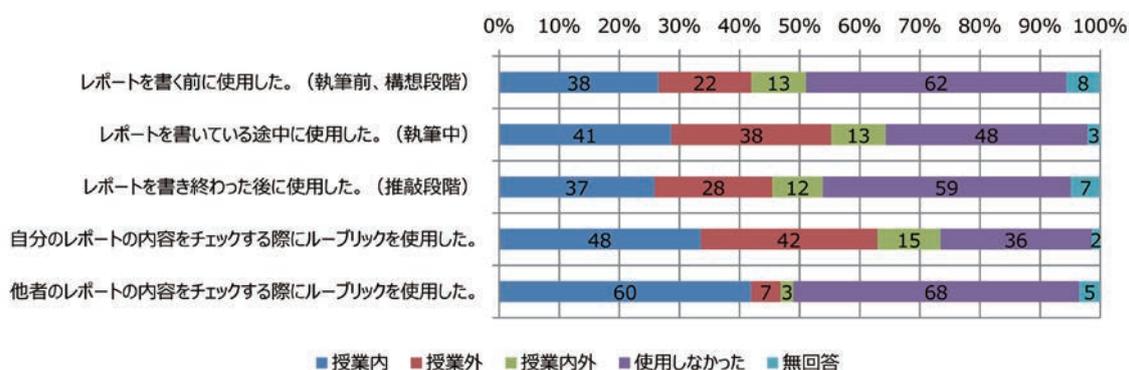


図7 授業におけるルーブリックの使用状況 (秋学期) N=144

図7は、授業におけるルーブリックの使用状況である。学生の自己評価に焦点をあてたルーブリックであることから、「自分のレポートの内容をチェックする際にルーブリックを使用した」割合が60%を越えた。

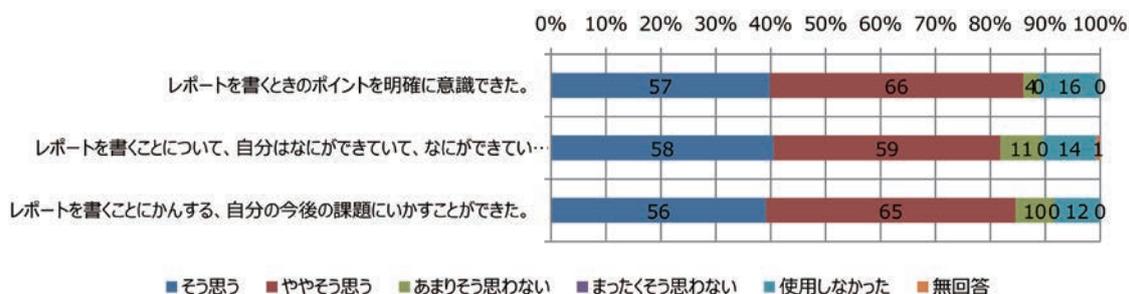


図8 授業の課題でのルーブリック使用の感想（秋学期）N=144

授業の課題でルーブリックを使用した際の感想の結果を、図8に示す。結果は、各設問において、「そう思う」「ややそう思う」の肯定的な回答をした学生が80%を上回った。ルーブリックを使用した際に感じたこと、良かった点や悪かった点、使いづらかった点などについてたずねた自由記述（原文ママ）を図3の設問にしたがって分類すると、以下ようになる。

### (1) レポートを書くときのポイントを明確に意識できた

#### 【良かった点】

- ・学術的な作法や日本語の表現の部分でどれが特に大事ななどが分かりやすかった。
- ・いくつか項目分けがされていて、どの部分が自分のレポートには不足しているかが分かりやすかった。

#### 【悪かった点、使いづらかった点】

- ・(3)の“文章全体の構成ができていない”というのはレポートの形に文章が書かれていない、という意味なのか、序論、本論、結論が大きく欠ける（1つしかない）ということなのか、3つの内容は書いてあるけどレポートの形になっていない人の評価をするときに少し気になりました。
- ・学術的な作法と日本語の表現は詳しく評価が分かれているのに、それ以外は少しあいまいではないかと感じた。

### (2) レポートを書くことについて、自分はなにができていて、なにができていなかったのかという点を把握できた

#### 【良かった点】

- ・レポートを書く際にどのようなところに注意すればよいか分かった。自分のレポートに何が足りていないかが分かり、今後どのようにレポートを仕上げていけばよいか分かった。
- ・コメントをもらえるのがすごくよかったです。どこができていてどこを改善すべきなのかなどがきちんとわかって使いやすかったです。

### (3) レポートを書くことにかんする、自分の今後の課題にいかすことができた

#### 【良かった点】

- ・骨子を作成する段階、実際に文字をwordで打ち込んでいる最中、作成後の見直しのすべての場面でこれを参照しつつレポートを作成した。授業で指摘のあったポイントが反映されているので非常に使いやすかったと感じる。今後もレポート課題の時にこれを手元に置いて作成したい。
- ・どこを改善すればより良いレポートになるかが分かり参考になりました。ラボに相談した場合も「この評価基準に達しているか見て下さい」とお願いできるため役立ちました。保管しておき、他のレポート執筆の際にも活用しようと思います。

#### 【悪かった点、使いづらかった点】

- ・直し方をどうしようかと考えながら使うときにルーブリックを使うと、混乱を招くことがあったので、「どう直したらいいか」も書いてほしかったです。

ループリックの利用シーンとして、「学生自身による学修成果物の評価」に焦点をあて、より具体的な記述を目指した結果、(1)において、「学術的な作法や日本語の表現の部分でどれが特に大事かなどが分かりやすかった」などの感想が見られる一方、「学術的な作法と日本語の表現は詳しく評価が分かれているのに、それ以外は少しあいまいではないかと感じた」をはじめ、より具体的な内容の列挙を望む声も散見された。

どこまで具体的な記述にするか、という点については、開発の際に議論を重ねていたことでもある。議論の結果、より汎用性のあるループリックを目指すため、具体化する項目は最小限にとどめる一方、個々の詳細については、ラボ発行『レポートの書き方ガイド』（基礎篇、入門篇、発展篇）を参照するよう提示することにした。(2)における「コメントをもらえるのがすごくよかったです」などの意見は、改善点として、コメント欄を設け、自己チェックの他、ピア評価で使用したことが反映された結果と言える。

### 3.3. 〈考え、表現し、発信する力〉をめぐる指標の運用

〈考え、表現し、発信する力〉をめぐる指標として2014年度開発したプレゼンテーション・ループリックを、複数の授業クラスにおいて本格的に運用し、その内容の分析を行った[6]。運用クラス数は、春学期は、学部専門科目および統合科目群を中心に、24クラス（1年次12クラス、2年次13クラス）である。なお、24クラス中、ライティングラボ主体の運用は3クラスと数が少ないことから、詳しいアンケート結果については割愛する。

運用クラスの特徴として、レポートとプレゼンテーションを併用していることが挙げられる[7]。文学部「知のナビゲーター」の授業全15回の配分は、レポート3回、プレゼンテーション3回、その他（テーマの設定や資料の調査・読解方法など）9回である。社会安全学部「入門演習」の全15回の配分は、レポート1回、プレゼンテーション3回、その他（テーマの設定や資料の調査・読解方法など）11回であるが、ライティング・ループリックを使用するレポート提出が3回設定されている。社会安全学部「基礎演習」の全15回の配分は、レポートおよびプレゼンテーション8回、その他（ディベートなど）7回である。

なお、〈考え、表現し、発信する力〉をめぐる指標として、関西大学と津田塾大学が共同してライティングセンターループリックを開発した。詳細は、「5. 評価指標の開発：両大学による共同開発事例」を参照されたい。

### 3.4. 社会連携の事例①：「考動力」作文コンテスト

本年度実施の「考動力」作文コンテストでは、1次審査、2次審査、最終審査の各段階においてループリックを使用した。コンテストの概要は、「IV 関西大学ライティングラボの取組」の「7. 高大連携事業：考動力作文コンテスト」に紹介しているとおりであるが、計36名（教員・研究員9名、事務職員3名、ラボTA24名）が審査を行うにあたり、ループリックによる客観的な指標を提示した。観点は、昨年度の審査基準をもとに、募集要項に掲載した小論文とショートショートの基準と、新たに開発したループリックを参考にした。なお、審査ループリックは、伊丹市教育委員会と共有した。

各審査段階にあわせて、主に観点を中心にループリックを更新したため、審査者の負担を減らすとともに、段階的な審査が可能となった。第2次選考の小論文部門のループリックを図9に示す。

観点	見るポイント	1	3	5
① 資料の取り扱い	自分の意見に関連する資料を選択し、十分な検討をまとめてられているか	<ul style="list-style-type: none"> <li>資料にかんする記述がある</li> <li>自分の意見と取り上げられている資料との関連が分かりづらい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>資料にかんする記述がある</li> <li>自分の意見に関連する資料が選択できている</li> </ul>	自分の意見について、賛成／反対などの複数の立場からの資料をもとに検討している

観点	見るポイント	1	3	5
② 自分の意見	文章において何をもっとも言いたいことなのか明確に示されている	自分の意見が複数提示されており、どれがもっとも述べたいことなのか分かりづらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>文章において何をもっとも言いたいことなのか明確に示されている</li> <li>自分の意見が、自らの体験や身の回りの出来事に基づいて述べられている箇所がある</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>文章において何をもっとも言いたいことなのか明確に示されている</li> <li>自分の意見が、自らの体験や身の回りの出来事に基づいて述べられていない</li> </ul>

図9 「考動力」作文コンテスト第2次選考ルーブリック（小論文部門）

### 3.5. 社会連携の事例②：関西大学高等部卒業研究

併設校である関西大学高等部では、「課題を自ら発見し、解決のために自力で探究し解答に迫ってゆく」プロジェクト学習のひとつとして、「卒業研究」を実施している。2年生の論文作成にかんするルーブリックを、高等部の担当教員へのヒアリングおよび研究開発担当教員2名と合議を行い、開発した。開発にあたり、ラボ発行『レポートの書き方ガイド』（基礎篇、発展篇）の参照を明示するとともに、用語の説明を付記した。

開発したルーブリックを図10に示す。

評価の観点	評価の観点の説明	がんばろう！	優秀までもう一步	優秀
①文献の参照	自分の意見と関連する文献を参照しているか	<ul style="list-style-type: none"> <li>文献を参照していない（文献を参照していることが文章にあらわれていない）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の意見と文献の意見との関連が分かりづらい</li> <li>文献を参照していることが文章にあらわれている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の意見と文献の意見が区別できている</li> <li>自分の意見と関係のある文献を参考にできている</li> </ul>
②文章の内容	文章において、何をもっとも言いたいことなのか整理され、明確に示されているか	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の意見が提示されていない</li> <li>他者の意見（文献）をそのまま提示している</li> <li>自分の意見が論理的に組み立てられていない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の意見が複数提示されているが、どれがもっとも述べたいことなのか分かりづらい</li> <li>自分の意見が、自らの体験や身の回りの出来事だけに基づくなど、他者の意見が欠けている箇所がある</li> <li>自分の意見について、論理的な組み立てが分かりづらい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>文章において何をもっとも言いたいことなのか明確に示されている</li> <li>自分の意見が、自らの体験や身の回りの出来事の他に、他者の意見を参考に述べられている</li> <li>自分の意見が論理的に組み立てられている</li> </ul>
③文章の形式	文章全体の構成が整っているか	<ul style="list-style-type: none"> <li>文章全体の構成ができていない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>序論・本論・結論（今後の展望を含む）に書くべき内容のいずれかが欠けている</li> <li>序論で取り上げている問題に対する答えが結論に示されていない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>序論・本論・結論（今後の展望を含む）に書くべき内容が提示されている</li> <li>序論で取り上げている問題に対する答えが結論に示されている</li> </ul>

評価の観点	評価の観点の説明	がんばろう!	優秀までもう一步	優秀
④学術的な作法	引用のルールや図表の示し方など、学術的な文章として適切な作法が守られているか	・満たしている項目が、3項目以下である	・満たしている項目が、5項目以下である	・すべての項目を満たしている
⑤日本語の表現	日本語の文章として、表現・表記が適切であるか	・満たしている項目が、3項目以下である	・満たしている項目が、5項目以下である	・すべての項目を満たしている
⑥提出前のチェック	提出前に必ずチェックするもの	・最後にもう一度、論文を読み直していない	・最後にもう一度、論文を途中まで読み直した ・もっとも言いたいこと(内容)と論文タイトルが合っていない ・指定されたフォーマット(フォント・文字数・行数・余白)で書かれていない ・目次のページ番号の縦列がずれている	・最後にもう一度、論文を読み直した ・もっとも言いたいこと(内容)と論文タイトルが合っている ・指定されたフォーマット(フォント・文字数・行数・余白)で書かれている ・目次のページ番号の縦列がずれていない

#### ④学術的な作法

1. 参考文献が正しく書けている (ガイド〔基礎篇〕 p35)
2. 引用のルールは適切である (ガイド〔基礎篇〕 p36)
3. 自分の意見と他者の意見がはっきりと区別できている
4. グラフや表に見出しが付けられている (ガイド〔基礎篇〕 p33)
5. 図表の中に凡例がある (ガイド〔基礎篇〕 p32)
6. グラフや表を引用したものである場合、出典を明示している (ガイド〔基礎篇〕 p39)

#### ⑤日本語の表現

1. 誤字脱字はない
2. 文体は適切であり、統一されている (～である調)
3. 話し言葉になっていない (ガイド〔発展篇〕 p24)
4. 長すぎる文がない (ガイド〔基礎篇〕 p20)
5. 文末表現は適切である (ガイド〔基礎篇〕 p22、ガイド〔発展篇〕 p26)
6. 段落始めは、一文字下げられている

#### 【用語の説明】

文献とは：本、雑誌記事、論文、ネット情報など、公表された他者の意見を指す。ネット情報は、執筆者・機関・執筆年月日が明らかなものを用い、wikipedia (孫引き) や質問サイト (例 Yahoo! 知恵袋) などは用いないこと。

論理的とは：「なぜ、そう言えるのか」を示すための、事実や前提が明らかであることを指す。話の展開が、主張と根拠、原因と結果など、誰が見ても、同じように判断できる筋道・順序を経ていること。

序論とは：自分がこれから何について書こうとしているのか、また、どうしてそれについて書こうと思ったのかについて示す部分。問題の提起や、問い、論点を示す。

本論とは：結論に至るまでの考えや、証拠となる他者の意見 (文献) を示す部分。

結論とは：序論で示したテーマにたいして、本論をとおして述べたことを整理して、最終的にもう一度自分の言いたいことをまとめる部分。問題の解決や、答えを示す。

今後の展望とは：この論文では書ききれなかったこと、調べられなかったことなどについて示す。

図 10 関西大学高等部・論文作成にかんする自己評価のためのルーブリック

### 3.6. FD 活動

2012 年中教審答申以降、大学におけるルーブリックの導入は喫緊の課題である。そこで、ラボを中心に、ルーブリックに関する各種 FD を開催し、その知見を広く学内に発信するとともに、学部・学科の執行部、そして授業担当者への積極的な情報提供や協力関係を構築していった。開発したルーブリックの学内運用にむけて、2015 年 1 月より、FD 活動でのルーブリック説明を実施した。

## 4. 評価指標の開発と検証：津田塾大学の事例

### 4.1. 〈書く力〉をめぐる評価指標の開発・検証

#### 4.1.1. 英語ライティング・ルーブリック

津田塾大学では、アメリカ文化コースのゼミを対象に、英語ライティング・ルーブリックを開発し、6 クラス（3 年次）で運用した。当該ゼミは、3 名の教員が前期・後期で異なるクラスを担当することで、コースの学生全体の学修状況を把握できるようなシステムとなっている。

開発は、リサーチペーパーの基本を習得し、留学時の課題に対応できる基本を身につけることを目標に、担当教員が行った。ルーブリックは、各項目の内容を一文としてまとめるのではなく、リスト形式とした。

観点	A素晴らしい	Bもう少し	Cもっと頑張ろう
準備段階	<input type="checkbox"/> 課題の要件を十分に理解している（ワード数、必要な参考文献、締切日、スタイル等）。 <input type="checkbox"/> アウトラインができている。 <input type="checkbox"/> 十分な資料を集めている。 <input type="checkbox"/> 時間配分を計画的に行った。	<input type="checkbox"/> 課題の要件について、一部は理解しているが、理解不足な点もある。 <input type="checkbox"/> アウトラインはあるがもう少し工夫が必要。 <input type="checkbox"/> 資料の収集にもう少し努力が必要。 <input type="checkbox"/> 時間配分や計画にやや無理があった。	<input type="checkbox"/> 課題の要件を理解しておらず、要件を満たしているとは言えない。 <input type="checkbox"/> アウトラインがない。 <input type="checkbox"/> 資料収集ができていない。 <input type="checkbox"/> 計画性に乏しく、時間切れの状態課題に向き合ってしまった。
全体の構成	<input type="checkbox"/> ティーシスが明快に立てられている。 <input type="checkbox"/> 序論、本論、結論の構成がしっかりと立てられている。 <input type="checkbox"/> 全体のバランスがとれている。 <input type="checkbox"/> 先行研究を十分に渉猟している。	<input type="checkbox"/> ティーシスが明確になっていない。 <input type="checkbox"/> 序論、本論、結論等の構成が一部はできているがしっかりととは立てられていない。 <input type="checkbox"/> 全体のバランスに今ひとつの工夫が必要。 <input type="checkbox"/> 先行研究に少しは当たっている。	<input type="checkbox"/> ティーシスが提示されていない。 <input type="checkbox"/> 論文として構成が成立していない。 <input type="checkbox"/> 全体のバランスがとれていない。 <input type="checkbox"/> 先行研究にまったく言及していない。
資料の取り扱い	<input type="checkbox"/> 十分な文献や資料に当たっている。 <input type="checkbox"/> 一つの立場だけでなく、異なる立場の資料も収集し、紹介している。 <input type="checkbox"/> 英語の文献を十分に収集している。	<input type="checkbox"/> ある程度の文献には当たっているが、もう少し十分な資料が必要。 <input type="checkbox"/> 一つの立場の資料しか収集していない。 <input type="checkbox"/> 英語の文献をもう少し収集する必要がある。	<input type="checkbox"/> 十分な文献に当たっていない。 <input type="checkbox"/> 特定のサイトや文献のみに依拠し、そのサマリーのようにになっている。 <input type="checkbox"/> 日本語の文献しか収集していない。

観点	A素晴らしい	Bもう少し	Cもっと頑張ろう
英語表現力	<input type="checkbox"/> 読みやすい英文で書かれている。 <input type="checkbox"/> スムーズに内容を把握できる。 <input type="checkbox"/> 文法的な問題がない。	<input type="checkbox"/> ある程度読みやすい英文で書かれている。 <input type="checkbox"/> 内容を把握しにくい部分が多い。 <input type="checkbox"/> 時制の不一致など文法的な誤りや間違った英語の使い方がそれほど多くは見られない。	<input type="checkbox"/> 英文の意味を理解するのが困難である。 <input type="checkbox"/> 内容を把握しにくい。 <input type="checkbox"/> 文法的な誤りがある英文や綴りの間違いが多い。
英語論文を書くうえでの学術的作法	<input type="checkbox"/> パラフレーズの目的と方法を理解し、効果的に用いられている。 <input type="checkbox"/> 自分の意見をサポートするために効果的に引用が用いられている。 <input type="checkbox"/> パラグラフライティングができていない。 <input type="checkbox"/> 指定されたスタイルできちんと書かれている。	<input type="checkbox"/> パラフレーズの目的と方法が十分に理解できておらず、適切に用いられていない。 <input type="checkbox"/> 引用の仕方は理解しているが、効果的に行われてはいない。 <input type="checkbox"/> パラグラフはあるが、トピックセンテンスやコンクルーディングセンテンスがない。 <input type="checkbox"/> 指定されたスタイルで一部は書かれているが、記載の方法に問題が残っている。	<input type="checkbox"/> パラフレーズの目的と方法を全く理解していない。 <input type="checkbox"/> 引用の仕方を理解していない。 <input type="checkbox"/> 基本的なパラグラフライティングが出来ていない。 <input type="checkbox"/> 指定されたスタイルで書かれていない。 <input type="checkbox"/> 自分の言葉で書いていない。 <input type="checkbox"/> 読んだ文献の要約を繋いだようなペーパーとなっている。
内容の充実度	<input type="checkbox"/> 自分の意見や考察を説得的に論じている。	<input type="checkbox"/> 自分の意見や考察を書いているが、説得力にやや欠ける。	<input type="checkbox"/> 自分の意見や考察を書いていない。

図 11 英語ライティング・ルーブリック

ルーブリックを活用した結果、以下の成果があった。

- ・課題を通して、何を習得してもらいたいのか、教員は何を期待しているのか、学生に明確に伝えることができた。
- ・学生が習得できていない部分を具体的に示すことができた。
- ・ペーパーの評価・採点に役立っただけでなく、ルーブリックの改善案を話し合うことで教員間の連携、理解が強まり、教員間のコミュニケーションツールとして大いに役立った。

一方、今後の課題として、英文ペーパーを書く上での学術的作法を、さらにルーブリックで具体的に書きこんでいく必要性が指摘された。また、英語を書く力を身につけるためには、ルーブリックの活用だけでなく、英語のインプット、つまり読んだり聴いたりする機会を増やし、指導していくことの重要性も改めて確認した。

今後はさらに多くの専門科目でルーブリックを波及・活用していく計画である。

#### 4.1.2. 日本語ライティング・ルーブリック

正課科目としてライティングセンター特任教員が担当する「日本語ライティング Ab・Bb」においても、ルーブリックを作成した（図 12 参照）。この授業では、学生は①トピックの選定 ②資料収集 ③問いの設定 ④アウトラインの作成 ⑤執筆といったレポートを書くためのプロセスと、そのために必要なスキルを学び、期末レポートを作成する。ルーブリックは、この期末レポートの採点に用いる。

レポートを評価する観点は、「レポートの様式」「読みやすさ」「構成、内容」の3点である。たとえば、「読みやすさ」では、論証、パラグラフライティング、文章表現についての評価が反映されるよう、授業で学んだことが、レポートという成果物となった時にどの観点に表れるのかを示した。まだ採点時の利便性について検討している段階だが、評価語を改善し、次年度から本格的に活用して効果を検証したい。

評価の観点	1	2	3	4
レポートの様式 ・誤字脱字、文法 ・ルールに従う ▶引用、注、参考文献 リスト	誤字脱字、文法的な誤りが多い。決められた様式に従っていない。	誤字脱字、文法的な誤りがみられる。決められた様式に従っていないところがある。読者が参考文献を参照することが少し難しい。	誤字脱字がなく、文法的な誤りもほとんどない。よく推敲されている。決められた様式に従っている。読者が参考文献を参照できる。	3で要求されることに加え、全体的にミスがない。
読みやすさ ・論理性 ▶論証、パラグラフ・ ライティング、文章 表現	構文、言い回し、つながりの欠如により、文章が理解しにくい。	文の構造や言葉遣いが明瞭さを妨げることがある。文と文、パラグラフとパラグラフのつながりに改善が必要。	多少の難点はあるものの、日本語の文章として読みやすい。ミスが文章の理解を妨げない。文と文、パラグラフとパラグラフのつながりがわかりやすい。	3で要求されることに加え、日本語の文章としてミスがない。文章の流れがスムーズである。読者が書き手の論理についていける。
構成、内容 ・トピック、構成、書き 方、内容 ▶問い、アウトライン	・構成が不十分で内容に一貫性がない。 ・先行研究の分析が不十分である。 ・読者に十分な情報が与えられない。	・内容に一貫性がやや不十分なところがある。 ・内容に関するアイデアが欠落しているか不十分である。 ・トピックの分析のために構成の改善が必要である。	・トピックが適切で、一貫性がある。 ・アウトラインがはっきりしていて、アイデアが論理的に整理されている。 ・読者の注意をひく内容である。	・3で要求されることに加え、構成が大変優れている。 ・重要な問題やアイデアが提示されている。

図 12 日本語ライティング・ルーブリック

## 5. 評価指標の開発：両大学による共同開発事例

### 5.1. ライティングセンタールーブリックの開発

本取組では、ライティングをベースとした〈考え、表現し、発信する力〉の養成をめざしている。そこで、〈考え、表現し、発信する力〉をめぐる総合的な指標として、ライティングセンターによるライティング支援のためのルーブリックを開発している。

ライティングセンターが、ルーブリックを開発する意義としては、さまざまな学部や専門性を背景とした学生が、執筆プロセスにおけるあらゆる段階の文章を持って訪れる施設であることが挙げられる。そのため、蓄積される文章の種類も多く、より汎用的なルーブリックを開発することが可能である。また、レポートを課す授業担当教員に共通する悩みとして、「良い文章とはなにか」というものがあるが、ライティングを支援する施設として、その問いにも一定の回答を提示することができると考えられる。

開発にあたっては、両大学の特任教員5名が、10月から2週間に1度のペースでTV会議システムを用いた会議を行っている（2016年2月末時点）。

まず、「ライティングセンターを訪れる学生に求める（期待する）点」および「ライティングセンターにおける支援で大切にしている点」について認識の共有をはかった。その結果、ライティングセンターは、「学生に書く力をつけさせるだけの場所ではなく、広く学修全般にむけての意識を変える契機としてほしい場所」であり、「ライティングにおけるプロセスの支援」の場であることから、ライティングにおけるテクニカルな側面のみならず、学生の意識の変化も視野に入れたルーブリックにすることが望ましいのではないかという議論が行われた。

そこで、利用シーンとして、支援を行うスタッフおよび相談に訪れた学生が、セッションの前後で、学修成果（物）

を振り返り、その後のライティング活動の指針とすることを想定した。

以上の共有を経て、現在、ルーブリックを作成している。当該ルーブリックは3月の完成をめざし、次年度のライティングセンターにおけるセッションでの使用を予定している。

## 6. シンポジウム・FD 活動

---

取組4年目の連携のシンポジウムはルーブリックをテーマに「大学教育における『書く力』 どう測る どう伸ばす——ルーブリックの活用と課題——」を9月12日に開催した。両大学の実践事例を報告するとともに、大阪大学教育学習支援センター副センター長である佐藤浩章氏、株式会社朝日新聞社東京本社人事部主査（現在、長野総局総局長）である藪塚謙一氏を講師に迎え、ライティング支援にかんするルーブリック評価の実際について意見交換を行った。（詳細は、「Ⅷ シンポジウム報告」を参照）

また、関西大学と津田塾大学におけるルーブリックの開発、そして運用によって明らかとなった改善点については、部会および9月のシンポジウムで共有し、検討を行った。

## 7. TEC-system 上での展開

---

本取組で開発した TEC-system の機能は、ライティングセンター運用システムである TEC-book と、e ポートフォリオシステムである TEC-folio に分けられる。TEC-folio の特徴として、ルーブリックによる自己評価と他者評価を、メンターとのコミュニケーションを通して容易に行えることが挙げられる。システムにはあらかじめサンプルルーブリックが用意されており、ユーザはこれを元に新たなルーブリックを作成し、また他の学習者・指導者間でそのルーブリックを共有することができる。（詳細は、「Ⅵ e ポートフォリオシステム開発部会の取組」および当該取組「2.1.4. ルーブリック」を参照）

ルーブリックの蓄積・公開は、シカゴ市教育局の「ルーブリック・バンク（The Rubric Bank）」などが先駆けとなり [8]、日本では現在、日本高等教育開発協会のルーブリックバンクが広がりを見せている [9]。このようなルーブリック・リポジトリにかんする教育的要請のもと、現在、関西大学および津田塾大学で開発したルーブリックを、オンラインストレージサービス上に共有・蓄積しているが、完成したルーブリックは、順次、TEC-folio に搭載し、利用者に広く提供することを計画している。本取組において TEC-folio に搭載されることの最大の特徴は、システム上でルーブリックを蓄積・共有するのみならず、そのルーブリックで学修成果物を評価し、かつ、その結果を一覧できることである。これにより、ルーブリックにかんする教員へのヒアリングで明らかとなった、「論証型レポートだけでなく、他のタイプのレポートのルーブリックがほしい」という要望にも応えることができると同時に、ルーブリックを、担当クラス用にカスタマイズして使用することも容易となる。

## 8. 次年度に向けて

---

本年度は、〈書く力〉をめぐる評価指標、自己評価指標、〈考え、表現し、発信する力〉をめぐる指標、の計3種のルーブリックの開発・運用・改善を行った。

最終年度である次年度の活動については、冒頭に挙げた本取組における3つの目標を達成するために、次の2点を中心に取り組む予定である。

1つ目は、授業での全学的な運用である。現在、複数クラスでの運用を経、また両大学で開発したルーブリックを共有することで、より汎用性のあるコモンスルーブリックを提供できるようになった。そこで、ラボ/センターを中心とした全学的な展開を目指し、学部執行部などへの積極的な説明および、共通教養科目の次年度担当教員

へのルーブリックの活用を呼び掛ける広報活動を行う。

2つ目は、他大学にむけての公開である。全国的にライティングセンター設立の動きが活発化している。本取組の特徴として、ラボ／センターを主体としたルーブリック導入が挙げられる。3月完成のライティングセンタールーブリックを、次年度よりラボ／センターで運用・分析・改善を行う。この完成により、ライティングセンターが目指すものはなにか、という、ライティングセンター運営におけるひとつのモデル・指針を提示することができるだろう。また、TEC-system への搭載によって、他大学への普及も目指すものである。

#### 〈参考資料〉

- [1] 田中耕治 (2003) 『教育評価の未来を拓く―目標に準拠した評価の現状・課題・展望―』、ミネルヴァ書房
- [2] Stevens, D.D., Levi, A.J. (2012) “Introduction to Rubrics : An Assessment Tool to Save Grading Time, Convey Effective Feedback, and Promote Student Learning”, Stylus Publishing. (ダネル・スティーブンス、アントニア・レビ 佐藤浩章 監訳 (2014) 『大学教員のためのルーブリック評価入門』、玉川大学出版部)
- [3] 濱名篤 (2012) 「ルーブリックを活用したアセスメント」、『中央教育審議会高等学校教育部会』、[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/\\_icsFiles/afieldfile/2012/12/07/1328509\\_05.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/_icsFiles/afieldfile/2012/12/07/1328509_05.pdf) (2014/12/01)
- [4] 中央教育審議会 (2012) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて (答申)」、[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf) (2014/12/26)
- [5] 開発した日本語ライティング・ルーブリックは、本取組『〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援 2014 (平成 26) 年度報告書』 pp.101-102 より再掲。
- [6] 開発したプレゼンテーション・ルーブリックは、2014 年度報告書 [5] pp.104-105 を参照。
- [7] 社会安全学部統合科目群「入門演習」「基礎演習」で使用したライティング・ルーブリックは、2014 年度報告書 [5] pp.102-103 を参照。
- [8] 安藤輝次 (2008) 「一般的ルーブリックの必要性」(『奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要』17、pp.1-10) にて紹介。[http://intranet.cps.k12.il.us/Assessments/Ideas\\_and\\_Rubrics/Rubric\\_Bank/Use\\_the\\_Bank/use\\_the\\_bank.html](http://intranet.cps.k12.il.us/Assessments/Ideas_and_Rubrics/Rubric_Bank/Use_the_Bank/use_the_bank.html) (2016/2/10)
- [9] JAED ルーブリックバンク、<http://jaed.jp/rubric/> (2016/2/10)



# 研究成果報告

本章では、取組に関連して行なわれ、研究会で発表された研究成果5件を紹介する。

1. SPOD(四国地区大学教職員能力開発ネットワーク)フォーラム 2015
2. 教育システム情報学会 第40回全国大会
3. 日本教育工学会 第31回全国大会
4. 関西大学FDフォーラム・大学教育学会課題研究  
「学士課程教育における共通教育の質保証」合同企画FD
5. 電子情報通信学会 ライフインテリジェンスとオフィス情報システム研究会

## 1. SPOD (四国地区大学教職員能力開発ネットワーク) フォーラム 2015

開催日時	2015年8月26日～28日
会場	愛媛大学城北キャンパス
発表者	西浦真喜子、小林至道、毛利美穂（関西大学）

### 概要

SPODは、「四国地区の32の国公立大学・短期大学・高等専門学校によって構成され、質の高い教育を提供するため、加盟校が協力・連携して、教職員の能力開発（FD・SD）につとめる（SPODのウェブサイトより抜粋）」ことを目的として設置されている。2015年度のフォーラムのテーマ「学びの成果をどう可視化するか？」にもとづき、関西大学からは、「ライティングセンターを核とした学習成果の可視化というタイトルでポスター発表を行った。ライティングラボでの支援内容や支援ツールの紹介を中心に関西大学での取組を報告し、ライティングセンターや学習支援機関にかかわる大学教職員とセンターの運営にかんして質疑応答を行った。なお、発表内容は次ページの資料を参照されたい。

# ライティングセンターを核とした学習成果の可視化

西浦真喜子・小林至道・毛利美穂（関西大学教育推進部）

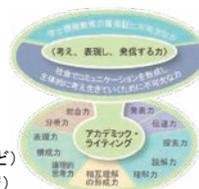
nisiura@kansai-u.ac.jp

**本発表の概要**：大学間連携共同教育推進事業（考え、表現し、発信する力）を培うライティング／キャリア支援のなかで、ライティングセンターを中心に、関西大学が行っている「学習成果を可視化する仕組み」を紹介する

## 1. 平成24年度文部科学省採択 大学間連携共同教育推進事業（連携校：津田塾大学）

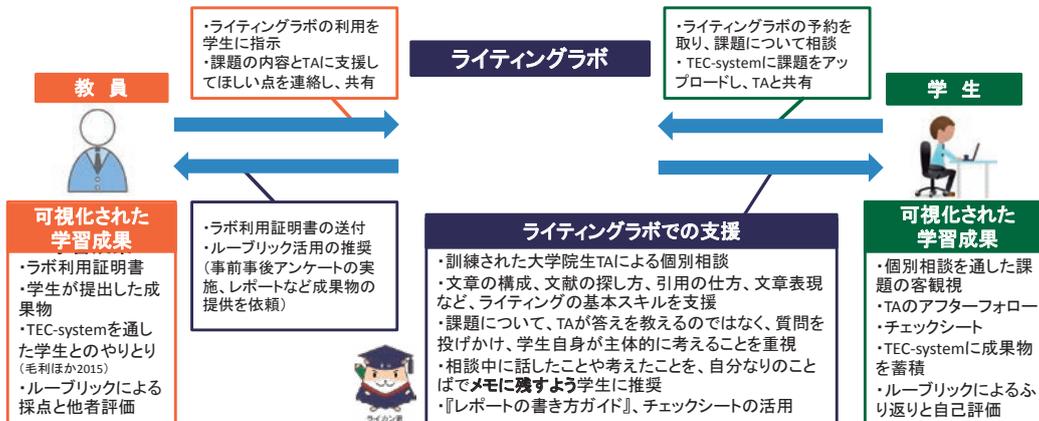
【本連携事業：〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援の5つの柱】

- ①ライティングセンターを中心とした支援体制の再構築：ライティングラボ（関西大学）の運営体制の充実化
- ②eポートフォリオシステムの開発：ライティング／キャリア支援のための多様な機能を備えたTEC-systemの開発
- ③評価指標の開発：ライティング、自己評価、〈考え、表現し、発信する力〉のルーブリック開発と活用
- ④カリキュラムとの連携：教員によるライティングラボの利用指示、授業における出張講座（例 ラボ利用ガイダンスなど）
- ⑤社会との連携：高大連携、社会連携の推進（例 大学生向け講演会、高校生向け講座、作文コンテストの企画・開催）



本連携事業の目的（1）主体的学びの確立による大学教育の質的転換  
 （2）主体的に考えると同時にコミュニケーションを形成・深化しうる人材の育成  
 ⇒ライティングラボを中心に学生の「学習成果を可視化する仕組み」を整備する

## 2. ライティングラボを核とした学習成果を可視化する仕組み



⇒学習過程を可視化することで学生の主体的学びを促進し、学習成果をより充実したものにするを目指す

## 3. ライティングラボが開発した学習成果を可視化する支援ツール

支援ツール	可視化の流れ	内容の詳細
レポートの書き方ガイド	教員⇄ラボ⇄学生	レポートの書き方についての要点を30～40ページ程度でまとめたA5版の冊子。ライティングにかんする学習成果を可視化するうえで基本テキストとして、ラボでの個別相談や授業で活用されている
チェックシート	ラボ⇄学生	レポートの書き方について、どのように書き進めれば良いかを段階的に示したもので、学生が「何ができていて何ができていないか」、また、「今後何をしたら良いか」を確認できる
アフターフォローメール	ラボ⇄学生	ラボでの相談後に、TEC-systemを通して、TAが学生にアフターフォローのコメントを送信。コメントには、ラボでの相談の「おさらい」を書くTAが多く、学生にとって相談内容や課題を進めるポイントを思い出す手がかりとなる
ラボ利用証明書	ラボ⇄教員	ラボでの相談日時やTAが支援した点など、学生の相談時の状況について記載したもの。教員は、利用指示を出した学生が、「ラボでどのような支援を受けたか」を確認できる
TEC-system	ラボ⇄学生⇄教員	個人学習、授業科目、課外活動など、大学における学生の多様な学習活動を可視化したeポートフォリオシステム。ラボで相談した文書ならびに授業の成果物が蓄積され、学生はシステム上でルーブリックによるふり返りと自己評価を行うことができる
ルーブリック	ラボ⇄教員⇄学生	学生の学習成果を可視化することができる評価ツール。学習目標を、観点、尺度、評価語で明確化し、教員および学生自身がルーブリックを用いて課題を評価することで、目標をどの程度達成できたか確認できる

⇒カリキュラムとライティングラボの有機的な連携を目指し、現在、支援ツールの効果検証を進めている

## 2. 教育システム情報学会 第40回全国大会

---

開催日時	2015年9月1日～3日
会場	徳島大学
発表者	稲葉利江子（津田塾大学） 小林至道、毛利美穂、長畑俊朗、森田弘一、本村康哲（関西大学）

### 概要

本取組で開発した TEC-system の TEC-folio 部分について、当学会にてポスター発表を行った。発表内容の詳細については、次ページの添付資料を参考されたい。

発表当日は、参加者との間で活発な議論が行われた。特に、次の2点については、多くの関心が寄せられ、質疑応答を重点的に行うことができた。1) TEC-folio の開発プロセスにおいて、人間中心設計に基づき、学生の行動観察調査、関係者のヒアリング、インサイトの分析を経てシステム設計をどのように進めていったのかという点、2) TEC-folio を実際に利用するシーンにおいて、設計プロセスでの検討事項がどのような機能として反映されているのかという点。

## ユーザ行動に基づいた学習ポートフォリオシステムの設計

稲葉利江子<sup>1</sup> 小林至道<sup>2</sup> 毛利美穂<sup>2</sup> 長畑俊朗<sup>2</sup> 森田弘一<sup>2</sup> 本村康哲<sup>2</sup>  
<sup>1</sup>津田塾大学 <sup>2</sup>関西大学

### 背景&目的

- ・ 関西大学と津田塾大学では、**<考え、表現し、発信する力>**を培うライティング/キャリア支援を目的としたeポートフォリオシステム“TEC-folio”を協同で開発
- ・ **人間中心設計**に基づき、学生の**行動観察調査**、関係者の**ヒアリング**を行い、「典型的な学生像」を分析し、21個のインサイトから、システム設計を行った

### システム概要

#### 多様なシーンで学びをサポートするシステム

- ・ 個人学習、授業科目、課外活動など学生生活全般において学びのシーンをサポートする学習ポートフォリオシステム“TEC-folio”
- ・ 学生は、「目標設定」→「学習」→「評価」→「振り返り」→「発信」により内省

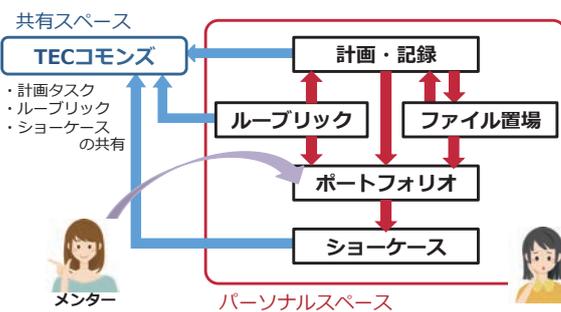


#### 大学での学習場面を想定したMyスペース

- ① **Myテーマ**  
語学、資格取得、就職活動など個人の目標達成に向けた活動に焦点を当てた任意のテーマ
- ② **課外活動**  
サークルなどのコミュニティ・グループ単位での目標達成に向けた活動の任意のテーマ
- ③ **授業科目**  
学事データベースと連携し、授業の成果物を蓄積することで振り返りを促すテーマ
- ④ **学内施設**  
ライティングを行う場面が想定される学内施設との連携を視野に入れたテーマ



### 学生の内省の流れ



#### ◆ TEC Commons

他者の学習経験を知り、自己の活動に取り入れるコミュニケーションの誘発を目的とし、各ユーザが作成したルーブリック、ショーケースなどを共有するスペース

#### ① 計画と記録

- ・ 目標に向け、マイルストーンを設定し、それぞれに成果を記録
- ・ グループでのピアレビュー機能

#### ② ファイル置場

- ・ テーマごとの成果物や資料等を蓄積
- ・ 書籍、論文などの文献の書誌情報の共有

#### ③ ポートフォリオ

- ・ 目標ごとの振り返りを行い、ルーブリックなどを用いた自己評価を行う
- ・ メンターを選定し、他者評価を行う

#### ④ ショーケース

- ・ ポートフォリオにカバーレターを付与し、公開範囲を指定した上で共有する機能

#### ⑤ ルーブリック

- ・ ユーザが容易にルーブリックを作成し、評価可能な機能
- ・ 作成したルーブリックの共有

### まとめ&今後の予定

- ・ 学生の成果外活動も含んだ学習行動の蓄積を可能とし、他者とのコミュニケーション行動を考慮に入れた学習ポートフォリオの設計を行った
- ・ 提案システムの実装後、ユーザ評価を実施し、繰り返し改善を行いながらシステム開発を進める
- ・ **H28年度以降、オープンソース化を行い、他大学での普及・利用を展開する予定**

### 3. 日本教育工学会 第31回全国大会

開催日時	2015年9月21日～23日
会場	電気通信大学
発表者	毛利美穂、小林至道、長畑俊郎、森田弘一、西浦真喜子、本村康哲（関西大学） 稲葉利江子（津田塾大学） 森村淳（株式会社システムサポート）

#### 概要

本取組で開発した TEC-system の TEC-book 部分について、当学会にてポスター発表を行った。発表内容の詳細については、添付資料を参考されたい。

TEC-book は、汎用性のあるライティング支援体制の構築を目指して設計された、ライティングセンターの運営を支援するシステムである。発表当日は、ライティングセンターの設置している、もしくは設置を検討している参加者との間で活発な議論が行われた。多くの関心が寄せられたのは、ライティングセンターを設置する上での課題点、特に、(1) 予算面と (2) チューターと相談者とのマッチング面を、システムによってどのように解消できるか、という点である。(1) にかんしては運営統計の機能、(2) にかんしては予約管理の機能など、具体的な運用事例とともに提示した。

■添付資料：JSET 発表ポスター

## ライティングセンター運営支援システムの設計と運用

毛利美穂<sup>1</sup> 小林至道<sup>1</sup> 稲葉利江子<sup>2</sup> 長畑俊朗<sup>1</sup> 森田弘一<sup>1</sup> 森村淳<sup>3</sup> 西浦真喜子<sup>1</sup> 本村康哲<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>関西大学 <sup>2</sup>津田塾大学 <sup>3</sup>株式会社システムサポート  
 mohri@kansai-u.ac.jp

### 背景&目的

- ・ 関西大学と津田塾大学は、<考え、表現し、発信する力>を培うライティング／キャリア支援を目的としたライティングセンターを核とした支援体制の構築にあたり、センター包括的支援システム“TEC-book”を協同で開発
- ・ 関西大学で開発・運用していたシステムをベースに、ユーザ中心設計に基づき、システム設計を行った

### 日本のライティングセンターの運営の現状と課題

運営タスク	現状	課題
チューター配置	Excelで管理	運営管理者の負担が大きい
予約管理	用紙・メール・代替予約システムで受付	オーバーブッキングの可能性が生じる
指導履歴の蓄積と共有	紙ベース	チューター間での共有がリアルタイムでできないために、指導に一貫性が担保できない
運営統計	Excelで管理	リアルタイムでの詳細な分析に対応できない
施設展開	限られたスペースで運営	複数キャンパスがある場合は、複数のセンター展開に対応できない

➡ これらの課題に対して、“TEC-book”はシステム化による解決を目指す

### TEC-bookの特長

#### ステイクホルダーの行動とTEC-book運用の流れ



- ① 相談対象者
  - ・ 複数学部に対応
- ② 相談対応場所
  - ・ 複数ヶ所に対応
- ③ 学生による予約と履歴閲覧
  - ・ 学事情報との連携により、予約情報と履歴閲覧が可能
- ④ チューターによる履歴の共有
  - ・ 学生単位、チューター単位、科目単位で表示可能
- ⑤ 駆け込み対応
  - ・ 事前予約ができなかった学生の情報もシステム上に履歴を残すことが可能
- ⑥ 利用統計
  - ・ 任意の期間において、相談場所ごとにシフト単位で稼働率(相談件数/チューター数)の一覧が可能

#### 画面例



学生：予約画面



シフト管理

チューター



管理者：利用統計画面

### まとめ&今後の予定

- ・ 関西大学ライティングラボではH27年度春学期より導入し、津田塾大学ライティングセンターでは秋学期より導入を予定
- ・ 関西大学・津田塾大学という、文章の種類、チューターの管理、予約方法など、設置状況・背景が異なるセンターでの運用をとおり、繰り返し改善を行いながらシステム開発を進める
- ・ システムの多言語化を目標とする
- ・ **H28年度以降、オープンソース化を行い、他大学での普及・利用を展開する予定**

#### 4. 関西大学 FD フォーラム・大学教育学会課題研究 「学士課程教育における共通教育の質保証」 合同企画 FD

開催日時	2015年10月3日
会場	関西大学
発表者	毛利美穂、小林至道、西浦真喜子（関西大学）

##### 概要

本取組で開発したルーブリックの開発・運用およびその分析結果についてポスター発表を行った。発表内容の詳細については、添付資料を参考されたい。

発表当日は、ルーブリックを実践している参加者との間で活発な議論が行われた。なお、発表内容については、関西国際大学の濱名篤先生から以下のコメントをいただき、今後の開発・運用の参考とした。

##### 【濱名先生コメント】

- ・ 関西大の評価に学生自己評価、学生同士、教員の3方法を併用している点はユニークである。
- ・ 関西大ではなぜルーブリック提示が課題提示直前に行われているが、到達目標や記述語による対応が課題出題時に行って、定着・獲得していくのか？
- ・ 1年～4年までのルーブリックの一貫性はどのように保証されるのか？

■添付資料：JSET 発表ポスター

## 関西大学GPにおけるライティングルーブリックの開発と評価課題

毛利美穂・小林至道・西浦真喜子（関西大学教育推進部）  
mohri@kansai-u.ac.jp

**概要**：大学間連携共同教育推進事業（考え、表現し、発信する力）を培うライティング／キャリア支援のためのライティングルーブリックの開発とそこから見えてきた課題について紹介する。

### 平成24年度文部科学省採択 大学間連携共同教育推進事業（連携校：津田塾大学）

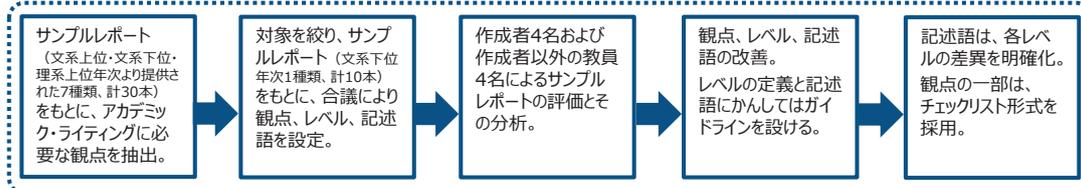
【本連携事業：〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援の5つの柱】

- ① **ライティングセンターを中心とした支援体制の再構築**：ライティングラボ（関西大学）の運営体制の充実化
- ② **eポートフォリオシステムの開発**：ライティング／キャリア支援のための多様な機能を備えたTEC-systemの開発
- ③ **評価指標の開発**：ライティング、自己評価、〈考え、表現し、発信する力〉のルーブリック開発と活用
- ④ **カリキュラムとの連携**：教員によるライティングラボの利用指示、授業における出張講座（例 ラボ利用ガイダンスなど）
- ⑤ **社会との連携**：高大連携、社会連携の推進（例 大学生向け講演会、高校生向け講座、作文コンテストの企画・開催）



**評価デザイン**：学士課程教育の質的転換と有為な人材育成のために欠かせない〈考え、表現し、発信する力〉の育成をめざし、ライティング力の向上を客観的に測る評価指標の作成・活用、および自己の学びをふりかえる自己評価指標の作成・活用を設定した。

### 開発および導入過程（2014年4月～現在）



**導入クラス** 共通教養科目、学部専門科目を中心に 計44クラス

※ルーブリックの使い方は教員に一任

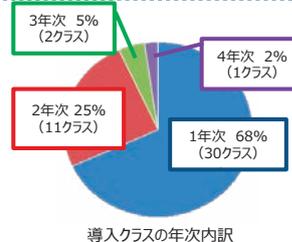
【ルーブリックの提示のタイミング】

- ① 授業内容がルーブリックの観点と重なる回
- ② レポート課題を学生に提示する回
- ③ レポート提出後に学生同士で推敲する回

【評価の方法】

- ① 学生の自己評価
- ② 学生同士のピア評価
- ③ 教員による評価

上記のいずれか、もしくは複数の方法で実施



導入クラスの年次内訳

### ルーブリックにかんする改善に向けての検討（学生へのアンケートと教員へのヒアリングの結果から）

【学生へのアンケート（自由記述）】

時期：第15回（7月）授業内

内容：ライティング力とルーブリックの使用について

対象：362名

回収率：62.2%（回収：225名）

※アンケートは、学期中に2回（プレ・ポスト）実施  
今回は、2回目（ポスト）のデータを使用

**自分のレポートの足りない部分とはどこのか、改善すべきとはどこのかがわかった**

- ・ ルーブリックに書いてある基準が抽象的で、自分がどうであるのか、できているのかが分かりにくい点。
- ・ 判断がもう少し細かい段階があつてほしかった。1～4では、2、3あたりが微妙だったため。
- ・ 1と4の違いがわかるが、2と3の微妙な違いがわからない。

**レポートを書くことにかんする、自分の今後の課題にいかすことができた**

- ・ 自分の書いている文章が合っているのが不安になったり困った時に読むと、具体的にこうしたいといけなないと自分で気づくことが出来たので、最初より成長したと思います。

【教員へのヒアリング】

時期：アンケート回収後（7～8月）

内容：実際にルーブリックを使用して感じた  
問題点と要望

対象：5名

**観点と尺度についての問題点**

- ・ 観点「学術的な作法」と「日本語の表現」がチェックリストになっていることは、とてもわかりやすかった。が、項目の重要度がフラットになっているので、実際には、重みづけが必要か。
- ・ 観点の「資料」がなにを示すのか、明確化が必要。

### 改善の結果（一部）

前	評価の観点	評価の観点の説明	1	2	3	4
	資料の取り扱い	資料に関して、その内容を適切に把握し、十分な検討をしておこなわれているか。	資料に関しての記述がない。	資料に関する記述はあるが、その内容を把握できておらず、まとめられていない。	資料に関して、その内容が把握できており、まとめられている。	資料に関して、その内容が把握できており、論に沿ってまとめられている。
後	資料の取り扱い	自分のレポートのテーマに関連する資料を選択し、十分な検討をしておこなわれているか。	がんばろう！	優秀までもう一歩	優秀	極めて優秀
	資料の取り扱い	自分のレポートのテーマに関連する資料を選択し、十分な検討をしておこなわれているか。	資料に関する記述がない。	資料に関する記述はあるが、自分のレポートのテーマに関連しない他者の記述を資料として取り扱っている。	自分のレポートのテーマに関連する他者の記述を資料として取り扱っている。	自分のレポートのテーマに沿った複数の他者の記述を取り上げ、自分の主張と関連付けて検討している。

## 5. 電子情報通信学会 ライフインテリジェンスとオフィス情報システム研究会

開催日時	2015年11月6日～7日
会場	神奈川大学横浜キャンパス
発表者	稲葉利江子（津田塾大学）、小林至道、毛利美穂、本村康哲（関西大学）

### 概要

電子情報通信学会 ライフインテリジェンスとオフィス情報システム研究会（情報セキュリティ研究会、情報と社会・倫理研究会共催）において、本取組で開発した TEC-system の概要と設計・開発プロセスについて、「ユーザ中心設計に基づいた学習ポートフォリオシステムの設計」と題し、第一著者である稲葉利江子（津田塾大学）が、招待講演者として報告を行った。

詳細は以下を参照。

稲葉利江子, 小林至道, 毛利美穂, 本村康哲, “ユーザ中心設計に基づいた学習ポートフォリオシステムの設計,” 電子情報通信学会技術研究報告, Vol.115, No.295, pp.19-24, 2015.

<http://ci.nii.ac.jp/naid/40020676700>

# XI

## 取組に対する評価と 今後の課題

「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」は、取組4年目を終えようとしている。平成24年10月の事業開始以来、両大学は密接な連携体制を築き上げ、当初の計画にしたがって、さまざまな取組を実施してきた。この間、本事業では、平成25・26年度末に、内部評価・外部評価を実施し、委員からの提言を参考にして、事業の改善を図ってきた。この評価体制は、本取組の問題点を析出・分析し、その改善につなげるために非常に有効に機能し、取組の質の向上に大きな役割を果たしてきた。この点は、文部科学省による中間評価においても、高く評価されている。

この章では、本年度の内部評価および外部評価の内容と、次年度の展開に向けての課題について報告する。

1. 前年度の評価に基づく今年度の取組の改善について
2. 内部評価
3. 外部評価
4. 次年度の展開に向けて

## 1. 前年度の評価に基づく今年度の取組の改善について

本年度（2015年度）の取組においては、昨年度（2014年度）に受けた提言に基づき、事業の改善を実施した。多くの提言については、今年度の取組に反映し、成果をあげることができたと考えている。以下、2014年度における内部評価と外部評価において受けた提言について、昨年度（2014年度）の取組報告書（第XIII章）に基づいて、論点をまとめたうえで、それぞれの提言に対して施した対処をまとめる。

### ライティングセンターでの支援について

#### 【提言】

- (1) 教員の理解を得るとともに、多数の学生が支援を利用できる環境作りが必要である
- (2) ライティングに対する学生の「経験と気づき」を促すべしである
- (3) 学生に対する敷居を低くし、主体的な準備を促すべきである
- (4) 社会に出た時にライティングスキルがいかに役立つか、ケースを想定した指導を実施する必要がある
- (5) 学生の文章力の向上と将来選択への影響についての学術的な省察が不足している
- (6) 指導者の育成方法を改善する必要がある

#### 【対処と改善】

ライティングセンターでの支援については、毎年、その内容を反省し、支援方法の改善を行っている。支援の環境作りについては、(1)にあるように、教員の理解を得たうえで、多数の学生が利用できる環境を整えることが重要であるが、これについては、学内への広報を充実させ、連携クラスの増大を行うとともに、支援場所の拡大と利用しやすい環境整備を実施してきた。その効果は、今年度も利用者が増加している点に表れていると考える。

指導方法については、(2)(3)(4)にあるように、学生の気づきを促し、主体的な学びにつなげることが重要であり、そのさい、社会でのライティングを視野に入れる必要がある。そのような支援を実現する指導は容易ではないが、両大学のライティングセンターでは、教員や学生のアンケート調査などに基づき、学生の主体的な学びの育成を視野に入れ、定期的にTA研修を実施して、指導方法の改善を目指している。そのさい、(6)指導者の育成方法の改善が欠かせないが、この点も、TA研修の方法をたえず反省し、より効果的な指導能力育成ができるように努力している。ただ、いまだ不十分な点があることは事実であり、引き続き、改善の努力をしていきたい。

また、(5)で指摘されているように、学術的な観点に立った調査と分析も不可欠であるが、これについては、現在、具体的なデータを収集・分析している段階であり、その一部は研究成果として学会発表などもしているが、引き続き、調査と分析をおこなっていく必要があると考えている。

### eポートフォリオシステムについて

#### 【提言】

- (7) 開発内容が曖昧であり、開発状況の報告などプロジェクトの進捗管理を改善する必要がある
- (8) 他大学への普及のまえに、両大学での導入を着実に進めるべきだ
- (9) オープンソース化するべきだ

#### 【対処と改善】

(7)については、情報公開の不足を率直に反省し、開発状況とプロジェクトの進行状況についての全体的な情報共有を心がけた。それにより、システムの開発は予定通りに進み、今年度よりすべてのシステムの活用が実現した。活用にあたっては、(8)にあるように、まずは両大学での導入が必要であり、今年度の試行的運用の成果をもとに、来年度は両大学での普及と利用者の増加を図りたい。また、eポートフォリオシステムは、目標とし

て全国の10程度の大学での活用をめざしているもので、(9)のオープンソース化を早期に実現することが重要である。これについても、すでにその準備を進めており、来年度の早い時期にオープンソースとして公開できる見込みである。

## 評価指標について

### 【提言】

- (10) 早期に導入して、改善していく必要がある
- (11) 学内での広報と情報共有が重要である
- (12) ルーブリックを、学生の力量を伸ばすために使うべきである
- (13) ルーブリックを、最終評価だけでなく途中段階での形成的評価に活用するべきである
- (14) 効果、つまりきやすい点、学生の教員の認識の差、形成的評価の役割等について、聞き取り調査を実施するべきである

### 【対処と改善】

評価指標（ルーブリック）をめぐる取組は、今年度、飛躍的に進展した。今年度の取組においては、提言（10）に基づき、学内への広報を早め実施して、春学期より授業での導入を積極的に進め、秋学期には、春学期の活用の反省に基づく改善を実施した。また、具体的な活用法においても、(12) (13) (14) の提言を参考に、教員の評価のためだけでなく、授業の中での自己評価や学生間での相互評価にも積極的に活用してもらい、データの収集に努めた。これによって、「自己評価指標」の整備を進めることができた。これについては、来年度から本格的な活用と改善を行う見込みである。また、教員や学生に対するアンケート調査を実施し、その効果等について分析を進めている。来年度は、聞き取り調査なども含めた、より広範な調査と分析を行っていきたい。

## 授業カリキュラムとの連携について

### 【提言】

- (15) 連携クラス以外の学生にも、積極的な活用の促進を図るべきである
- (16) 教員の理解を得る必要がある
- (17) アクティブ・ラーニングを促進すべきである

### 【対処と改善】

(15) については、全学的な広報の拡大に力を入れた。その結果、連携クラス以外にも、授業の中でライティングセンターを紹介し、その利用を指示してくれるクラスが増加している。また、(16) 教員への情報公開や教授会等を通しての協力依頼などにも力を入れており、教員による認知と理解も着実に広がっている。また、授業カリキュラムとの連携においては、(17) の提言に基づき、アクティブ・ラーニングの手法を取り入れているクラスとの連携を強化している。

## 社会との連携について

### 【提言】

- (18) 大学生の書く文章に関わりの深い組織や企業の意見を十分に汲み取れていない
- (19) 実社会の先輩の経験談から、学生自身がライティングの必要性を認識する機会を与えることが重要である
- (20) 高大連携事業に、より積極的に取り組むべきである

### 【対処と改善】

社会連携については、(18) 社会からの声を十分に汲み取れていないという意見が寄せられた。これについては、

今年度の取組は必ずしも十分なものとはいえなかったため、来年度に関連組織や企業からの意見聴取を実施するなどして、事業の改善につなげていきたい。(19)については、引き続き連携講演会やセミナーの実施などを通して、学生に社会でのライティングの必要性を認識してもらう機会を積極的に設けているが、そのような機会をさらに増やしていく努力が必要であろう。同様のことは(20)についてもいえる。今後も引き続き、高大連携事業の充実に努めたい。

## その他

### 【提言】

- (21) 取組成果を外部に発信する際には、研究調査を行う必要がある
- (22) 報告書とは別に、書籍の出版をするべきである

### 【対処と改善】

(21) は、提言(5)と共通するが、研究調査については、測定の観点、分析データの特定を行いつつ、学術的に有意義な調査を行い、学会発表等での公開を行っていきたい。

(22) については、重要な提言と受け止め、すでに出版に向けた検討と準備を進めている。今年度中に内容を固め、来年度に執筆・編集を行った後、取組支援期間終了後に出版する予定である。

## 2. 内部評価

### 内部評価の趣旨および実施方法

内部評価の目的は、関西大学および津田塾大学の実情をよく知り、本取組の趣旨を理解する、大学内部および取組内部の関係者(ステークホルダー)から、それぞれの視点と立場に基づいた具体的な提言を寄せてもらうことにある。今回の内部評価は、主として平成27年度取組内容を評価し、平成28年度の事業展開を見据えたうえで、実施体制の改善を図ることを目指して実施された。

内部評価は、下記のとおり、本取組の主体である関西大学および津田塾大学の実情をよく知る関係者、および本取組のステークホルダーの代表をお願いしている。

- ①山本雄二氏(関西大学社会学部)
- ②小館亮之氏(津田塾大学情報科学科)
- ③トム・ガリー氏(東京大学教授・The Writing Centers Association of Japan 代表)

委員には、平成28年1月18日に、本取組に関わる各種資料を送付し、資料に基づいて、平成27年度における本取組の内容に関して評価をいただくとともに、具体的な取り組みについて、問題点の指摘と改善に向けての提言をしていただいた。送付した資料は下記のとおりである。

- (I) 2014(平成26)年度 報告書
- (II) 2014(平成26)年度 内部評価・外部評価に基づく取組の改善
- (III) 2015(平成27)年度 取組報告(2015年4月～12月)
- (IV) 2015(平成27)年度 関西大学活動報告および資料(2015年4月～12月)
- (V) 2015(平成27)年度 津田塾大学活動報告および資料(2015年4月～12月)
- (VI) 2015(平成27)年度 教職員合同FD/SD研修会、TA合同研修会
- (VII) 2015(平成27)年度 シンポジウム報告
- (VIII) 中間評価(文部科学省)資料一式

以下では、各委員からの評価の内容を整理するとともに、本取組の問題点と、平成 28 年度の展開に向けて改善すべき課題を確認したい。

## 内部評価委員からの評価と提言

内部評価委員からは、本取組の 5 つの柱を中心に、さまざまな評価と提言が寄せられた。以下、評価と提言の論点を整理するとともに、次年度の課題を考えたい。

### 1. ライティングセンターでのライティング支援について

ライティングセンターでの支援体制の充実と、その成果については、山本委員と小館委員から評価をいただいた。小館委員からは、両大学ライティングセンターによって多様な活動の継続がなされている点、とりわけ、丁寧な TA 研修と、両大学におけるガイドブックの作成と授業連携などについて評価していただいた。また、山本委員からは、関西大学の総合図書館内でのラーニングcommonsでの支援の拡大、各種授業との連携の増加、ワンポイント講座の開催などがライティングラボの利用者の拡大につながり、その存在感を強めている点を評価していただいた。さらに、山本委員からは、昨年度の評価に引き続き、津田塾大学における講演会の意義について高い評価をいただいている。今後も、講演会については、両校で共同開催し、関西大学の学生にも、このような講演会に参加する機会を積極的に作っていききたい。

### 2. e ポートフォリオシステムについて

e ポートフォリオシステムについては、3 名の委員から意見が寄せられている。小館委員と山本委員は、両大学においてシステムが本格的稼働を開始した点を評価いただいた。ただし、ポートフォリオ部分の機能が実際のライティング支援や授業の中で本格的に活用されるのは、来年度以降となる。その効果はまだまだ不透明なものであり、山本委員の指摘にあるとおり、「学生が自分の文章力の問題点に気づき、改善し、発信力を高めるための機能が有効に働いているのか」について、十分な検証を行い、さらなるシステムの改善を図っていく必要があるだろう。さらに、小館委員とトム・ガリー委員からは、システムのオープンソース化についてのコメントがあった。小館委員は、昨年度の内部評価に従って、オープンソース化を決定したことを評価いただいた。小館委員が指摘しているように、このオープンソース化は、事業の波及のために欠かせないものであるため、来年度は、この点に注力していく必要がある。なお、オープンソース化にあたっては、トム・ガリー委員が指摘しているとおり、「長く続くと期待できる開発体制を確定」する必要がある。この点については、指摘にあるように、オープンソースソフトの成功事例を十分に研究し、参考にしていく必要がある。

### 3. 評価指標について

評価指標（ループリック）については、今年度、大きく進展しており、その点を小館委員から評価いただいている。もちろん、今後検討と改善を重ねていく部分があるのは当然のことであり、来年度は、その点に力を入れていく予定である。これについては、山本委員から、成果物の評価だけでなく、文章作成前の準備段階の評価も行えるようにすれば、有効な指導につながる可能性があるという指摘を受けた。本取組では、多様なループリックを作成し、活用する計画を立てており、今後、このようなループリックも作成していく予定である。また、小館委員からは、ループリックの活用成果を継続的に評価検証し、教育関連の学術分野において詳しく発信するべきとの指摘を受けた。本取組におけるループリックの活用成果は、学術的にも重要なものであるため、今後、学会等での積極的な成果発表を行っていききたい。

### 4. 授業カリキュラムとの連携について

授業カリキュラムとの連携は、着実な進展を見せておられる。両大学において、授業とライティングセンターとの協力関係が広がっている点を、山本委員と小館委員から評価いただいた。

## 5. 社会との連携について

大学の入り口としての高校との連携、および出口としての企業等との連携を意識し、組織や個人からのフィードバックを継続的に取り入れている点を、小館委員から評価いただいた。高大連携および社会連携については、今後も、多様な連携事業を展開し、社会からの声を本取組に反映させるとともに、成果を大学の外に発信・普及させていきたい。

## 6. その他

平成 28 年度は、取組終了後を視野に入れ、本取組の成果を継続・発展させていくシステム作りが重要となる。本取組では、確立されたライティング／キャリア支援モデルを全国に普及させていくという最終目標が掲げられている。この点について、小館委員から、持続可能な体制作りの必要性の指摘を請けているが、トム・ガリー委員からは、さらに踏み込んだ提言をいただいている。トム・ガリー委員の指摘している、学会での発表や、企業、官公庁、NPO などでのプレゼンテーションなどによる外部への波及、およびライティング教育者間のコネクションの強化は、非常に重要なものであり、この提言を参考にして、平成 28 年度中に、具体的な事業継続の方針を模索したいと考えている。

2016/01/22 山本雄二（関西大学社会学部）

「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング/キャリア支援」  
2015（平成27）年度 内部評価

1. 利用者の増加とラボの定着

ライティングラボの利用者は年々着実に伸びており、関西大学では2015年度には延べ1000人を越えるまでに至った。その要因としては過去の利用者がその利用価値を友人に伝えるなどの伝播効果のほか、総合図書館内に新設されたラーニングcommonsでもラボを実施するなど意欲ある学生のアクセスが容易になったこと、学部の授業や共通教育の授業との連携の増加、昼休みに行われるワンポイント講座など積極的な取り組みが功を奏したものと考えられる。こうした多様な取り組みを展開することによってライティングラボはキャンパス内で一定の存在感を示しはじめていえると言えよう。

2. eポートフォリオの運用と課題

懸案のeポートフォリオは関西大学では2015年4月に予約と指導記録の機能を稼働させ、12月からはポートフォリオ機能を稼働させることができた。ラボの利用者が増加したのも予約機能が稼働したおかげであるとの自己評価はうなずける。一方で、学生が自分の文章力の問題点に気づき、改善し、発信力を高めるための機能が有効に働いているのかどうかについてはたしかではない。

ポートフォリオにおいて評価コメントを文章で書くのはたいへんなことであるし、抽象的になりがちである。それならいっそのこと手書きで添削したものをPDFで貼り付けるなどしたほうが学生にとって自分がどのような点を指摘されたのかを振り返るときにも有効かもしれない。また、ループバックもよく工夫されていると思うが、成果物についての評価のみになっており、文章作成前の準備段階の評価を別に加えれば学習者にとってさらに有効な指導になる可能性があるように思われる。たとえば、課題の意味を整理し、理解を深める作業をしたかどうかとか、テーマに対してトピックを複数考え、自分らしさや具体性の有無などの観点からテーマにふさわしいかどうかを判断したかなどの評価を加えれば応用の利く指導になりうるように思う。

システムは整っているもので、今後は学習者が改善を実感できるような運用を試行錯誤し、改善して、利用者がさらに増えることを期待したい。

3. 講演会について

昨年度の内部評価で「津田塾大学での講演はいずれも実社会でことばと格闘している人の汗を肌で感じるような印象がある」と書いたが、2015年度の講演会報告を見ても同様の印象を受ける。詩人の小池昌代氏が行った講演の感想のひとつに「私も何か書きたくなってきました」というのがありますが、講演会を開催する側にとってはこれ以上のほめことばはないだろう。この違いは校風の違いかもしれない。いずれにしろ、両校で開催される講演会を互いに聞くことができる状況になっているのは好ましいことで、こうした試みは今後も継続される意義があると思われる。

## 内部評価② 小館亮之氏

## ＜考え、表現し、発信する力＞を養うライティング/キャリア支援

## 2015年度内部評価

2016年2月4日

津田塾大学学芸学部情報科学科 小館亮之

平成24年度の事業開始から4年目を迎えた当該事業について、5つの取組内容別にコメントする。

- ・ライティングセンターを中心とした支援体制の再構築

前年度に続き、11の項目において継続的に活動が実施された点は評価できる。特に、ライティング指導において重要な役割を果たすTAの研修を丁寧に行っていること、関西大学においては前年度に引き続き「レポートの書き方ガイド」、津田塾大学においてもガイドブックを作成したことや授業科目との連携を拡充したことなどにより、ライティングラボやライティングセンターの認知度が確実に高まっていることが利用者数の増加や主催したイベントへの参加者数などからもうかがえる。

- ・eポートフォリオシステムの開発

これまで設計、開発を行ってきたシステムのうち、一部の機能の本格的な利用が開始された点は多いに評価できる。今後、実運用を重ねることによってさらなるシステムの改善を期待する。また、昨年度の内部評価コメントを反映して、システムのオープンソース化を予定していることは、当該事業を波及させていくために極めて重要である。

- ・評価指標の確立

ルーブリックの活用については、前年度の試行段階から今年度は検証段階に進んでおり、大きな進捗が見られたようである。その成果については、是非とも継続的に評価検証し、教育関連の学術分野においても詳しく発信してもらいたい。

- ・カリキュラムとの連携

前年の評価コメントを踏まえて課題を検証し、確実に連携が進んでいる。次年度はさらに連携が進むことを期待する。

- ・社会との連携

大学にとっての入り口（高校）と出口（企業等）を意識し、当該事業について組織や個人からのフィードバックを継続的に取り入れている点は評価できる。

- ・その他

両大学間で情報共有を徹底して、丁寧に事業を進めている点は高く評価できる。プロジェクト終了後の平成29年度以降に向けての持続可能な体制づくりに期待する。

関西大学・津田塾大学の取組み「〈考え、表現し、発信する力〉  
を培うライティング／キャリア支援」への提案

本取組みは最終年度を迎えていますので、支援期間終了後にはその成果をどのように継続・発展できるかを中心にコメントします。すでに「中間評価進捗状況報告書」の III. 2. には関西大学、津田塾大学のそれぞれの学内における継続計画、そして両大学間の連携・協力体制の継続が言及されていますので、ここではまだ具体化されていない「確立された支援モデルの全国への普及」について提案します。

まずは、ライティング教育に関係のある学会での発表を積極的に推進すべきです。ライティング指導は例えば初年次教育学会、大学教育学会、日本国語教育学会、全国大学国語教育学会などで取り上げられていることがあるようですので、本取組みの成果であるライティングセンター運営、チューター養成、eポートフォリオシステム利用などに関する知識をそれぞれの学会を通して発信しましたら広く普及されることが期待できます。発表の形式は大会での口頭発表やポスター掲示の他、紀要への投稿も考えられます。発表時期は支援期間中（28年度末まで）でも良いのですが、投稿論文の執筆などには時間が必要でしたら29年度以降でも構いません。

学会での発表の他に、ライティング能力がその従業員に求められている企業、官公庁、NPOなどの団体へのプレゼンテーションも検討すべきです。対象は、関西大学、津田塾大学の卒業生が就職する企業などが特に候補となるでしょう。企業の利益に繋がるアドバイスも含まれるでしょうから、講義料や交通費は企業側が負担できることもあるでしょう。

また、日本の大学でライティング教育に携わっている教育者には、大学院生、特任教員、非常勤教員が多いので勤務先の大学の他部署との繋がりが弱い傾向があります。その半面、複数の大学での勤務経験や数年ごとの所属大学変更などにより、「横」の繋がり、すなわち様々な大学で勤務する教職員とのコネクションが比較的強いはずですが、その「横」の繋がりを活かして、本取組みの先生方が支援期間中にライティング教育やライティングセンター運営などに関するSNSグループ、メーリングリスト、またはF2F会合を積極的に活用して、今後、本取組みの成果をさらに発展させるためにライティング教育者間のコネクション強化を目指すべきです。

最後に、eポートフォリオシステムのオープンソース化が図れるそうですが、オープンソースになっても継続的な改良や広い利用を確保できないソフトが多くあります。支援期間中に、成功したオープンソースソフトの例を分析して、長く続くと期待できる開発体制を確定すべきです。

トム・ガリー (Tom Gally)

東京大学大学院総合文化研究科 教授  
2016.02.07

### 3. 外部評価

#### 外部評価の趣旨および実施方法

両大学および取組の内実に通じた内部の評価委員から評価を受け、具体的な改善に役立てる内部評価に対して、大学と取組の外部に属する評価委員による外部評価は、二つの目的を持つ。

一つは、本取組の中核にあるライティング支援に関して、深い知識と経験を有する学識経験者に、日本の高等教育のめぐるより広い文脈から、取組理念を含めた取組全体に関する問題点の指摘と、改善に向けての提言をいただくことである。

もう一つは、本取組の最終的な目的である、〈考え、表現し、発信する力〉を備えた人間の育成を、社会において有用な人材の育成につなげていくために必要な提言を、アカデミックな場ではなく、大学でのキャリア教育や、企業での人材育成に関わる場で活躍されている方々からいただくことである。

以上のような趣旨から、昨年度に引き続き、下記の方々に外部評価をお願いした。

- ①佐渡島紗織氏（早稲田大学国際学術院教授）
- ②二宮祐氏（日本工業大学工学部共通教育系講師）
- ③高瀬裕子氏（東京大学グローバルリーダー育成プログラム推進室特任専門員・産業カウンセラー・2級  
キャリアコンサルティング技能士）
- ④的場佳子氏（伊藤忠商(株) 関西事務室）

委員には、平成28年1月18日に、本取組に関わる各種資料（内容は、内部評価の資料と同一）を送付するとともに、内部評価委員のコメントおよび自己点検・評価委員会によるまとめの文書を、2月17日に送付し、その内容を踏まえたうえで、評価をいただいた。

#### 外部評価委員からの評価と提言

外部評価委員からは、内部評価の結果を踏まえたうえで、本取組の五つの柱を中心に、さまざまな評価と提言を寄せていただいた。以下、内部評価と同様に、評価と提言の論点を整理するとともに、その問題点と、平成28年度の展開に向けて改善すべき課題を確認したい。

##### 1. ライティングセンターでの支援について

ライティングセンターにおけるライティング支援の充実については、佐渡島委員、的場委員、二宮委員からコメントをいただいた。

佐渡島委員からは、チューターの募集や育成の成果が、利用者の伸びにつながったことを評価いただいたほか、両大学のさまざまな取組に関して、具体的な評価をいただいている。すなわち、個別支援以外の多様な活動、冊子の発行、作文コンテスト、合同研修の実施などである。また、各大学の取組においては、津田塾大学におけるキャリア支援の重視や、関西大学におけるコモンズ内における支援の拡大などの特色を評価いただいた。

的場委員からも、ライティングセンターで支援体制の充実と、利用者数の増加、さらには、利用者の高い満足度などを評価いただいている。

また、二宮委員からは、学習意欲の高い学生の利用だけでなく、大学の学習につまずき、必ずしも前向きでない学生のフォローの重要性と必要性について、ご指摘をいただいている。この指摘は非常に重要なものであり、指摘されているように、学生支援を担当する各部局との連携が不可欠である。今後、両大学で連携体制作りを検討していきたい。

## 2. eポートフォリオシステムについて

eポートフォリオシステムについては、佐渡島委員と高瀬委員からコメントをいただいている。

佐渡島委員からは、eポートフォリオが実用段階に至ったこと、そして、これまでにない支援機能を備えたものになっていることを高く評価していただいた。もちろん、ご指摘にあるように「短期的、中長期的な使用によって学びがどのように行われるのか」の分析はぜひとも必要なものであり、今後、データの収集と分析を進め、必要に応じて発表していきたい。

また、高瀬委員からは、「学生の留学先の教授・講師やインターンシップ先の企業の方からの評価等をポートフォリオの一部として取込んだり、希望に応じて学生の成果をウェブ公開するなど、学生のキャリア全般をサポートすることを目指すのが有益」との指摘を受けている。本eポートフォリオは、教育の場面だけでなく、キャリアサポートも視野に入れており、今後、このような発展的な利用方法を模索していくつもりである。

## 3. 評価指標について

評価指標については、佐渡島委員と高瀬委員からコメントをいただいた。高瀬委員からは、学生の評価に基づいて、ルーブリックの内容の改善を進めていくべきという指摘を受けている。また、佐渡島委員からも、今後の改善への期待が寄せられているが、さらに、自己評価やピア評価のためのルーブリックの作成については、項目や表現に注意すべきだという意見をいただいている。また、ライティングセンターにおける対面支援との調整が必要であるという指摘をいただいている。

いずれの指摘も、今後のルーブリックの改善を図る上で、重要な論点である。今後は、このような点に注意しながら、いっそうの改善を図っていきたい。

## 4. 授業カリキュラムとの連携について

高瀬委員から、大学としての最重要課題であるという指摘を受けている。

## 5. 社会との連携について

的場委員から、eポートフォリオの企業での活用の提言があった。また、企業や官公庁、シンクタンク等へのプレゼンテーションを行い、アドバイザーとして活用すべきというアドバイスをいただいている。今後、このような可能性についても検討していきたい。

## 6. その他

その他、高瀬委員と二宮委員から、取組終了後を踏まえた提言があった。

ひとつは、取組終了後の事業継続のための体制構築を加速化すべき（高瀬委員）であり、そのために、文部科学省の過去の事例を参考にすべきである（二宮委員）という指摘である。

また、この点に関連して、二宮委員からは、ライティング教育者間の連携の促進を図るべきことと、マス・メディアを活用した広報活動を積極的に進めるべきだというアドバイスをいただいている。

これらは、本取組終了後の展開を考える上で、非常に重要な指摘である。最終年度に、取組終了後の事業継続のありかたを、時間をかけて考えていきたいと考えている。

## 外部評価① 佐渡島紗織氏

## 「〈考え、表現し、発信する力〉を養うライティング・キャリア支援」2015年度外部評価

2016年2月23日

早稲田大学国際学術院 佐渡島紗織

## 1. ライティング・センターの整備に関わる取組

関西大学のライティングラボ、津田塾大学のライティング・センターは、それぞれに利用者数を伸ばしており、チューターの募集や育成にかけてきた成果が確実に実っている感がある。両大学ともに、個別支援のみならず、ライティングに関わる活動を広く展開するようになった点も評価できる（ワンポイント講座、ライティング・カフェ、講演会など）。こうした活動は、文章を書き途中で人に見せる習慣のない日本の学生たちにもライティング支援を身近に感じる契機となるであろう。両大学において、書き手向けの冊子を刊行し支援内容を整理した点も評価に値する。ライティング・センターを訪れることに躊躇している学生でも、冊子を頼りに自己のライティングを見直すことができるからである。津田塾大学ではキャリア支援に重点おいたライティング支援を行っているが、授業や学生生活課との連携においてその方針が一貫しており、各々の学生は自分と社会のつながりを考えながら学生生活を送れるであろう。関西大学においては、コモンズの中にもライティングエリアを設け、広い間口でライティング支援を行おうとしている。高校との連携（社会）を意識した作文コンテストも興味深い活動であり、今後の進展が楽しみである。何のために広く募集し何を発信していくのかという、目的を明確にすることで、審査の労が報われていくものと思われる。

両大学のチューターが合同で研修を行った点は、本連携事業ならではの取組であった。院生たちは、日頃、他大学の院生たちと交流する機会がなかなか得られないため、貴重な学びの場となったであろう。ライティング支援技能を、どこまで「マニュアル化」しどこまでをチューターの裁量として捉えるかがそこでのポイントであろう。このポイントは、両大学におけるライティング・センターの個性をどう継承していくかという問題にも繋がる。

## 2. ポートフォリオの開発に関わる取組

eポートフォリオを整備し、実用段階に至ったことは高く評価できる。文章を掲出するばかりでなく、コンテンツを学習者間で共有したり、メンターを招へいしたり、チャット機能を使ったりできるポートフォリオは画期的である。今後、学生がポートフォリオを使用するようになり、学びの質が変化していく様子を見るのが楽しみである。短期的、中長期的な使用によって学びがどのように行われるのかをぜひ分析・発表していただきたい。

## 3. ルーブリックの策定に関わる取組

学生回答アンケートで基準が抽象的だという評をふまえ、開発したルーブリックを修正していくとのことで、今後の発展が楽しみである。書く前の準備段階に関する指標もでき、プロセスを見据えたライティング支援となっている。「質保証の確保において、ルーブリックをさらに多くの科目で共有化していくこと、そして、教員間の連携から得られることが多いため、連携の拡大が求められる」（Ⅲ、別紙② p.3）とあるが、評価指標はそのまま指導内容であることを考えると、どのような科目にも使えるものが有効なのか、多くの教員が望むものを取り入れることが有効なのかの議論を詰める必要があるだろう。さらに、ルーブリックを自己評価やピア評価に用いさせる場合を想定しても、ルーブリックの項目や表現に留意する必要があるだろう。対話によってでしか生まれない書き手の気づきがあるからである。この、ルーブリックの策定とライティング・センター、ラボにおける対面支援との間での調整が今後の課題の一つだと思われる。つまり、ルーブリックに明示する評価指標の選定を学習形態にどれくらい依存させるかを見極める必要があるだろう。この点、「ライティング・センターは、『学生に書く力をつけさせるだけの場所ではなく、広く学修全般に向けての意識を変える契機としてほしい場所』」（Ⅲ、別紙② p.5）という共通認識が誕生したことは非常に高く評価できる。

## 外部評価② 二宮祐氏

### 「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」

#### 平成27年度 外部評価コメント

二宮 祐

日本工業大学工学部共通教育系 講師

内部評価委員のコメントにもとづいて評価いたします。

山本雄二委員による利用者の増加についての評価につきまして、学習意欲の高い学生が参加しているというのはその通りであると思料します。ライティングラボを利用する習慣ができているのはとても好ましいです。他方、大学の授業に躓いている学生、必ずしも学習に前向きになることができない学生への呼び掛けをなお一層お願いしたいと存じます。学生支援を担当する各部署との連携によって可能になることをございます。本当に支援を必要としている学生に手が届かないという大学教育の課題にも関心をお寄せいただければ幸いです。

小館亮之委員によるプロジェクト終了後における持続可能な体制づくりの指摘につきまして、ぜひ文部科学省による「政策課題に特化した誘導型の補助金」の過去の事例を参考にして頂きたく存じます。これまで、GP (Good Practice) や国際化拠点整備事業 (グローバル 30) など様々な補助金政策が進められ、その中には補助期間終了後も取り組みの継続を求めるものもありました。一部には継続することに失敗して、忘れられてしまった事業もあるようです。事業の質・量、その射程、数年間事業を進めてきたスタッフの意欲を維持できる仕組みの構築や、必要であればさらなる外部資金の獲得を検討する必要があるでしょう。

トム・ガリー委員によるライティング教育者間の連携につきましては、大学教授職の需給に関わる問題でもあります。その担い手の多くが雇用の不安定な若手研究者であり、かつ、ライティングを専門分野としているわけではないことが推察されます。そこで、SNS やメーリングリストといった私的な交流のみならず、各大学のプレFD で実施されているような、ライティング教育の経験を証明できる公的証明書を受け取ることや、それを発行する団体の発足など、若手研究者のキャリア形成に資するというプログラムを追加することで持続的に活動できるのではないかと思います。

最後に、トム・ガリー委員の言及に類似することをございますが、より積極的に広報活動をなさることを提案いたします。成功を取めている事業ですから、大学関係者による口コミだけではなくマス・メディアを通じた広報を通じてその意義—「大学での学びのあり方は大きく変わりつつある」—を打ち出す必要があるのではないのでしょうか。

## 外部評価③ 高瀬裕子氏

関西大学・津田塾大学の取り組み「<考え、表現し、発信する力>を培う  
ライティング/キャリア支援」の 平成27年度 外部評価コメント

まず、取組4年目となる今年度に、両大学にて様々な取組が進んだことを高く評価させていただきます。特にeポートフォリオと評価指標の策定の領域においては、具体的な成果物をもって活動ができたことにより、いろいろ見えてくるがあったように拝察いたします。ライティングセンターでの支援も全般的に充実してきており、両大学とも利用人数の増加という成果を出されています。また、関西大学のSF生対象文書作成能向上講習会、津田塾大学のライティングカフェや講演会等、各々の大学の特徴に合った支援をきめ細かく実現された一面も報告されており、前向きな試みとして評価しております。

ループリックとeプラットフォームに関しては、9/12のシンポジウムにて、両大学の取組を興味深く聞かせていただきました。ループリックは日本の大学ではまだまだ新しい取組であると思いますが、大学の教員、学生双方にとって、学修の可視化、改善のツールになる、という点が印象的でした。eプラットフォームに関しては、例えば、学生の留学先の教授・講師やインターンシップ先の企業の方からの評価等をポートフォリオの一部として取込んだり、希望に応じて学生の成果をウェブ公開するなど、学生のキャリア全般をサポートすることを目指すのが有益なのでは、等の感想を持ちました。

来年度はぜひとも、今年度までに作ったことや取り組んだことに対して、学生のフィードバックを得て改良を続けて欲しい、PCDAを実現して欲しいと思います。特にループリックやeポートフォリオは、学生にとっても新しいものなので、最初はわかりにくいかもしれません。学生がそれらのツールをうまく活用して、自主的に学修する姿勢が備わっていくことが本来の目的だと思いますが、そこに行きつくまでにはこれから何段階かの試行錯誤があると思います。その意味から、例えば関西大学のループリックに関する学生の声は参考になります。1/3弱の学生がループリックの使用の効果について「まったくそう思わない」としているのは実に素直な感想で、「抽象的な基準」「尺度の差の不明瞭さ」を改良していくことが求められています。この点においては、今後の両大学の取組に期待します。

最後に、教育カリキュラムと本取組の連動は、大学として最重要課題だと感じました。今年度、両大学とも着実な成果を出されていますが、来年度が最終年であることを鑑み、本取組を両大学それぞれで持続していく体制構築の加速が求められます。また、本取組を通じて構築したインフラやノウハウは、両大学のユニークな強みです。これから入学してくる層の学生や保護者に対して、その強みをアピールしていくことも忘れないでください。

2016年2月29日 高瀬 裕子

(東京大学グローバルリーダー育成プログラム推進室 特任専門員  
・産業カウンセラー・2級キャリアコンサルティング技能士)

#### 外部評価④ 的場佳子氏

「<考え、表現し、発信する力>を培うライティング／キャリア支援」

2015（平成27）年度 外部評価

2016年3月1日

伊藤忠商事（株）関西業務室

的場 佳子

4年目を迎えた関西大学と津田塾大学の協働プロジェクトが、改善を重ね、大変に良いものに仕上がったことに対し敬意を表します。

ライティングラボ、ランティングセンターの認知度アップとその支援体制の充実により、年々、利用者数が増えています。また、利用者の満足度が高い点で、アドバイスの質の高さ・的確さをうかがい知ることができます。

私の日々の業務は、ライティングと言っても過言ではありません。ひとつの仕事に絡む関係者数が多くなっており、時差のある国にいる人と一緒に仕事をする機会が増え、E-mailが重要な伝達のツールとなっています。そして、多忙を極める役員に対しては、明瞭・簡潔な資料を作成する必要があります。若手社員に対して、ライティングの指導をすることも多く、社内に、ライティングラボ、ランティングセンターがあるとどんなにいいかと思います。

また、懸案のeポートフォリオシステムが動き始めたことも喜ばしいニュースです。これがオープンソース化されれば、わが社でも社員研修プログラムの中に組み込めると思います。トム・ガリー教授が指摘されているように、企業や官公庁、シンクタンク等へのプレゼンテーションは、大変に有意義です。彼らをスポンサー兼システム改善のためのアドバイザーとして活用すれば、飛躍的に開発が進むと考えます。

最後になりましたが、本プロジェクトが全国に普及する日が、一日も早く来ることを祈念しております。

## 4. 次年度の展開に向けて

本取組では、年次計画に基づき、2014、2015年度の二年間にわたって、「環境整備と実践」を主目的とした活動を展開してきた。昨年度の活動において力を入れたのは、整備が不十分であったeポートフォリオと評価指標の開発と活用であった。前回の内部評価・外部評価においては、本取組の理念であるライティング／キャリア支援と、ライティングセンターでの具体的な支援については、おおむね高い評価が得られたものの、eポートフォリオ事業の内容と開発スケジュールのあいまいさや、評価指標策定の作業の遅れなどを指摘された。これらの指摘を念頭に、本年度は、事業の全体的な整備とその質の向上を目的に、事業の改善を実施してきたが、本年度の内部評価・外部評価では、その成果を十分に評価いただいたと認識している。

以下、今回の内部評価・外部評価の結果を踏まえ、事業内容ごとに、この一年間を振り返るとともに、最終年度となる次年度の課題を考えたい。

### 1. ライティングセンターでの支援について

ライティング支援に関しては、引き続き、合同研修の充実によって支援の質の向上を図るとともに、利用者のさらなる増加を目指していく。この部分については、今回の評価においても、おおむね高い評価を受けることができた。今後は、支援の対象となる学生の幅をさらに広げて、より多様で広範なニーズに応えていく必要がある。そのために、学内での連携体制をさらに強化していきたい。

### 2. eポートフォリオシステムについて

eポートフォリオシステムの開発については、評価に基づく改善を図った結果、開発作業の透明性が確保されるとともに、開発作業が急速に進展した。その結果、TEC-systemの二つの機能（TEC-book, TEC-folio）の開発を完了し、ライティング支援に活用する段階に至ることができた。今後の課題は、学内での活用促進と、オープンソース化による学外への普及となる。とりわけ、最終年度は、早い時期にオープンソース化を実現し、他大学の活用を図っていく必要がある。

### 3. 評価指標について

評価指標についても、大きく進展し、成果を挙げることができた。両大学でのルーブリックの活用実績は、飛躍的に増加し、また、その内容的な改善も順調に進んでいる。最終年度の取組では、既存のルーブリックのさらなる改善を行うとともに、自己評価指標を含めた多様なルーブリックの開発と、その活用を図っていかねばならない。さらに、ルーブリックを全国に普及させるための体制作りも、次年度内に完了させる必要がある。

### 4. 授業カリキュラムとの連携について

授業カリキュラムとの連携は順調に進展しており、ライティングセンターの支援は、全学のカリキュラムの中に有機的に浸透している。最終年度においても、この流れをさらに推し進め、カリキュラム連携を多角的に推し進めていく必要がある。

### 5. 社会との連携について

社会との連携については、今後も引き続き、ライティングに関する社会のニーズをより広範に調査し、支援に反映させるとともに、ステークホルダーとの連携をより一層推進していく必要がある。

### 6. その他

最終年度の最重要課題は、取組支援期間終了後における事業継続のための体制構築であろう。ライティングセンターの今後のありかたについて、最終年度の間に、長期的な視野に立った青写真を描き、各大学における事業継続を確実に図っていく必要がある。また、それとともに、連携体制の維持も重要となる。これについても、有効な連携体制のありかたを検討し、事業終了後の新組織の設立につなげていきたいと考えている。